和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 5

— 平成 7 （1995）年度 —

太田・黒田遺跡　第26次調査

鷺ノ森遺跡　第 6 次調査

1 9 9 8

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

本年報は、主として当財団が平成７年度に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

和歌山市は、本県の中心部に位置し、市域のほぼ中央を西流する紀ノ川によって広大な和歌山平野を形成し、古代より多くの人々が住みつき数多くの遺跡を残しています。

平成７年度の調査は、市内のほぼ中心部を中心に数多くの調査を行いました。なかでも、太田・黒田遺跡では県内最古の水田跡や耕作に用いられたとみられる広鍬などがみつかりました。また、城下町関連の調査も数ヶ所実施し、貴重な成果をあげています。

このように、新たに得られた学術成果は、郷土の歴史を語る上で、なくてはならないものであります。本書の内容が、私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにする一助になれば幸いです。

発掘調査の実施に際し、多大のご協力をいただいた地元の皆様および本書編集に種々ご教示を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成10年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　木 下 正 昭

例　言

1．本書は、平成７（1995）年度に実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の年次概要を掲載するものである。

2．本書に掲載の調査について、既に報告書を刊行したものもある。未完のものについては報告書が刊行された際には、その報告書をもって正式報告とする。

3．本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に氏名で記載し、編集は井馬好英が行った。

4．埋蔵文化財発掘調査は以下の事務局組織で行った。

【事務局組織（埋蔵文化財関係）】

【平成７年度】

和歌山市教育委員会

教育長	浅井周英（～平成８年２月）
教育長	坂口全彦（平成８年２月～）
文化振興課長	志岐忠一
文化財班長	森田安信
学芸員	前田敬彦
学芸員	益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	筒井敏郎
事務局長	竹尻圭吾
総務課長	別院　稔
事務主任（埋蔵文化財事務担当）	小松義博（～平成７年４月）
事務主任（　〃　）	豊田忠彦（平成７年４月～）
学芸員（埋蔵文化財発掘調査担当）	北野隆亮
学芸員（　〃　）	井馬好英
学芸員（　〃　）	木村善晶(～平成７年８月)
学芸員（　〃　）	木建正宏
学芸員（　〃　）	奥村　薫
学芸員（　〃　）	栗本美香

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

1．太田・黒田遺跡第26次調査……2

2．鳴神Ⅱ遺跡発掘調査……6

3．神前Ⅱ遺跡発掘調査……8

4．太田・黒田遺跡第27次調査……10

5．太田・黒田遺跡第28次調査……12

6．鷺ノ森遺跡第６次調査……18

7．太田・黒田遺跡第29次調査……22

8．史跡和歌山城第14次調査……24

9．寺内古墳群第３次調査……28

10．和歌山城跡第５次調査……34

11．茶臼山古墳第２次調査……36

12．太田・黒田遺跡第30次調査……40

13．鳴神Ⅳ遺跡第７次調査……42

14．鳴神Ⅳ遺跡第８次調査……44

15．岩橋Ⅲ遺跡発掘調査……46

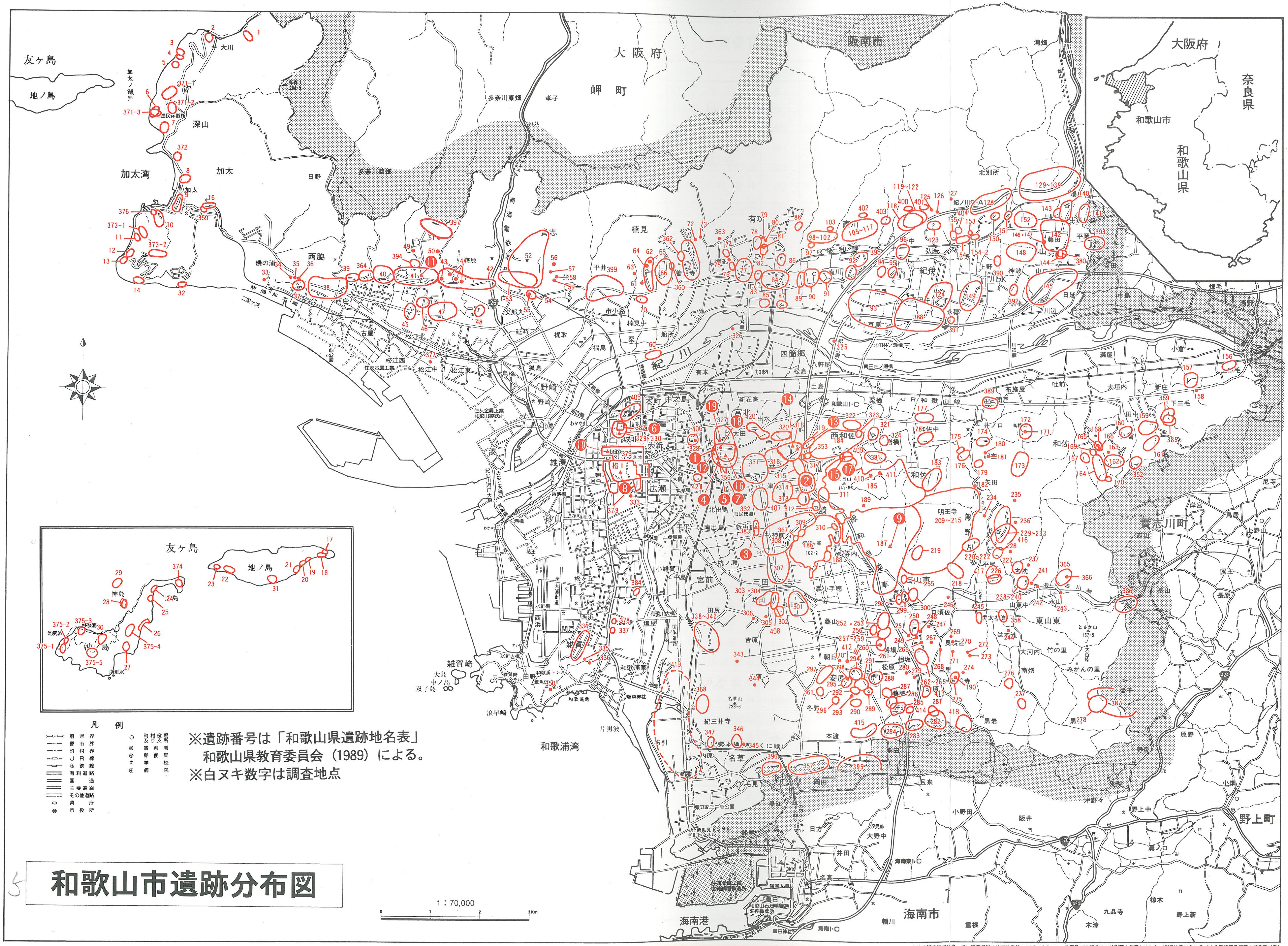
16．太田・黒田遺跡第32次調査……48

17．岩橋Ⅲ遺跡第２次調査……52

18．太田・黒田遺跡第31次調査……58

19．太田・黒田遺跡第33次調査……64

Ⅲ．普及啓発活動……68


和歌山市遺跡分布図
※遺跡番号は「和歌山県遺跡地名表」
和歌山県教育委員会（1989）による。
※白ヌキ数字は調査地点
凡　例
1：70,000
大阪府
阪南市
岬町
友ヶ島
地ノ島
神島
沖ノ島
加太湾
加太
深山
西脇
磯の浦
紀ノ川
和歌山市
奈良県
和歌山県
和歌浦湾
雑賀崎
海南市
海南港
貴志川町
野上町
和佐
紀伊
川永
東山東
この地図の作成に当っては建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図及び５万分の１地形図を使用しました。
この地図の無断複製を禁じます。1993・9

5

和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会〈1996年〉より作成。）5

遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称	遺跡番号	名称
1	報恩講寺遺跡	46	木本小学校Ⅱ遺跡	93	田屋遺跡	136	山口8号墳	179	和佐寺跡	252	千石山5号墳	296	大池遺跡	341	三田3号墳	382	本願寺跡
2	大川西方遺跡	47	榎原遺跡	94	府中Ⅱ遺跡	137	山口9号墳	180	禰宜1号墳	253	千石山古墳群	297	赤津古墳群	342	三田4号墳	383	神前Ⅱ遺跡
3	藻江遺跡	48	中野遺跡	95	府中Ⅲ遺跡	138	山口10号墳	181	禰宜2号墳	254	菖蒲谷遺跡	298	吉礼貝塚	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡
4	しょうぶ谷遺跡	49	城山古墳	96	府中遺跡	139	山口11号墳	182	和坂古墳	255	吉礼Ⅲ遺跡	299	西吉礼遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群
5	水谷遺跡	50	権現山1号墳	97	北山Ⅰ遺跡	140	山口廃寺跡	183	和佐古墳群	256	千石山遺跡	300	東吉礼遺跡	345	内原古墳	386	大池遺跡
6	男良の谷遺跡	51	権現山2号墳	98	北山1号墳	141	中筋日延遺跡	184	花山古墳群	257	井戸1号墳	301	和田遺跡	346	内原遺跡	387	大旗山城跡
7	深山遺跡	52	高芝遺跡	99	北山2号墳	142	山口遺跡	185	岩橋千塚古墳群	258	井戸2号墳	302	和田岩坪遺跡	347	名草貝塚	388	西田井遺跡
8	大谷川遺跡	53	高芝古墳群	100	北山3号墳	143	谷遺跡	186	井辺前山古墳群	259	井戸3号墳	303～304	和田古墳群	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡
9	加太遺跡	54	栄谷貝塚	101	北山4号墳	144	里遺跡	187	寺内古墳群	260	馬場古墳	305	竈山神社古墳	352	金谷廃寺跡	390	神波遺跡
10	加太南遺跡	55	貴志古墳	102	北山5号墳	145	川辺遺跡	188	森小手穂遺跡	261	馬場遺跡	306	坂田地蔵山古墳	353	興徳寺跡	391	永穂遺跡
11	平の谷遺跡	56	川原崎遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	146	藤田古墳	189	寺内ナイフ形石器出土地	262	東池1号墳	307	神前遺跡	356	太田城跡	392	楠本遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	57	川原崎1号墳	104	北山6号墳	147	硲古墳	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	263	東池2号墳	308	井辺遺跡	357	山崎山古墳群	393	吉田遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	58	川原崎2号墳	105	直川八幡山1号墳	148	藤田遺跡	209～215	山東古墳群	264	東池3号墳	309	岡崎縄文遺跡	358	山東中遺跡	394	城山遺跡
14	船出遺跡	59	川原崎3号墳	106	直川八幡山2号墳	149	宇田森遺跡	218	若林古墳群	265	東池4号墳	310	森小手穂埴輪窯跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡村遺跡
16	加太駅北方遺跡	60	国有本遺跡	107	直川八幡山3号墳	150	上野廃寺跡（紀伊薬師寺跡）	219	吉礼砂羅谷窯跡	266	吉里銅鐸出土地	311	大日山Ⅰ遺跡	360	雨が谷遺跡	396	室山古墳群
17	藻崎北浜遺跡	61	大谷古墳	108	直川八幡山4号墳	151	上野遺跡	220	平尾1号墳	267	小山古墳	312	井辺Ⅰ遺跡	361	冬野遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡
18	藻崎南浜遺跡	62	晒山古墳郡	108－2	直川八幡山14号墳	152	上黒谷遺跡	221	平尾2号墳	268	奥須佐窯跡	313	井辺Ⅱ遺跡	362	鳴滝遺跡	398	府中Ⅳ遺跡
19	藻崎西方遺跡	63	慶円寺裏山古墳	109	直川八幡山5号墳	153	北野窯跡	222	平尾3号墳	269	円満寺古墳	314	鳴神Ⅱ遺跡	363	園部円山古墳	399	平井遺跡
20	神前東浜遺跡	64	晒山11号古墳	110	直川八幡山6号墳	154	北野遺跡	226	楠古墳群	270	峯古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	400	深谷池北遺跡
21	神前西浜遺跡	65	晒山12号古墳	111	直川八幡山7号墳	154－2	北野Ⅱ遺跡	227	足守神社古墳群	271	西光寺窯地	316	鳴神Ⅳ遺跡	365	永山遺跡	401	名草池北遺跡
22	屋敷浜遺跡	66	雨が谷古墳群	112	直川八幡山8号墳	155	若宮池遺跡	228	赤山古墳	272	吉里1号窯跡	317	鳴神貝塚	366	永山古墳	402	湯谷池西遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	70	楠見遺跡	113	直川八幡山9号墳	156	上三毛遺跡	229	塩谷1号墳	273	吉里2号窯跡	318	鳴神Ⅴ遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	403	平野池南遺跡
24	一色谷遺跡	71	鳴滝古墳群	114	直川八幡山10号墳	157	下三毛遺跡	230	塩谷2号墳	274	頭陀寺古墳	319	音浦遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
25	柏の浜遺跡	72	奥出古墳	115	直川八幡山11号墳	158	小山古墳	231	塩谷3号墳	275	頭陀寺遺跡	320	鳴神Ⅵ遺跡	369	奥山田遺跡	405	山吹丁遺跡
26	深蛇池遺跡	73	有功経塚	116	直川八幡山12号墳	159	寺山古墳群	232	塩谷4号墳	276	大将軍窯跡	321	岩橋遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友田町遺跡
27	垂水遺跡	74	薗部Ⅰ遺跡	117	直川八幡山13号墳	160	東国山古墳群	233	塩谷5号墳	277	有ノ木窯跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	371	深山要塞跡	407	津秦Ⅱ遺跡
28	神島遺跡	75	薗部古墳	118	八王寺山古墳群	161	宮山古墳群	234	新出古墳	278	宝光寺跡	323	栗栖Ⅱ遺跡	371－1	深山第1砲台跡	408	和田Ⅱ遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	76	薗部Ⅱ遺跡	119	橘谷Ⅰ遺跡	162	小倉古墳群	235	明王寺経塚	279	松原1号墳	324	高橋神社遺跡	371－2	深山第2砲台跡	409	岩橋Ⅲ遺跡
30	野奈浦遺跡	77	有功遺跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	163	小倉9号墳	236	矢田古墳	280	松原2号墳	325	紀ノ川銅鐸出土地	371－3	男良砲台跡	410	前山B226号墳
31	ハイブの浦遺跡	78	池田遺跡	121	橘谷Ⅲ遺跡	164	明楽古墳群	237	北池古墳	281	滝ケ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
32	浜遺跡	79	有功古墳	122	橘谷銅鐸出土地	165	小倉神社1号墳	238	殿山1号墳	282	滝ケ峯遺跡	327	太田・黒田遺跡	373	田倉崎砲台跡	412	城ノ前1号墳
33	磯ノ浦1号墳	80	大同寺墳墓	123	弘西遺跡	166	小倉神社2号墳	239	殿山2号墳	283	薬勝寺南山古墳群	328	吉田窯跡	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
34	磯ノ浦2号墳	81	大同寺古墳	124	北田井遺跡	167	モント古墳群	240	殿山3号墳	284	仁井辺遺跡	329	鷺ノ森遺跡	375	友ケ島要塞跡	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
35	磯ノ浦3号墳	82	大同寺遺跡	125	別所1号墳	168	小倉神社境内遺跡	241	土井山古墳	285	薬勝寺跡	330	鷺ノ森窯跡	375－1	友ケ島第1砲台跡	415	本渡遺跡
36	磯ノ浦4号墳	83	法然寺遺跡	126	別所2号墳	169	金谷遺跡	242	丸山古墳	286	薬勝寺遺跡	331	秋月遺跡	375－2	友ケ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
37	磯脇遺跡	84	六十谷遺跡	127	別所3号墳	170	奥池遺跡	243	高岡古墳	287	松原Ⅰ遺跡	332	津秦遺跡	375－3	友ケ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
38	西庄遺跡	85	和田遺跡	128	上野古墳群	171	高積山遺跡	244	桜山古墳	288	松原Ⅱ遺跡	333	岡の里古墳	375－4	友ケ島第4砲台跡	418	滝ケ峰Ⅱ遺跡
39	平の下遺跡	86	西辻遺跡	129	山口1号墳	172	薬徳寺跡	245	伊太祈曽神社古墳群	289	薬師谷遺跡	334	関戸遺跡	375－5	友ケ島第5砲台跡	419	紀三井寺塩田跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡	87	川口遺跡	130	山口2号墳	173	城ケ峯城跡	246	チショ古墳	290	江南遺跡	335	関戸古墳	376	行者堂東遺跡	420	太田城水攻め堤跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡	88	六十谷古墳群	131	山口3号墳	174	禰宜Ⅰ遺跡	247	城ケ森1号墳	291	曽垣田遺跡	336	天神山古墳	377	松江経塚	421	木広町遺跡
42	木ノ本Ⅲ遺跡	89	直川遺跡	132	山口4号墳	175	禰宜Ⅱ遺跡	248	城ケ森2号墳	292	曽垣田Ⅱ遺跡	337	秋葉山貝塚	378	猊口石岩陰遺跡	指1	史跡和歌山城
43	木ノ本経塚	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	133	山口5号墳	176	禰宜貝塚	249	城ケ森3号墳	293	曽垣田古墳	338	アンドの鼻古墳	379	和歌山城跡		
44	釜山古墳群	91	高井遺跡	134	山口6号墳	177	河南中学校北方遺跡	250	城ケ森遺跡	294	城ノ前Ⅱ遺跡	339	三田1号墳	380	山口御殿跡		
45	木本小学校Ⅰ遺跡	92	鳥井遺跡	135	山口7号墳	178	和佐中遺跡	251	相坂古墳	295	城ノ前Ⅰ遺跡	340	三田2号墳	381	岩橋Ⅱ遺跡		

Ⅰ．はじめに

和歌山市における平成７（1995）年度の本財団の発掘調査受託事業は11件である。

調査に至った原因としては、事務所建設などの民間受託と公共的な調査とにほぼ二分することができる。また、和歌山市教育委員会が直接調査を行った事業では個人住宅の建築に伴うものなどが８件を数えることができる。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

弥生時代　弥生時代では、太田・黒田遺跡において８件の調査が行われており、極めて多い。特に、第26次調査では前期の大溝や中期の水田跡などを検出し、また第28次調査では良好な弥生土器が多数出土している。

古墳時代　古墳では釜山古墳群の茶臼山古墳において後円部の調査が行われ、墳形がほぼ明らかとなった。また寺内古墳群においては石室の残欠を２ヶ所確認した。平野部では鳴神周辺の調査が行われている。

奈良～平安時代　岩橋Ⅲ遺跡において新たに平安時代の遺構、遺物が出土した。また太田・黒田遺跡第33次調査では同時代の土地区画に関するとみられる溝を検出した。室町時代では同遺跡で太田城との関わりを検討できる遺構を多数検出している。

江戸時代　江戸時代では鷺ノ森遺跡や史跡和歌山城に関する調査がある。それぞれの調査で石垣・礎石等を検出した。

【1995年度調査一覧表】

番号	調　査　名	原　因	調査期間	面積	調　査　概　要	担当者名	備　考
1	太田・黒田遺跡第26次	専門学校建設	４月～５月	340m²	弥生時代前期の大溝、中期の水田跡を検出	井馬	
2	鳴神Ⅱ遺跡	個人住宅建設	４月～５月	73m²	古墳時代の溝・土坑を検出	前田	市教委調査
3	神前Ⅱ遺跡	鉄塔建替え	４月～５月	30m²	古墳時代の遺物包含層を確認	前田	市教委調査
4	太田・黒田遺跡第27次	集合住宅建設	５月～６月	27m²	弥生時代中期の甕棺を検出	益田	市教委調査
5	太田・黒田遺跡第28次	集合住宅建設	５月～６月	70m²	弥生時代中期の甕棺や墳墓に関係した溝を検出	前田	市教委調査
6	鷺ノ森遺跡第６次	事務所建設	６月	45m²	鍛冶屋町の一部を検出	栗本	
7	太田・黒田遺跡第29次	駐車場案内システム建設	７月	６m²	平安時代の土坑を検出	前田	市教委調査
8	史跡和歌山城第14次	キャブシステム埋設	７月	30m²	御勘定門の礎石と西外堀の石垣を検出	奥村	
9	寺内古墳群第３次	開発計画	10月	80m²	石室の残欠２ヶ所と排水溝を検出	木建	
10	和歌山城跡第５次	公共施設建設	10月	90m²	西外堀の内部調査	栗本	
11	茶臼山古墳第２次	石垣改修	10月～11月	123m²	古墳の前方部を検出、墳形の復元	井馬	
12	太田・黒田遺跡第30次	事務所建設	12月	18m²	弥生時代中期の溝を検出	前田	市教委調査
13	鳴神Ⅳ遺跡第７次	個人住宅建設	12月～１月	２m²	古墳時代の土坑を検出	前田	市教委調査
14	鳴神Ⅳ遺跡第８次	個人住宅建設	12月～１月	10m²	古墳時代の遺物包含層を確認	前田	市教委調査
15	岩橋Ⅲ遺跡	道路敷設	１月	50m²	平安時代の柱穴群などを検出	奥村	
16	太田・黒田遺跡第32次	寺院改築	１月	10m²	弥生時代の土器・石器が多数出土	北野	
17	岩橋Ⅲ遺跡第２次	道路敷設	２月	50m²	平安時代と江戸時代の遺構を検出	木建	
18	太田・黒田遺跡第31次	下水道管埋設	２月～３月	35m²	遺跡の基本層序の確認。中世末の遺構を検出	栗本	
19	太田・黒田遺跡第33次	事務所建設	３月	170m²	弥生時代の遺構、平安時代の土地区画溝を検出	北野	

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

1．太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡　第26次調査

調 査 地　和歌山市太田383番地

調査面積　340m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川南岸の平野でも微高地にあたる地点である。この遺跡は弥生時代前期に始まる集落として特に著名であり、これまでの調査において弥生時代前期から中期にいたる竪穴住居跡や井戸、土壙墓など数多くの遺構、銅鐸や多量の壺・甕などの遺物を検出している。

また中世に存在したとされる太田城跡では、豊臣秀吉の紀州攻めによる太田城の水攻めがよく知られるところである。しかし、当時の太田氏に関わる史料は、江戸時代の文献にわずかに残るのみで城の位置を含め正確な記録は伝わっていない。この太田城も現在では地中に埋もれ、太田の地に「城跡」という小字を残すのみである。近年の太田・黒田遺跡の発掘調査において幅10m、深さ３mを測る中世の大溝が発掘され、太田城と何らかの関わりをもつ遺構として注目されている。この第26次調査は、和歌山YMCA福祉医療専門学校の建設に伴うもので、遺跡の西側縁辺部にあたる。

調査内容

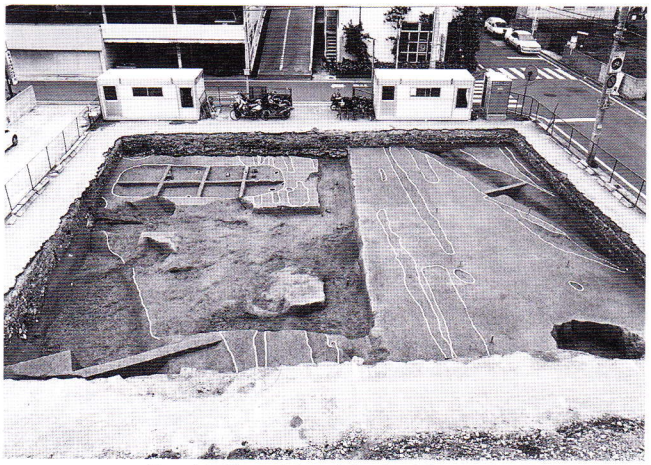
当調査地の基本層序は、まずアスファルトの直下において近代以降の整地層が約60cmの厚みで堆積し、この整地層の下に旧耕作土及び室町時代から江戸時代前半の遺物を含む床土が堆積している。この床土の下面が、第１遺構面である。この面より検出した遺構の時期は、弥生時代中期中葉から16世紀中葉に至るものが存在する。第１遺構面より下層の状況は、弥生時代中期前葉の遺物包含層が堆積している。この遺物包含層の下面が弥生時代前期後葉から中期前葉にかけての第２遺構面である。また第２遺構面より下層の状況は、弥生時代前期の遺物包含層がほぼ水平堆積することを確認し、さらにこの層より下層には遺物が含まれていないことを確認した。このことから、

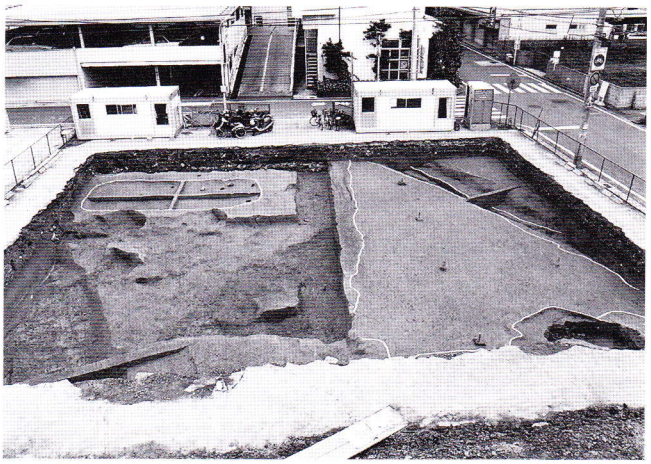
調査位置図

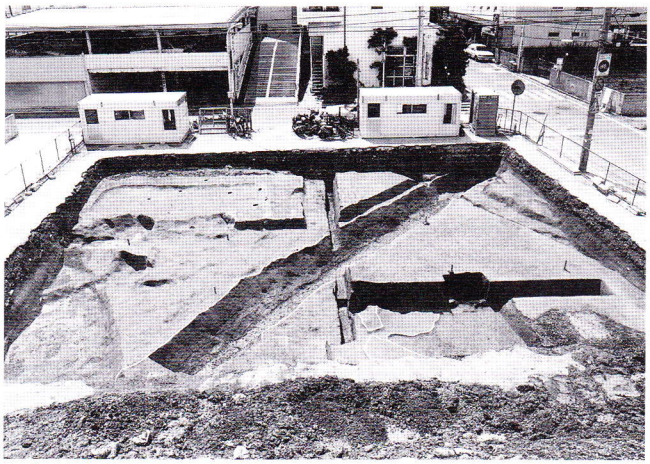
無遺物層（標高1.6m）、第２遺構面（標高2.2m）、第１遺構面（標高2.8m）、江戸時代の水田（標高3.0m）、現代の生活面（標高3.6m）と約2,200年にかけての堆積状況を確認した。

遺構は第１遺構面で16世紀中頃の大溝や弥生時代中期中葉から古墳時代前期にかけての水田や溝を検出し、また第２遺構面で弥生時代前期後葉から中期前葉までの大溝や土坑、水田を検出した。

まず第１遺構面で検出した弥生時代中期中葉の水田は、調査区のほぼ中央を東西に貫く大畦畔により南北に分かれる二つの水田区画がある。大畦畔より南側に位置する水田は、南北に長い隅円方形のプランを呈する単一的な水田であり、長辺7.8m、短辺3.3mを測る。水田耕土は、水田耕作による影響が強くみられた。覆土中に含まれた遺物は比較的希薄であったが、弥生時代中期中葉の壺や石庖丁が出土している。また大畦畔より北側の水田は調査区北側ほぼ全面に広がるもので、水口と考えられる括れ部を南東端において検出している。


第１遺構面（中・近世）（東から）


第１遺構面（弥生時代中期中葉から古墳時代）（東から）


第２遺構面（弥生時代前期後葉から中期前葉）（東から）

調査区南東端で検出した中世の大溝は、出土遺物より太田城跡が存在したとされる16世紀に存在したもので、全体の規模は不明ながら残存部で幅６m以上、遺構検出面よりの深さ95cmを測る。この大溝からの出土遺物は多量の弥生土器などを含むが、覆土中から出土した瀬戸灰釉皿から少なくとも16世紀中葉頃には埋没が進んだことが窺え、さらに覆土全体において17世紀代の遺物を含まないことから16世紀末には完全に埋没したことが明らかである。また特殊な遺物は、火縄銃の玉とみられる鉛玉が出土している。

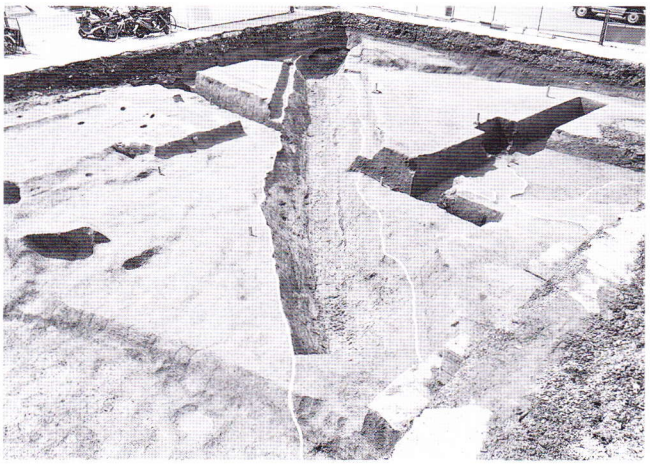
次に第２遺構面の状況は、まず調査区の南東端から北西隅にかけて対角的にのびる弥生時代前期後葉の大溝がある。この大溝は幅約2.3m、良好な部分での深さは検出面から1.2mを測り、断面がＶ字状に掘られた遺構である。覆土は砂礫・粗砂・細砂が主体となり、レンズ状の堆積がみられた。また出土遺物は希薄であったが、最下層から出土したものに極めて珍しい直柄広鍬がほぼ完形の状態で見つかっている。

第２遺構面の水田は弥生時代中期前葉に遡る二面の水田を確認している。水田の範囲は

トレンチなどの状況から調査区のほぼ中央から北側全面に広がるものとみられる。これらの水田の水口も上面の水田同様の南東端に検出した。

このほか第２遺構面では楕円形や不定形の土坑を二基検出している。これらの土坑は水田より古い時期のもので底面一面には約２cmの厚みで炭層が堆積している。出土遺物は比較的多く、弥生時代前期後葉の壺や甕、大型の石庖丁や石斧などが含まれていた。

次に、出土遺物では弥生時代の畿内Ⅰ様式の新段階からⅡ様式の古段階に併行するとみられる壺や甕がある。壺は広口壺の口縁外端面に刻み目を施すものが多くをしめ、ヘラ描き沈線文や櫛描き直線文により加飾している。体部外面の調整は丁寧なヘラミガキ調整によっている。また甕は体部下半部をヘラ削り調整するいわゆる「紀伊型甕」が主流である。しかし、特異なものに遠賀川系タイプの甕の体部に張り付けによる突帯を施し、さらに刻み目をいれる紀伊型との折衷タイプのものがある。


弥生時代前期後葉の大溝（南東から）

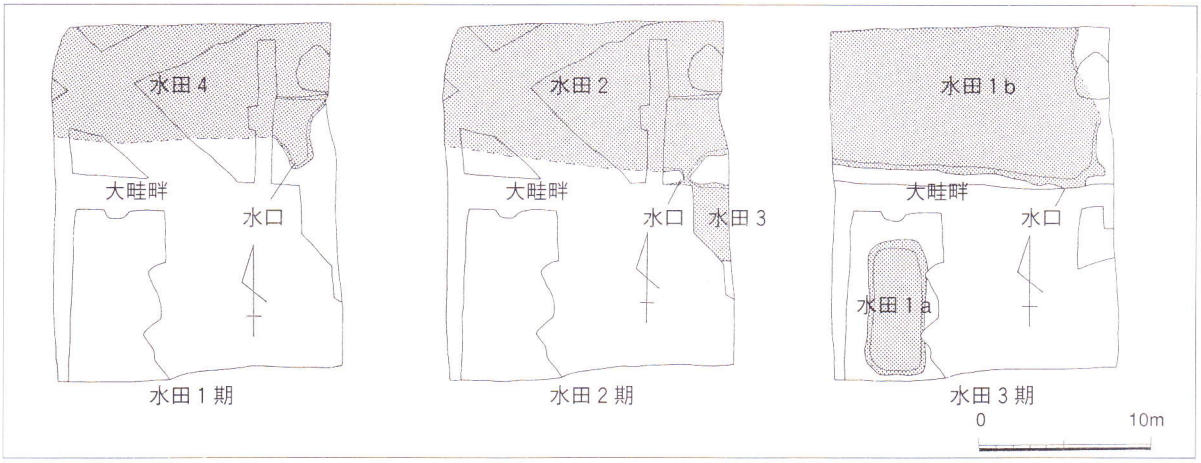
大溝の土層堆積状況（北西から）

大溝出土の広鍬（北西から）

このほか、古墳時代の須恵器、土師器や平安時代の土師器などがある。また中世の遺物には輸入陶磁器である中国製の青磁・白磁・染付や常滑の大甕、瀬戸美濃の灰釉皿などが出土している。

次に、石器は弥生時代の石庖丁、石斧、叩き石、石台や中世末に使用されたとみられる火打石などが出土している。石庖丁はすべて半月形を呈し、緑色片岩の石材を用いた磨製のもので、復元すると刃渡り15cm程度のものがほとんどである。なかでも弥生時代前期の土坑から出土した大型の石庖丁は、特徴的である。石斧は良質な粘板岩系の石材を用いた片刃石斧と砂岩製の磨製石斧がある。叩き石及び石台はともに和泉砂岩の自然石を用いたものである。

金属製品には火縄銃の玉とみられる鉛玉が３点と中国の宋銭である政和通宝が１点出土している。また木器は弥生時代前期の大溝から出土した直柄広鍬が１点ある。この広鍬は舟形突起をもつ鍬身の部分で、共伴する遺物より弥生時代前期後葉のものとみられる。



水田変遷図

まとめ

第２遺構面で検出した弥生時代前期後葉の大溝は、これまでの調査では検出例のない遺構である。この大溝は、先に触れたとおり大規模なもので、断面がＶ字状に掘削された溝である。この遺構の用途は耕作に要する用水路や集落をとりまく環濠が考えられるが、位置的に集落の縁辺部に掘削されたものであり、今後の調査によるその展開が興味深いものである。しかし、最下層から出土した直柄広鍬よりすでに農耕が行われていたことが明らかであり、この大溝が機能していた時期には周辺において耕作が営まれていたことが認められる。

次に、弥生時代中期における水田についてふれる。これまで和歌山県下において確認されていた最古の水田区画は、鳴神Ｖ遺跡で発見された古墳時代前期のものであった。しかし、この調査で検出した水田はさらに300年ほど遡る弥生時代中期のものであり、県下最古の水田として位置づけられるものである。当調査地は太田・黒田遺跡の中心部に比べ同時期の遺構検出面が30cm程度下回る微高地の縁辺部にあたり、この微低地に生産域である水田を構えたことがわかる。水田は耕作面の高さより３時期の水田が検出され、弥生時代中期前葉から中葉にかけて連続したものであったものとみられる。水田の耕土はすべて水田耕作によるとみられる強い灰色化現象が顕著に現れ、さらにプラント・オパール分析の結果、すべての水田耕土とみられる土壌からイネのプラント・オパールが一定量検出されている。また水田の構造では水田を区画する畦畔や水口が確認できた。これらは３時期の水田にほぼ共通する位置関係にあることを確認した。

最後に当遺跡の中世の様相であるが、まず16世紀代に存在したとみられる大溝が調査区の南東端で検出し、太田城との関係が注目されるところである。しかし、この大溝は既往の調査で検出されている濠状遺構に比べ規模が小さく一連のものとは考えがたい。このことから、大溝は太田城が存在したとされる時代に併行する遺構であり、また包含される鉛玉から周辺は中世末の戦禍にあったものとみられる。（井馬好英）

【参考文献】

『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995

2．鳴神（なるかみ）Ⅱ遺跡 発掘調査

調 査 地　和歌山市鳴神1084-3番地他

調査面積　73m²

位置と環境

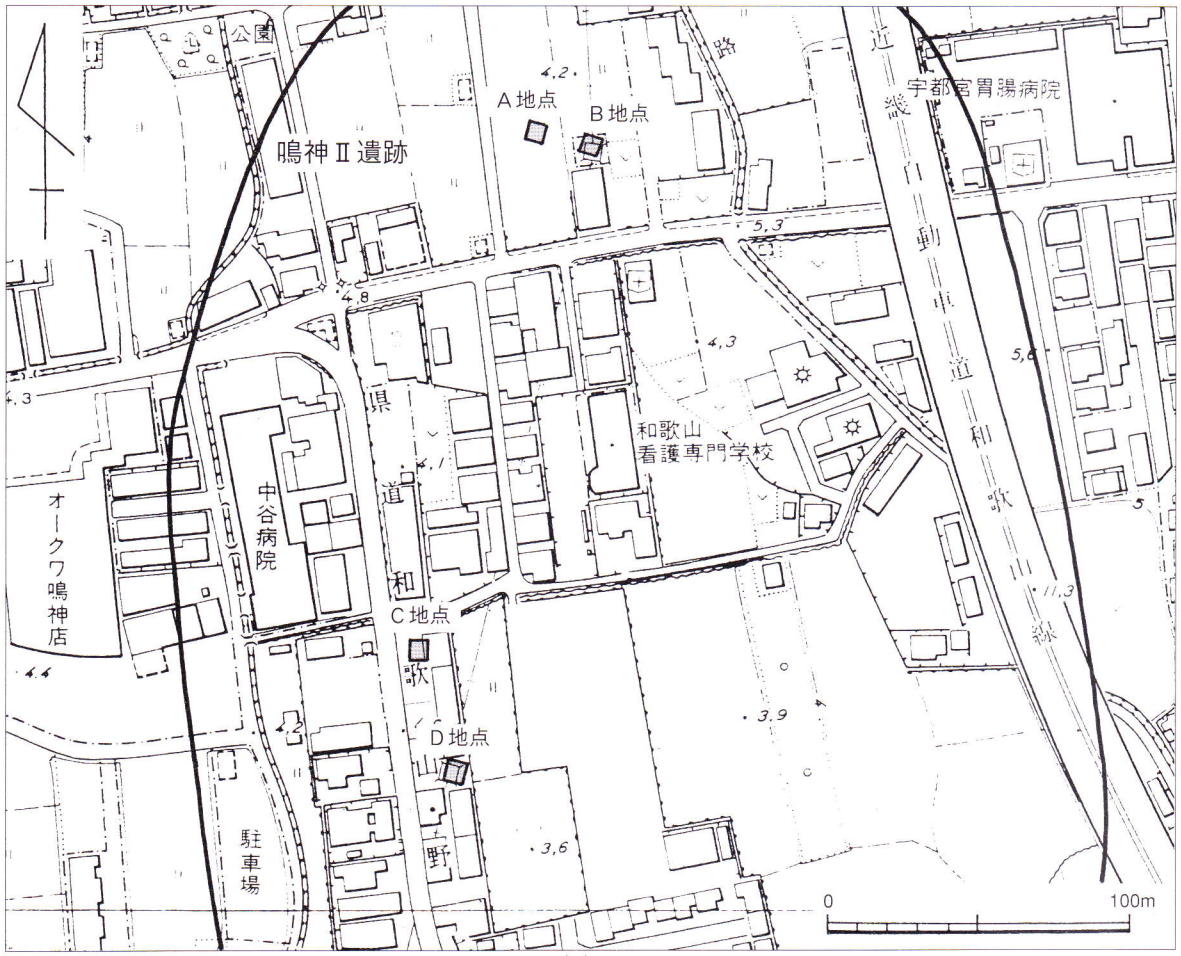
鳴神Ⅱ遺跡は、岩橋千塚古墳群の所在する岩橋丘陵の西側平野部に立地する遺跡であり、北には鳴神Ⅲ遺跡、南には大日山Ⅰ遺跡が隣接して所在している。本遺跡は、近畿自動車和歌山線の建設に伴い、昭和44～45年に和歌山県教育委員会・和歌山県文化財研究会により調査され、古墳時代中期に整備された幅７～８m、深さ約３mの溝が検出されている。溝からは、建築部材・農工具・家具類等の木製品が出土している。今回は、電力送電線の鉄塔建て替えに伴う調査を実施した。

調査内容

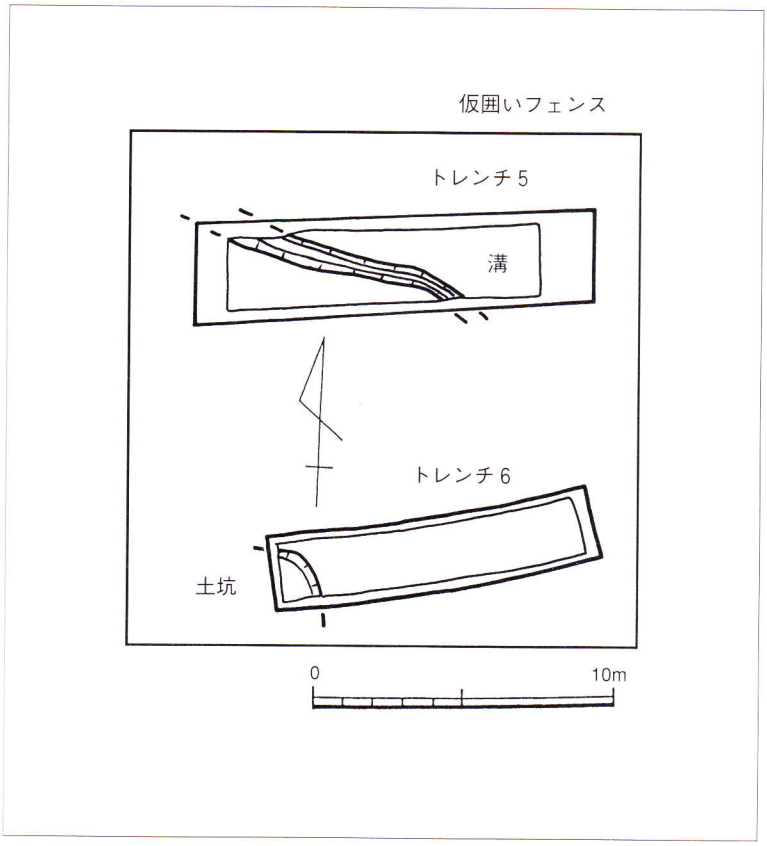
仮設鉄塔を設置する必要があったため、調査地点はA～D地点の４ケ所にわたった。

A地点　幅1.5m、長さ９m前後のトレンチを仮設鉄塔予定地の東西に設定した。東側のトレンチ１では、床土下で調査区中央から北へ向かい緩やかに傾斜する堆積土が確認され、トレンチ２では、古墳時代中期から鎌倉時代までの土器片を含む直径約３m、深さ16cmの浅い土坑が１基検出された。

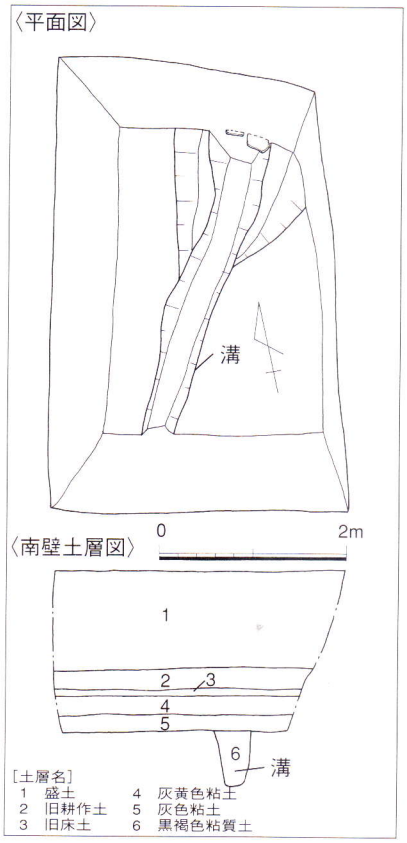
B地点　鉄塔を撤去した後に、幅1.6m、長さ5.3mのトレンチを２本（トレンチ３・４）設定したが、明確な遺構は確認されなかった。



調査位置図



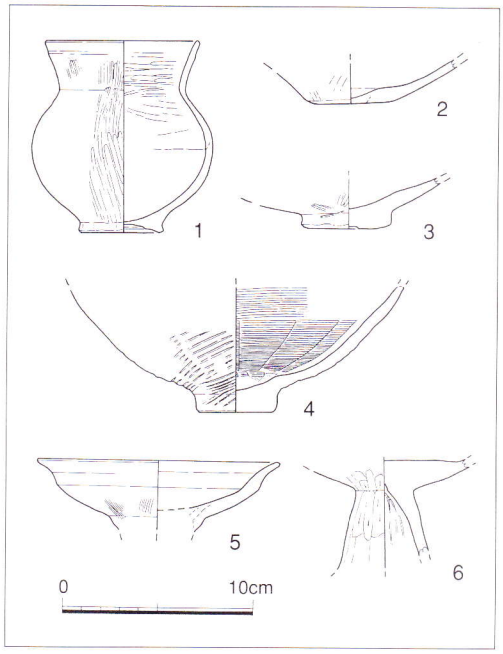
C地点　平面図



D地点　実測図

C地点　仮設鉄塔予定地にトレンチ５・６を設定した。トレンチ５では、地表下1.4mで弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器を包含する厚さ約10cmの灰茶褐色粘質土とその下面で同時期と推定される幅20～40cm、深さ５～17cmの東西方向の小溝を検出した。底面レベルよりみて東から西へ流れていたようである。トレンチ６西端で、トレンチ５とほぼ同じ層位で円形プランをもつ深さ15cm前後の土坑が検出された。

D地点　盛土下の２～５層からは、瓦器片と磨滅した土師器が微量出土した。５層下面で、黒褐色粘質土を埋土とする幅40～60cm、深さ40～60cmの小溝を検出した。この溝の中層から上層において多量の土器が出土した。完形ではないものの大振りな破片が多く、器種としては、甕が多く、高杯、壺も確認された。弥生時代後期末から古墳時代初頭の所産とみられる。



遺物実測図（D地点溝出土）

まとめ

遺跡推定範囲西側の４地点における調査により、古墳時代の溝・土坑等が検出された。特に、D地点で検出された溝は、幅が狭い割に深い形態の明確な遺構であり、弥生時代から古墳時代への移行期のいわゆる庄内式併行の土器を多く包含していた点でも留意された。　（前田敬彦）

3．神前（こうざき）Ⅱ遺跡　発掘調査

調 査 地　和歌山市神前162-1番地

調査面積　30m²

位置と環境

神前Ⅱ遺跡は、県内最大級の前方後円墳である井辺八幡山古墳の所在する標高100mの福飯ケ峰北西方向約１kmの平地に位置する遺跡である。近年、遺物の表面採集により発見された遺跡であり、南北約300m、東西約100mの範囲と推定されている。東方約100mには、広い範囲をもつ井辺遺跡が展開している。今回、宅地造成計画に対処するため、７ケ所のトレンチによる確認調査を実施した。

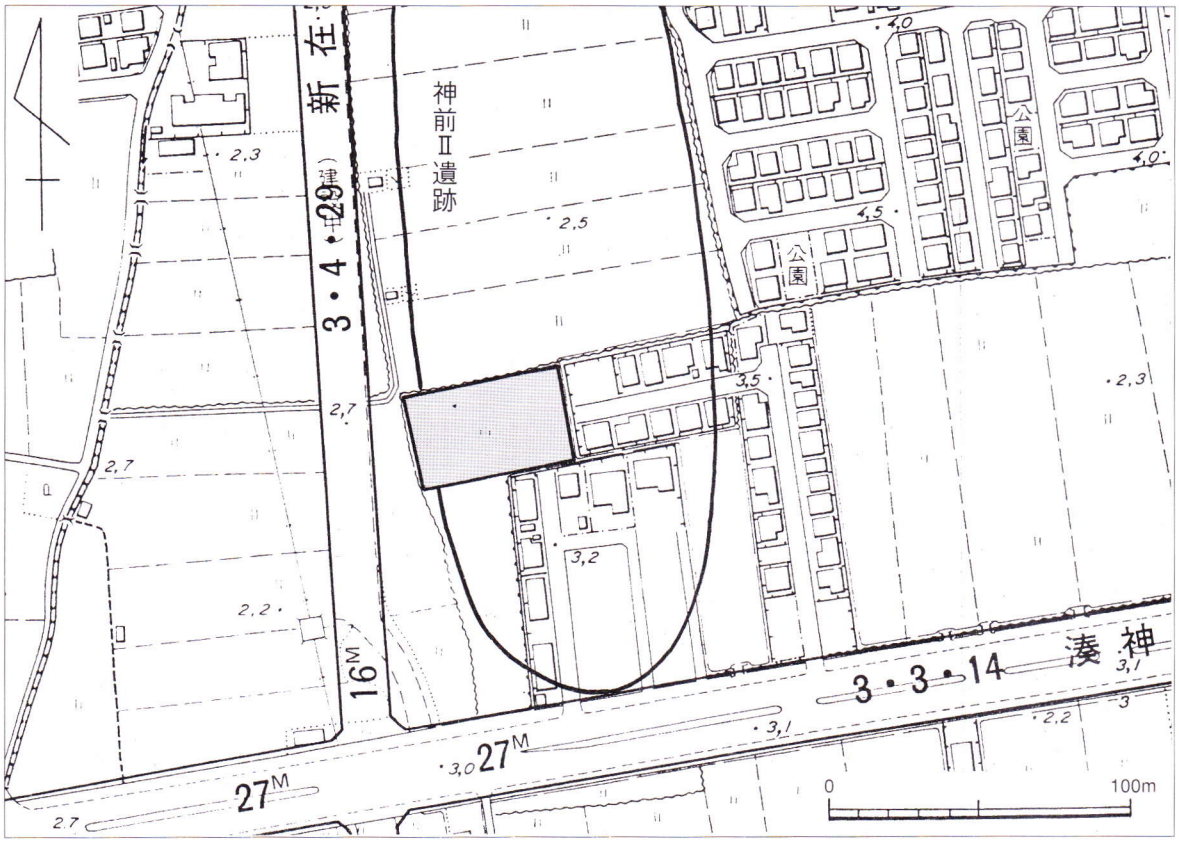
調査内容

調査対象地の水田内にトレンチ１～７を設定し調査を実施した結果、西・南地区（トレンチ３～７）において遺物包含層が確認された。

トレンチ１・２では、地表より耕作土（１層：厚さ25cm）、床土と灰黄色粘土（２層：厚さ10cm）、黄灰茶色粘土（３層：厚さ10cm）、灰褐色粘土（４層：厚さ20cm）が堆積していた。３層より磨滅した土師器片５点と瓦器片１点が出土した。

トレンチ３～５では、灰褐色粘土（３層）の下層に黒褐色粘土（４層）が南から北へと傾斜しながら堆積しているのが確認された。トレンチ３では４層下面には３ケ所で木片が確認され、４層内より土師器二重口縁壺の口縁部の破片が出土した。

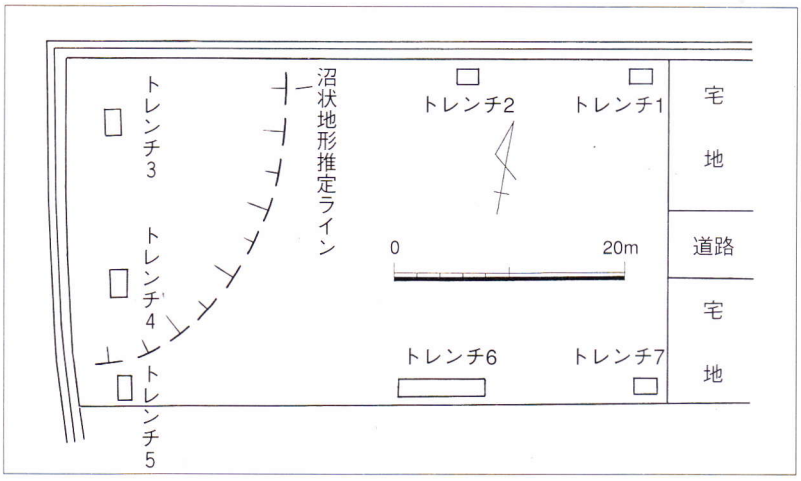
最も遺物出土量が多かったのはトレンチ６で、地表下約25～40cmのレベルで須恵器・土師器片を



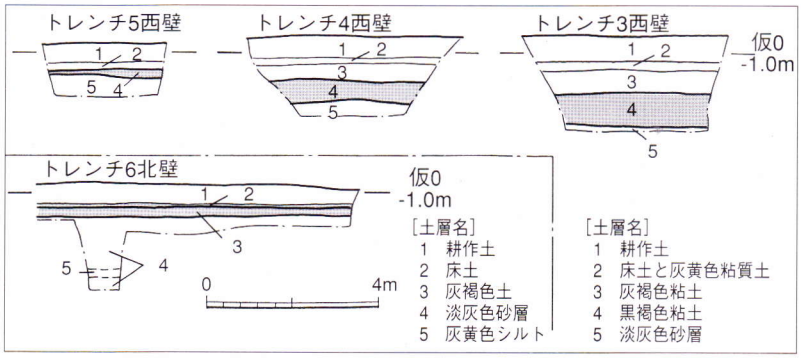
調査位置図

比較的多く包含する灰褐色土（３層）が確認された。この３層は、厳密には上層（灰黄色やや粘質土）と下層（灰褐色土）に２分され、下層が遺物の包含量が圧倒的に多い。３層下層よりは、土師器片約70点・須恵器片約10点が出土した。いずれも細片ながら土師器では高杯、須恵器では甕・壺のほか縄蓆文をもつ個体が確認される。

トレンチ１・２・７では地表から80～90cmの掘削により無遺物のベース層は確認されなかったが、トレンチ３～６では、ベース層とみられる灰色砂層が比較的高いレベルで検出された。



調査区配置図



土層図

まとめ

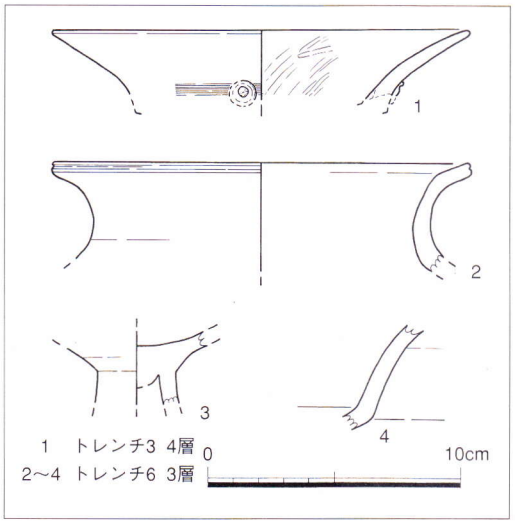
調査の結果、明確な遺構は検出されなかったが、出土土器よりみて弥生時代から古墳時代への移行期である庄内期にその存在時期の１点が求められる沼状地形が、トレンチ３・４周辺に広がっていたことが判明した。

また、トレンチ６での古墳時代中・後期の包含層よりみて周辺に当該時期の遺構が展開している可能性が高い。

本遺跡より西方においては、明確な古墳時代遺跡が確認されていないことより、古墳時代集落の立地できる西端部であったことと思われる。

古墳時代以降は、主として水田地帯として展開していたのであろう。

（前田敬彦）



遺物実測図

4．太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡　第27次調査

調 査 地　和歌山市太田314-1番地、314-6番地

調査面積　75m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は紀ノ川南岸の花山丘陵から西に広がる微高地上に位置し、弥生時代前期から奈良時代にかけての集落跡として知られている。また遺跡の南半は中世の太田城跡とも重なった複合遺跡であり、和歌山市の歴史を考える上で重要な地域の一つである。

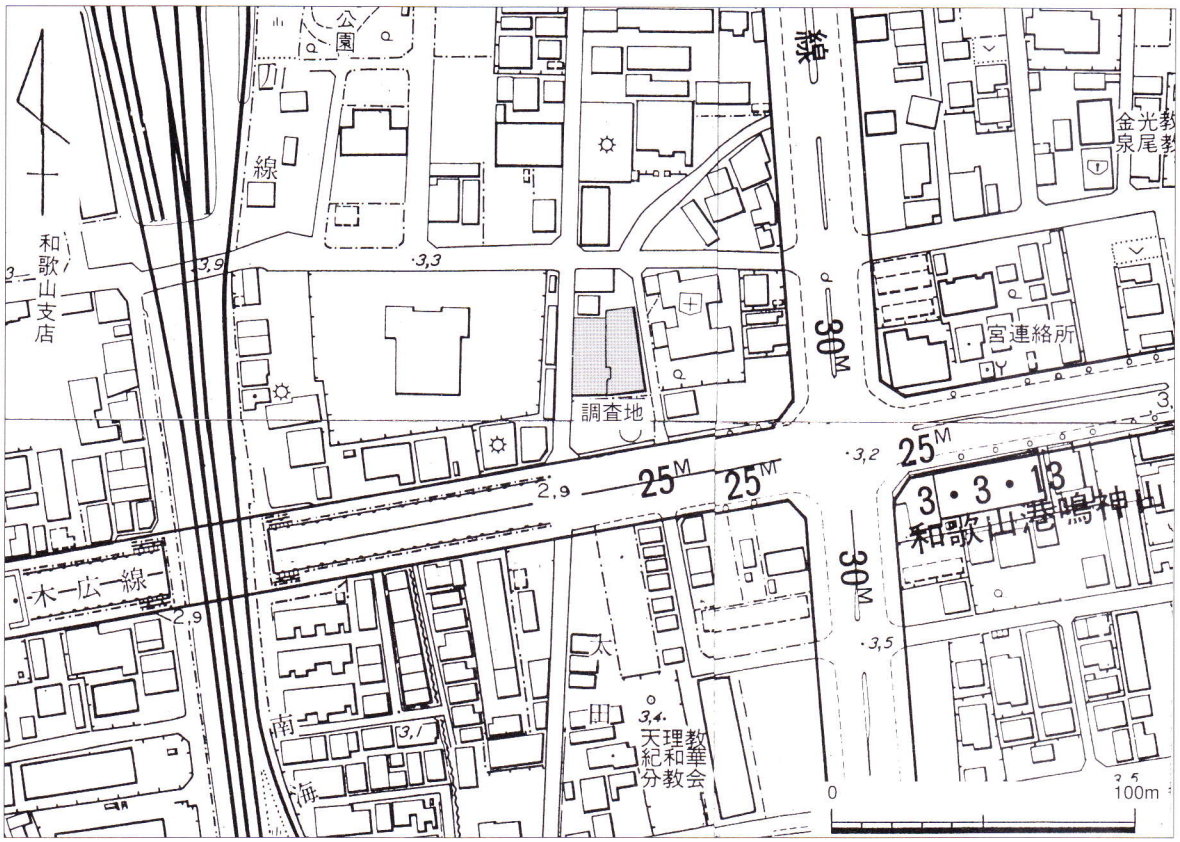
調査内容

今回の発掘調査は、マンション建設工事に伴うもので、建設予定地に幅1.5mのトレンチを東西18m・南北22mの長さで掘り下げ、地下の状況を観察した。

当地は早くから宅地開発が行なわれたために生活排水による変色などが著しく、土層観察も容易でなかったが、堆積状況は比較的安定しており、地表直下の遺物包含層からは近世の土器片などが少なからず出土している。

東西トレンチ西側、地表下50cm地点から弥生中期の甕が横たわった状態で検出された。土器片を取り上げる段階で、２個の甕が口縁部分を合わせたような位置関係になっていることが判明した。検出状況から埋葬に使用された甕棺と考えられる。取り上げた甕はどちらも図化できないほど摩滅が著しかった。

また東西トレンチ東側、地表下80cm地点で隅丸方形の土坑１を検出した。短辺80cm、長辺90cm

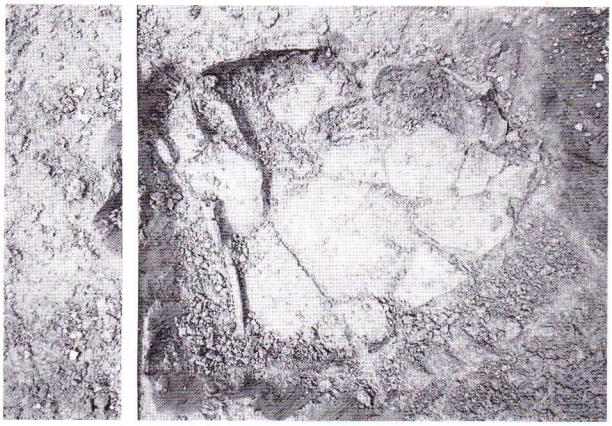


調査位置図

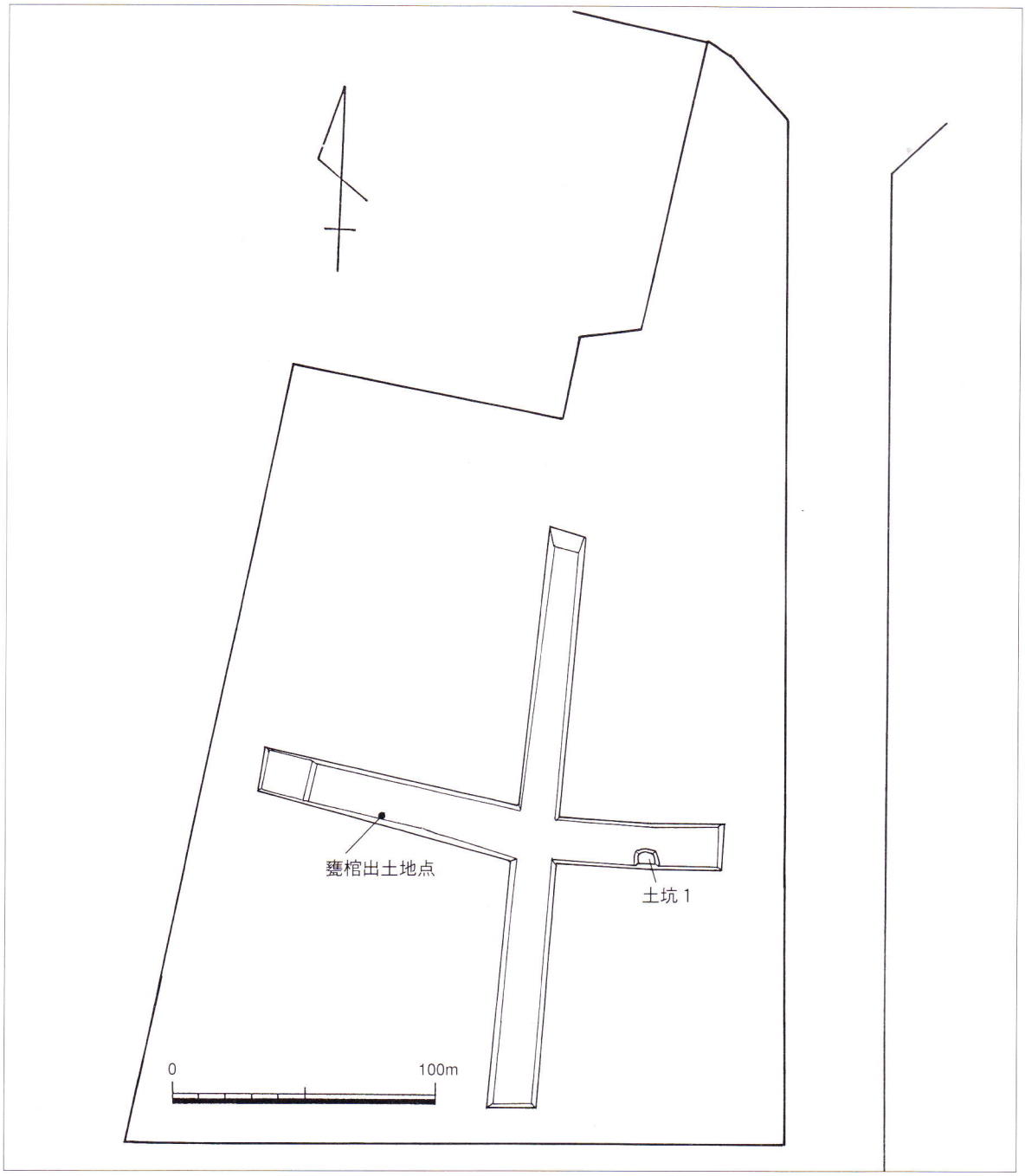
以上を測り、内部の灰色粘質土からは近世の陶磁器片が微量出土している。

まとめ

今回はごく限られた条件下での調査であったために周辺部を含めた詳細な観察ができなかったが、検出された甕棺は弥生時代の集落を復元する際に埋葬形態を考える上で資料となるものである。（益田雅司）



甕棺出土状況（上が西）



調査地測量図

5．太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡　第28次調査

調 査 地　和歌山市太田244-1番地

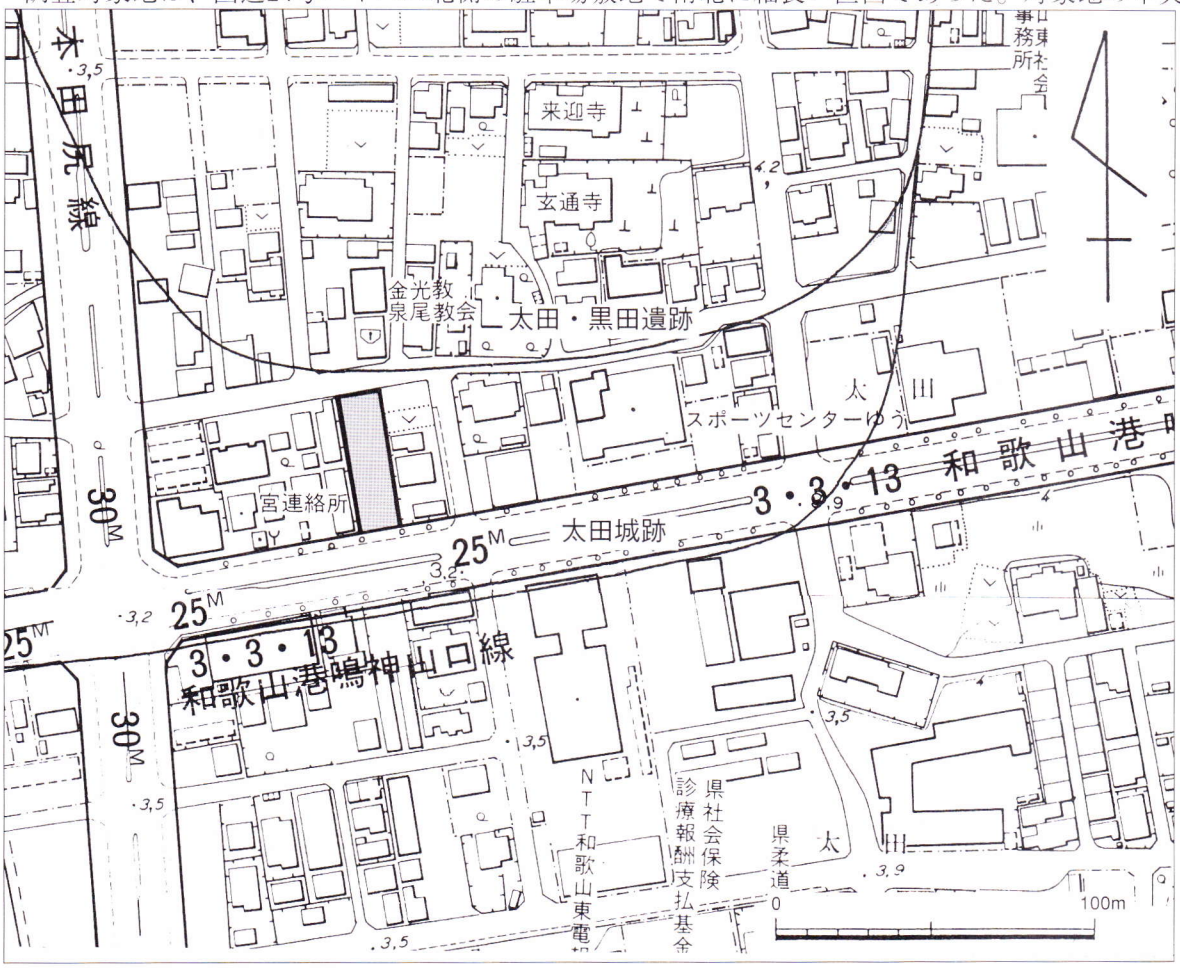
調査面積　70m²（調査区設定面積180m²）

位置と環境

太田・黒田遺跡は、ＪＲ和歌山駅の東側に広がる南北約600m、東西約350mの範囲をもつ大規模集落遺跡である。本遺跡の南半には中世期の城館跡と推定される太田城跡の範囲（南北約350m、東西約400m）が重複して位置している。これまでの調査により弥生時代の竪穴住居や井戸、土坑、水田状遺構、溝等が検出されるとともに多量の弥生土器、石器（石包丁、叩き石、石錐、石鏃、削器）、銅鐸等が出土しており、県内における代表的な弥生遺跡として知られる。また、古墳時代以降の奈良時代、鎌倉時代、室町時代の各時代の遺構・遺物が確認されている。今回、太田・黒田遺跡推定範囲の南側隣接地、太田城跡の範囲内における集合住宅建築計画に対処するため、発掘調査を実施した。なお、調査開始時には、本地点は太田城跡の範囲内であったため、文化財保護法による通知及び発掘届出等については、太田城跡の第３次調査として行ったが、調査の結果、広義の太田・黒田遺跡の範囲内と推定されたことにより、太田・黒田遺跡の第28次調査として取り扱うこととした。

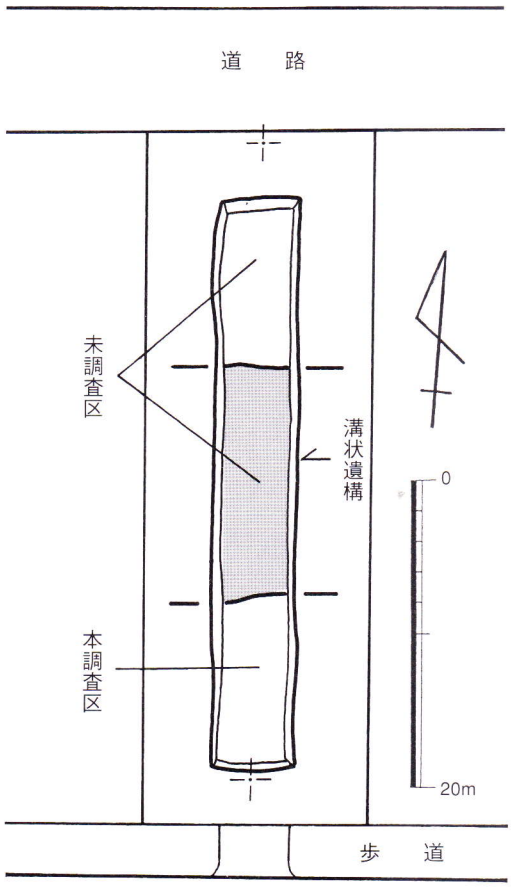
調査内容

調査対象地は、国道24号バイパス北側の駐車場敷地で南北に細長い区画であった。対象地の中央



調査位置図

部に幅５m、長さ36.5mの調査区を設定し、盛土及び旧耕作土までを機械掘削した。機械掘削により、旧耕作土下面において、調査区中央部を横切るように暗灰色粘土からなる溝状あるいは沼状地形が展開しているのが確認された。調査区は、この地形により南北に分断されることとなり、諸般の事情にもより、本調査区は溝状遺構の南側の70m²に限定した。この溝状遺構の時期については上層が撹乱を受けており、調査対象外でもあったため明確にはできなかったが、旧耕作土（２層）下面で検出されることや埋土よりみて下限は近年まで下るものとみられた。また、溝状遺構の両端部分には石垣・杭列等の遺構は構築されていなかったことにより、堀状のものではなく自然の沼状地形であったかもしれない。また、未調査ながら機械掘削時の所見によれば、溝状遺構北側の地区については若干の柱穴等はみられるものの遺構密度の薄い地域であることが確認された。



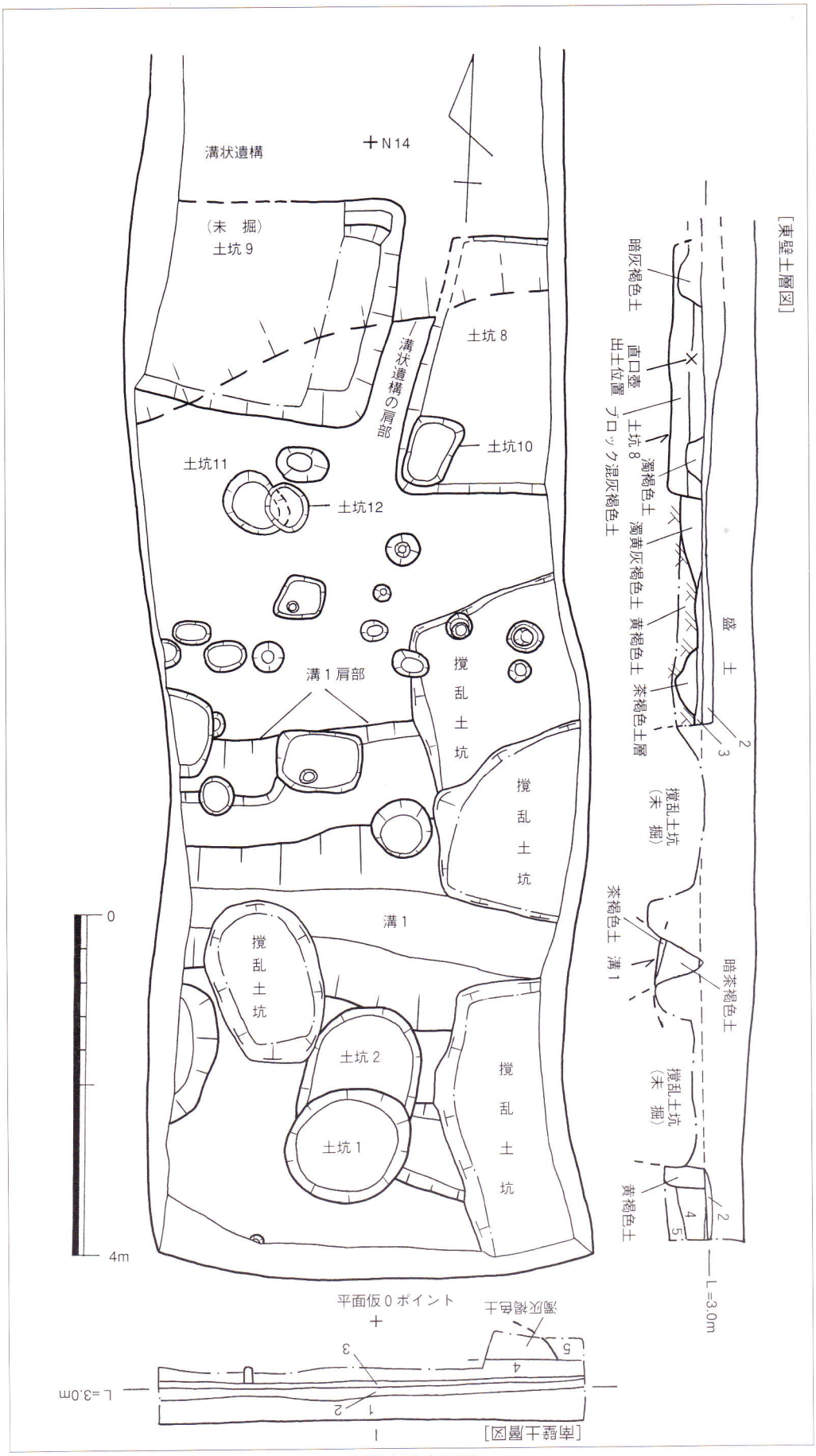
調査地測量図

以下は、溝状遺構南側地区の報告である。地表面の標高は3.4m前後であり、旧耕作土の上に30～60cmの盛土（１層）がなされていた。比較的安定した堆積状況を示す調査区南端で、旧耕作土下端の標高は約３mで、旧耕作土（２層）の下には厚さ５～10cmの灰茶褐色砂質土（３層）、さらに下層には厚さ20cm前後の黄褐色砂質土（４層）、厚さ30cm以上の灰茶色砂質土（５層）の堆積がみられた。

大半の遺構は２層もしくは３層下面の標高2.9～3.0mに形成されるが、調査区南東隅部において４層下面の標高2.7mからの濁灰褐色土の落ち込みも確認された。この下層遺構については、検出レベルより調査対象外となったが、後述する遺構との関係により弥生時代中期以前の遺構と判断される。また、東壁の南端から北へ６～９mの地点では、標高2.9m以下には遺物の包含の認められない黄褐色土が確認された。このベース層は、調査南端及び西壁では検出されないため、この地点から対象地内南端と西へ向かい傾斜する旧地形が想定される。

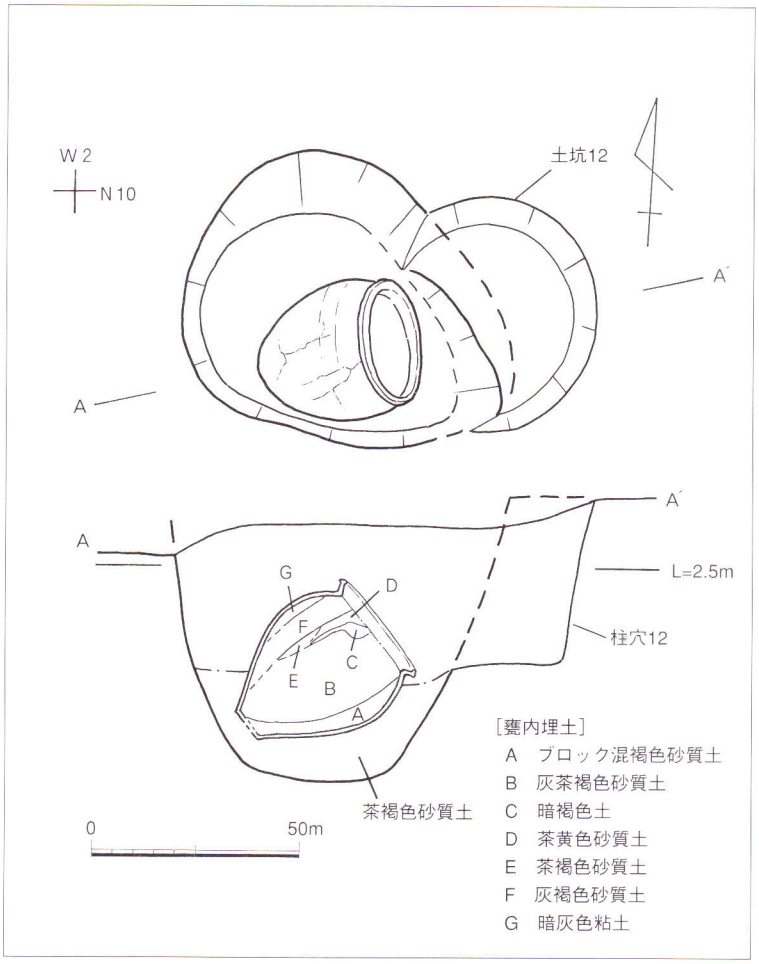
遺構　検出された主な遺構としては、近世の土坑４基（土坑１・２・８・９）、弥生時代の土器棺（土坑11）、溝（溝１）、弥生～古墳時代と推定される柱穴群がある。

土坑１は、調査区南端で検出された直径1.4m、深さ38cmの円形の土坑で、ブロック混じりの褐色砂質土を埋土としていた。土坑内より、肥前陶磁器、備前陶器、瓦器、黒色土器、中世土師器、須恵器、土人形、軒丸瓦片、石包丁未製品等の遺物が出土し、近世期の遺構と判断された。土坑１に


溝状遺構
＋N14
（未　掘）
土坑 9
土坑 8
溝状遺構の肩部
土坑10
土坑11
土坑12
溝 1 肩部
撹乱土坑
撹乱土坑
溝 1
撹乱土坑
土坑 2
土坑 1
撹乱土坑
0
4m
［東壁土層図］
暗灰褐色土
直口壺出土位置
土坑 8 ブロック混灰褐色土
濁褐色土
濁黄灰褐色土
黄褐色土
茶褐色土層
盛　土
撹乱土坑（未　掘）
茶褐色土
溝 1
暗茶褐色土
撹乱土坑（未　掘）
黄褐色土
L=3.0m
平面仮 0 ポイント
濁灰褐色土
L=3.0m
［南壁土層図］

本調査区実測図

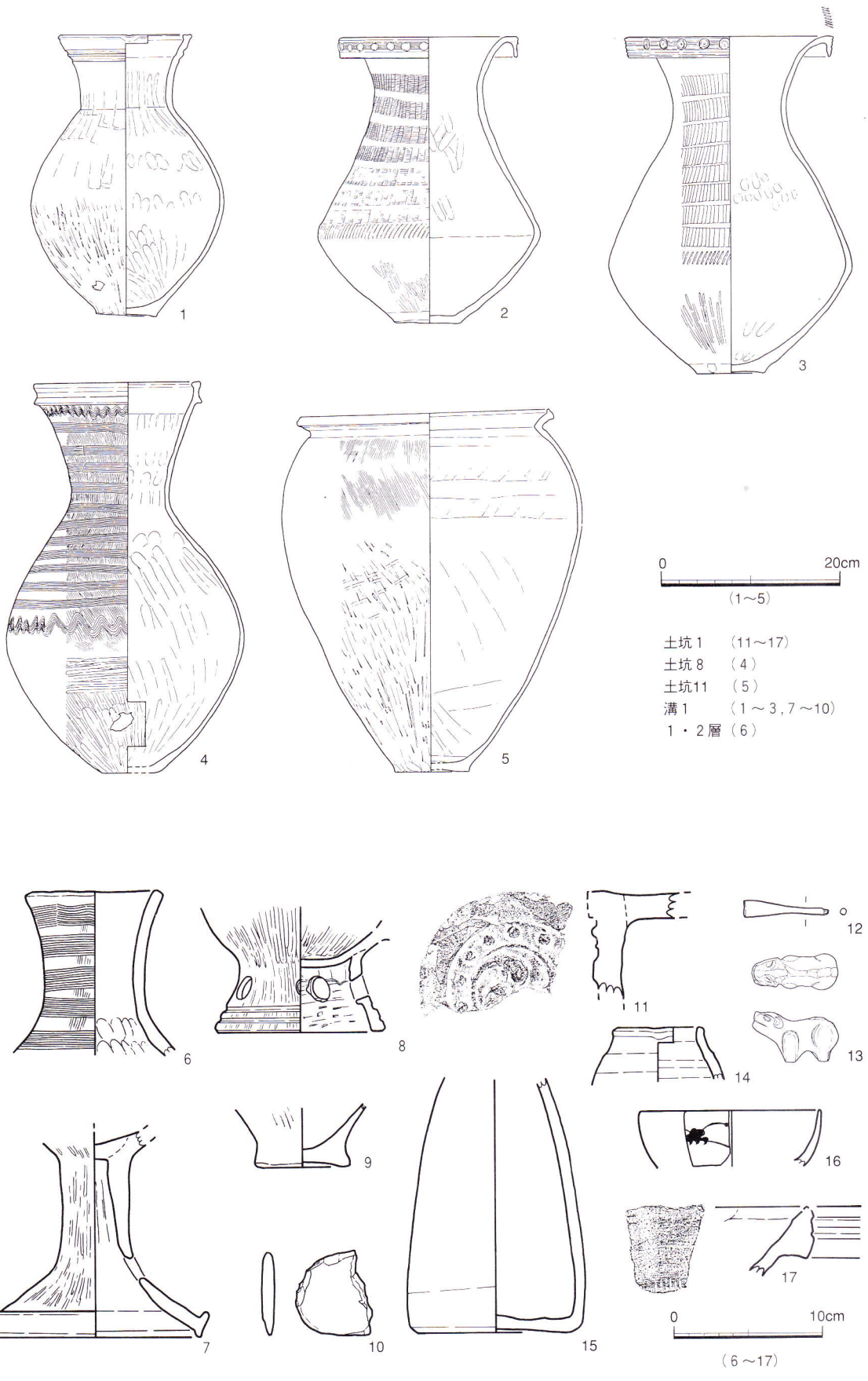
より一部を切られる土坑２は、幅1.3m、長さ２m前後、深さ24cmの楕円形の土坑で、ブロック混じりの灰褐色土を埋土としていた。土坑２出土遺物には、中国製白磁、瓦器、土師器、須恵器、平瓦片があり、土坑１と類似する性格のものであると推定された。前記の調査区中央の溝状遺構に接して検出された土坑８と土坑９は、ともにブロック混じりの灰褐色土を埋土とし、方形プランをもつことから、検出時には竪穴住居の可能性も考えられたが、土坑９埋土より近世遺物が出土したことにより、ともに近世の時期の掘削と推定された。土坑の規模は、南北2.7～3.0m、深さは土坑８で17cm程度、土坑９で55cm程度である。土坑８の東壁面部より復元完形で底面と胴部下半に穿孔の可能性のある弥生時代中期直口壺が出土したが、土坑底面よりも若干上位で出土しており、原位置を保っていない。



土坑11実測図

土坑11は、土坑12により一部を切られるが、土坑内に弥生時代中期の甕が底部を下にし、斜位に据えられているのが確認された。底面中央部が焼成後に穿孔された可能性が高く、弥生時代の土器棺と判断される。甕内部の土を残したまま取り上げ、埋土を精査したが、骨片等は検出されなかった。甕内の埋土は、Ａ～Ｇ層に分層され、この６つの土層はその堆積状況よりＡ・Ｂ層、Ｃ・Ｄ・Ｅ層、Ｆ・Ｇ層の３グループに分けられた。そのうちＢ層が土坑11の埋土と類似し、最も土量も多いことから、甕埋納後に甕内部の空洞部分に一気に流入した堆積土と判断される。Ｃ・Ｄ・Ｅ層は有機質に関係する土層であるが、埋葬に関係するというよりは、Ｂ層の流入後に土坑内部にできた空洞部分に由来すると推定される。Ｆ・Ｇ層はしまりのない土層であり、最後まで空洞だった部分への流入土であろう。以上の状況と土坑内より石材等が検出されなかった事より、設置当時は甕口縁部に木製蓋が付設されていたものと思われる。

溝１は、調査区を東西に横切る幅2.8～3.6m、深さ50cmの溝で、下層は厚さ10cm程度の茶褐色土、上層は暗茶褐色土を埋土としていた。溝の断面形は緩やかなＵ字形を示し、北側に段をもつ箇所が認められた。埋土からは復元完形の壺が３個体のほか石包丁未製品等が出土した。注目されるのは、完形品が多く認められた点と体部下半に穿孔のみられる個体が含まれていた点であり、この溝が墳墓に関連する可能性が考えられた。


1
2
3
4
5
0
20cm
(1～5)
土坑1　(11～17)
土坑8　(4)
土坑11　(5)
溝1　(1～3,7～10)
1・2層 (6)
6
8
11
12
13
14
16
17
7
9
10
15
0
10cm
(6～17)

遺物実測図

その他、直径20～40cmの柱穴が溝１と土坑８・９の間で多数検出された。埋土からは、弥生土器もしくは土師質土器の細片のほか須恵器・製塩土器（薄手丸底式）も出土しており、大半は弥生時代というよりは古墳時代中期～後期の遺構と判断された。

出土遺物

弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、製塩土器、軒丸瓦片、土人形、キセル、陶磁器、石包丁未製品等が挙げられるが、以下に遺構に伴った遺物を中心に紹介する。

土坑１出土　11は軒丸瓦の瓦当部分、12はキセルの吸口である。13は土人形の犬もしくは獅子。14は備前焼短頸壺、15は徳利、16は肥前系磁器碗、17は備前焼すり鉢で、内面にスリ目の一部が観察される。12・15・16等の様相より遺構の埋没時期は18世紀代とみられる。

土坑８出土　４はほぼ完形に復元された直口壺で、口縁部直下に断面三角形の突帯をもち、胴部下半と底面に穿孔の可能性のある穴がみられる。弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）後半から中期後葉（第Ⅳ様式）前半頃の所産である。

土坑11出土　５は胴部下半をタタキのちケズリにより調整する甕で、胴部上半にはハケメ調整が施される。弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）の土器とみられる。

溝１出土　１は頸部上位に２条の凹線文をもつ直口壺で、口縁にわずかに注ぎ口をつけている。２と３の広口壺は、胴部を簾状文と刺突文で飾り、垂下口縁部には円形浮文がつけられている。３の簾状文は板描簾状文である。７は高杯の脚部、８は把手付台付鉢、９は甕底部、10は緑色片岩製石包丁未製品である。９の紀伊型甕以外は、弥生時代中期後葉（第Ⅳ様式）前半につくられた土器群とみられる。

包含層出土　６は弥生中期の直口壺である。第Ⅱ様式後葉から第Ⅲ様式前葉の時期のものである。

まとめ

調査により、弥生時代、古墳時代、江戸時代の遺構・遺物と平安時代、鎌倉時代の遺物が確認された。特に、弥生時代中期には、甕を利用した土器棺、墳墓に関係したとみられる溝、江戸時代の土坑に混入していたが穿孔された壺の存在より、当該地を含めた周辺が墓域であったものと判断された。時期的には弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）後半～中期後葉（第Ⅳ様式）前半である。

その後、古墳時代中期～後期には柱穴群が形成されており、居住区になった可能性が高い。さらにその後、明確な遺構が形成されるのは江戸時代中期であり、円形もしくは方形のプランをもった土坑が形成される。遺構埋土や包含層に当該時期の遺物が一定量包含されることより、屋敷地の一部になっていたものと考えられる。

（前田敬彦）

6．鷺ノ森遺跡 第６次調査

調 査 地　和歌山市東鍛冶屋町49-2番地

調査面積　45m²

位置と環境

鷺ノ森遺跡は和歌山城の北方500mのところに位置し、現在の城北地区を中心に東西、南北ともに約300ｍの範囲をもつ。遺跡は、中世末期に浄土真宗本願寺の別院として開かれた鷺ノ森別院および、和歌山城下町を中心とする遺跡である。また本遺跡内から弥生土器、土師器、須恵器等の遺物が採集されていることから、弥生時代以降の複合遺跡として知られている。

今回の調査対象地である東鍛冶屋町は、地名からもわかるように城下町の中でも特に鍛冶屋町に相当する。1992年の地下駐車場建設に伴う第３次調査では、江戸時代の町屋跡のほか、鍛冶炉跡等の小鍛冶に関する遺構を確認している。

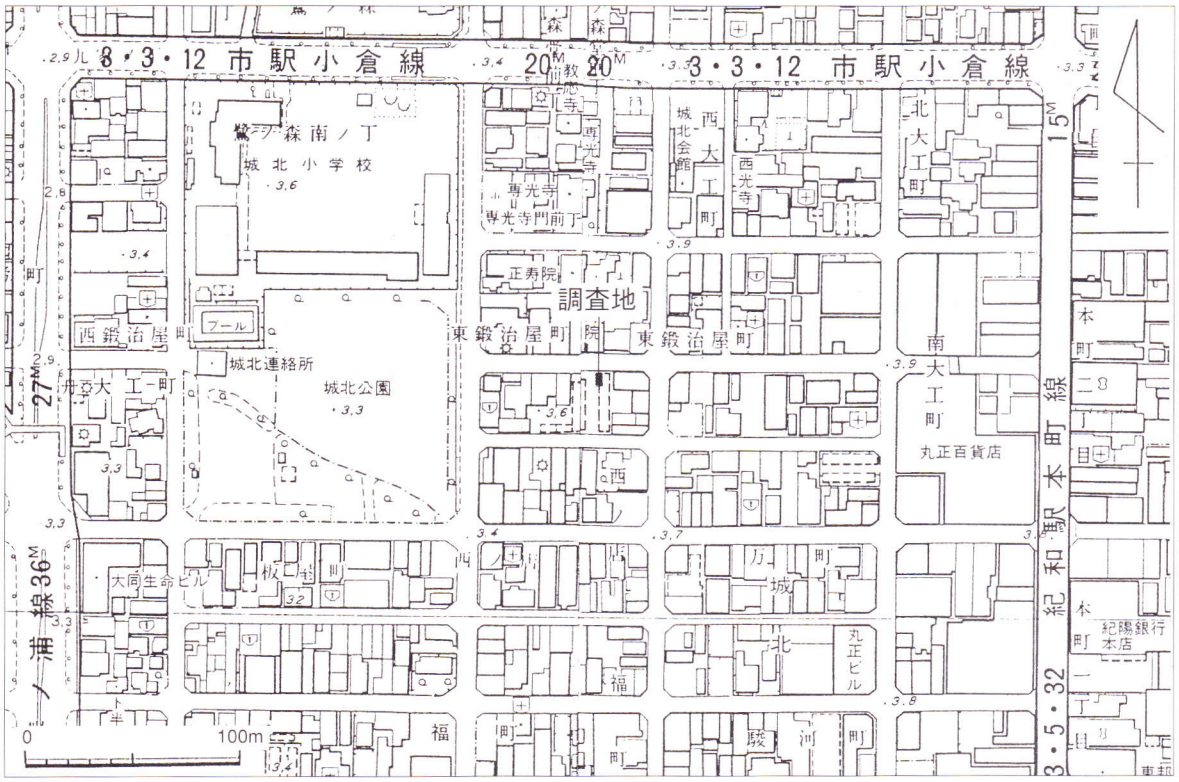
調査は、本遺跡内にビル建設工事が行われることとなり、事前に実施したものである。

調査内容

調査は東西５m、南北９mの調査区を設定して行い、調査の結果江戸時代以降の遺構面を３面確認することができた。

まず第１遺構面は、地表から約60cm下層で検出したものであり標高4.2mを測る。ここでは、幕末から近代のものとみられる埋甕、埋桶、砂岩の礎石を伴う柱穴や、18世紀中葉頃とみられる敷地境の石列１基とそれに伴う溝、礎石建物１棟を検出している。

石列１は調査区の東壁際、Ｓ３～９mの区間で検出したものである。石列は南北方向に延び、西側に面をもつ。部分的に撹乱されているものの、本来は２段に積んでいたことがわかる。主に結晶

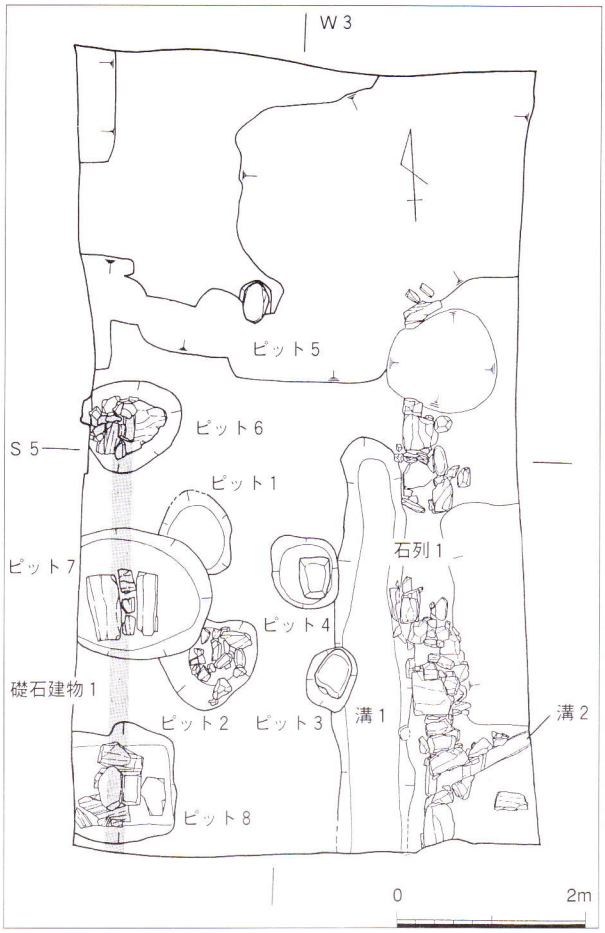


調査位置図

片岩を使用し、基底石の中には砂岩も含まれる。石材の大きさは20～40cmであり、扁平な割石を横積みにしている。石列の基底部では、直径約10cmの横木の一部を検出している。また石列の西側には、石列に沿って南北方向の溝（溝１）が伴う。溝１は幅約80cmの規模をもち、南に向かって傾斜している。さらに石列の東側、敷地内からこの溝に向かって幅16cmの小溝（溝２）が掘削されており、これらの溝は排水施設とみられる。調査地の北を東西に走る道路は絵図等から、近世城下町の町割を踏襲しており、鍛冶屋町通りに相当することがわかっている。そのため、石列によって区画された敷地の地口は北にあると推定できる。また調査地の南を東西に走る道路は、第３次調査時に検出した大水道の延長上にあり、溝１はこの大水道に向かって掘削されたとみられる。

礎石建物は、建物の東辺２間分を検出したものである。柱間は北から1.9m、2.0mである。直径1.0～1.5mの大規模な掘方をもち、建物も相当大きなものであったことが窺える。柱穴の深さは遺構検出面から50～60cmを測り、埋土は5Y5／2（暗灰黄）粗砂混シルトと礫の互層からなる。さらに柱穴の上面中央には、結晶片岩の板石を敷き、柱穴の底面直上には直径50cm大の結晶片岩および砂岩を数個敷きつめた状態であった。ピット８にはこの結晶片岩の板石がみられなかったが、ピットの直上まで撹乱を受けており、後世に移動させられた可能性がある。

第２遺構面は、標高4.0mを測る。ここでは17世紀後葉頃の敷地境の石列や小溝、土坑やピットを検出している。敷地境の石列は上層の遺構によって著しく削平された状態であったが、石列の基底石の一部が残っており、残存部をつなぐと敷地割は第１遺構面よりもさらに細かくなる。結晶片岩の割石や拳大の砂岩、幅約20cmの小溝によって分割されている。敷地割の方向性は、第１遺構面と同じく南北方向である。



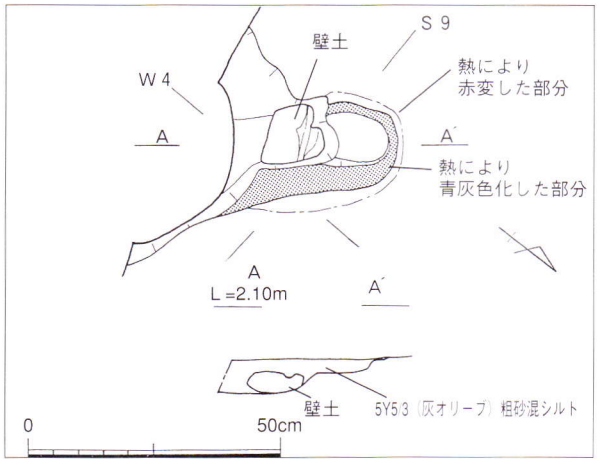
第１遺構面実測図

第１遺構面全景（南から）

石列１（西から）

ここで検出したピットのほとんどは、結晶片岩の割石を根石とし、直径0.5～1.0mの規模を測る。

第３遺構面は、標高3.8mを測る。主な遺構としては鍛冶炉跡や土坑、ピットを検出している。鍛冶炉跡は調査区の南壁際で検出したものである。遺構の範囲の大半が調査区外におよび、上層の遺構によって削平された状態であったが、復元すると直径約50cmの円形もしくは楕円形を呈するとみられる。炉跡の周辺は熱により赤変していた。炉跡の北肩にフイゴの羽口を設置していたとみられる窪みがあり、またフイゴの羽口を固定していたとみられる壁土が炉跡の底に残されていた。炉内部には炭等の残留物が底面に若干みられただけであり、短期間で廃棄されたとみられる。



鍛冶炉跡実測図

鍛冶炉跡（北東から）

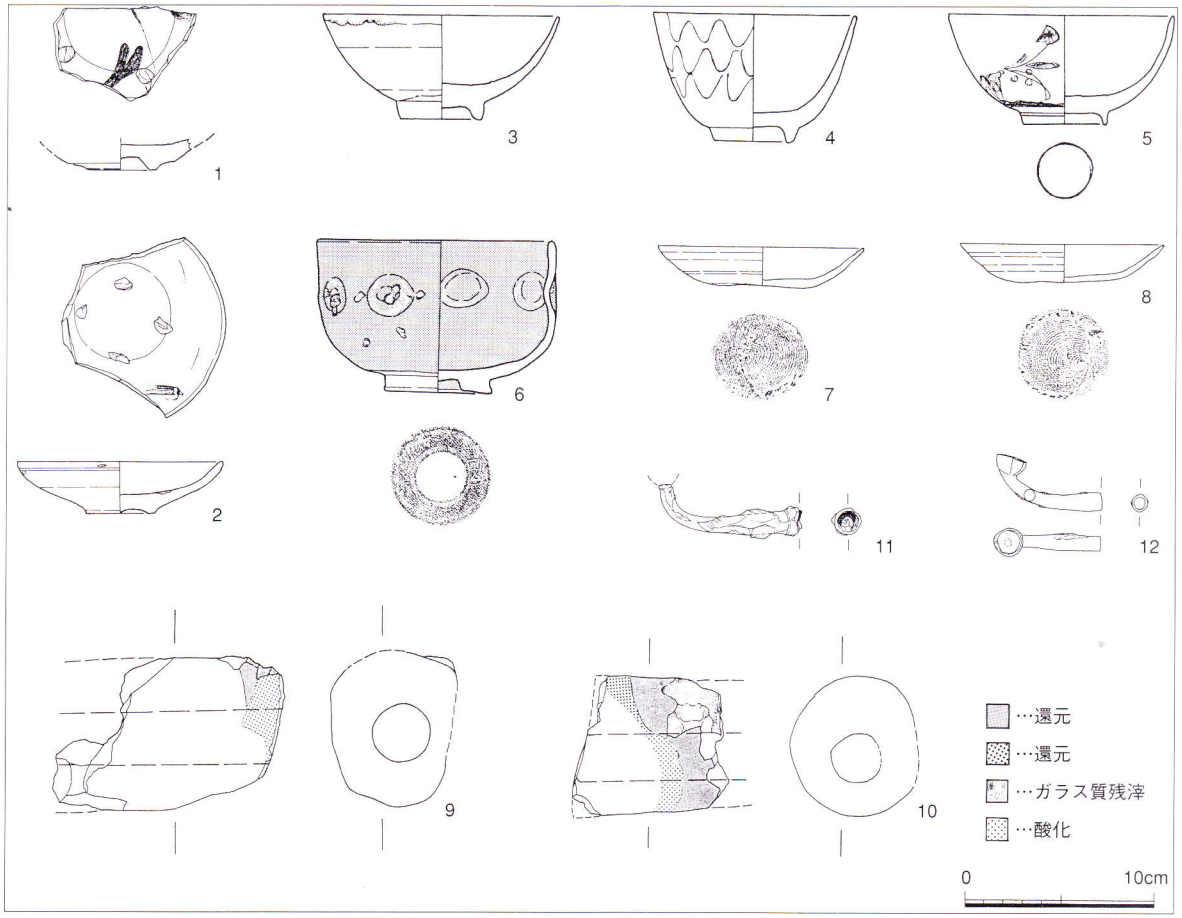
今回の調査では、遺物収納コンテナにして７箱分の遺物が出土している。近世の陶磁器が大半を占め、その他フイゴの羽口や鉄滓等の鍛冶に関する遺物や、煙管、土人形等の町屋に関する遺物が出土している。

１・２は唐津の皿である。ともに高台無釉で、見込みには胎土目が残る。内面および体部外面1/3まで藁灰釉を施し、内面には鉄絵がみられる。３は唐津、４・５は伊万里の碗である。３は削出しによって高台を成形し、内面には蛇ノ目釉剥ぎがみられる。４・５はともに高台接地面以外は施釉し、５については内面見込み部分に蛇ノ目釉剥ぎがみられる。７・８は土師器の皿である。内外面ともに淡赤褐色を呈し、回転ナデ調整によって調整されている。外底面には回転糸切り痕が残る。６はいわゆる瀬戸美濃産の「拳骨茶碗」である。高台外面以外は全面に鉄釉を施している。胎部中央には直径約2.5cmの窪みをつけ、長石釉を斑点状に施し装飾している。高台接地面には「上△」の刻印がみられる。９・10はフイゴの羽口である。胎土は淡黄褐色を呈し、直径は７～８cmを測る。また、通風孔は直径３cmである。11・12は煙管の雁首であり、ともに銅製である。11は比較的火皿の位置が高く、ほぼ直角に立ち上がる。また11は厚い銅板を使用し、羅宇結合部に補強帯を施している。またこの他、江戸時代の整地土から弥生時代後期とみられる叩き目をもつ甕、もしくは鉢の破片が出土している。

下層調査では、遺構を検出することはできなかったものの、第３遺構面の整地土層より下層から平安時代のものとみられるの土師器の細片が出土している。

まとめ

17世紀中葉から近代に至るまでの遺構面を検出することができた。和歌山城下町は、道路を挟んで向い合う町並みを一つの町とする「路線式町割」である。今回の調査では、1992年の調査と同様、



遺物実測図

排水溝や石列によって敷地の境界を示していることや、道路に面して短冊型に敷地を構成していることが確認できた。また調査地は鍛冶屋町として整備されたところであり、今回も若干ながら小鍛冶に関する遺構を検出しており、このことを裏付けるものである。しかし、炉跡は第３次調査と同じく江戸時代中期以降の遺構面にはみられなかった。文献資料によると城下町の町割りは、遅くとも寛永年間（1624～1644年）までに整備されたとされているが、本調査によって確認できた遺構面は古くとも17世紀中葉頃までである。

またさらに遺構を検出することはできなかったが、江戸時代以前の遺物が出土しており、今後江戸時代以前の遺構を検出する可能性を暗示させるものである。

（栗本美香）

【参考文献】

和歌山市史編纂委員会　『和歌山市史』第２巻　1989年

三尾功『近世都市和歌山の研究』1994年

7．太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡　第29次調査

調 査 地　和歌山市太田297番地先

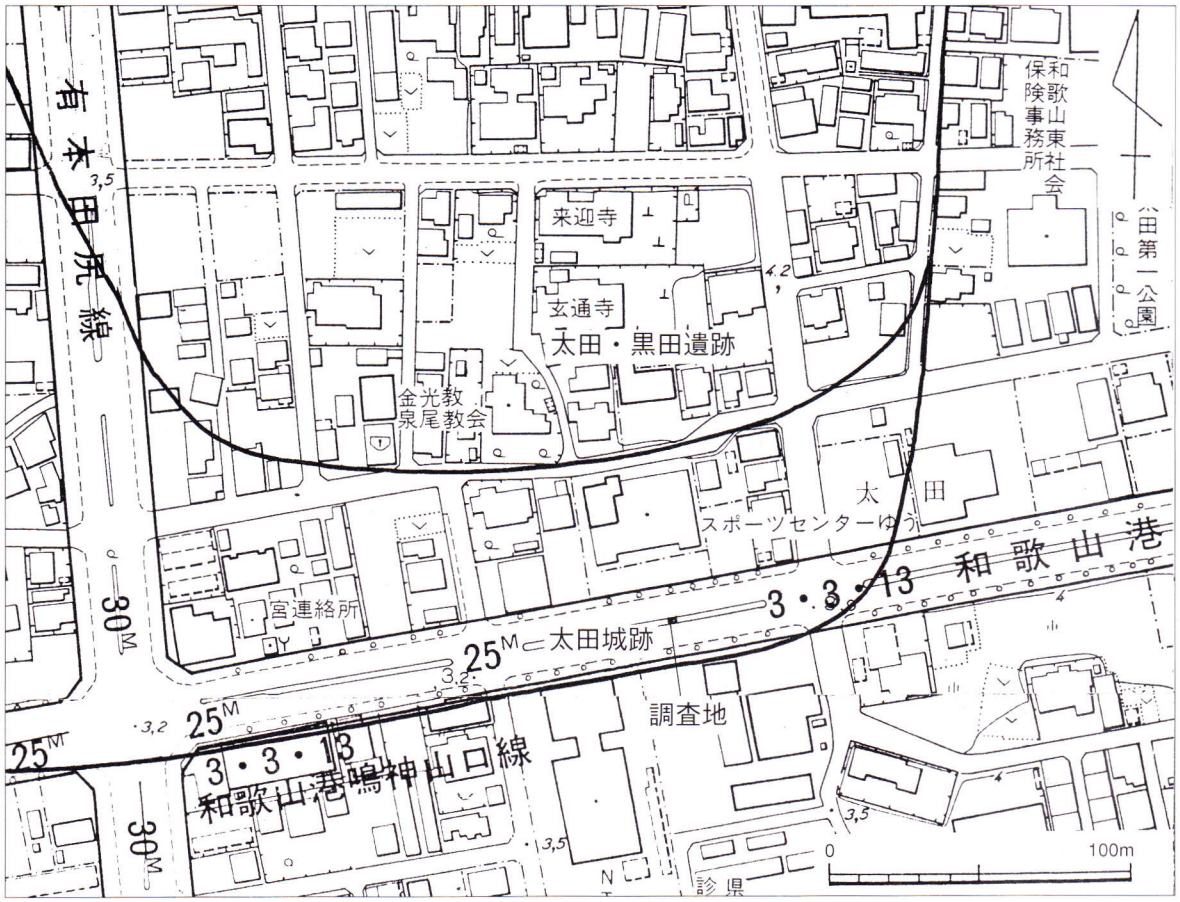
調査面積　6 m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は、南北約600m、東西約350mの範囲をもつ大規模集落遺跡である。本遺跡の南半には中世期の城館跡と推定される太田城跡の範囲が重複して位置している。今回は、和歌山市駐車場案内システム設置工事に伴い、国道24号バイパスの中央分離帯部分の調査を行った。なお、調査開始時には、本地点は太田城跡の範囲内であったため、文化財保護法による通知及び発掘届出等については、太田城跡の調査として行ったが、調査の結果、広義の太田・黒田遺跡の範囲内と推定されたことにより、太田・黒田遺跡の調査のひとつとして取り扱うこととした。

調査内容

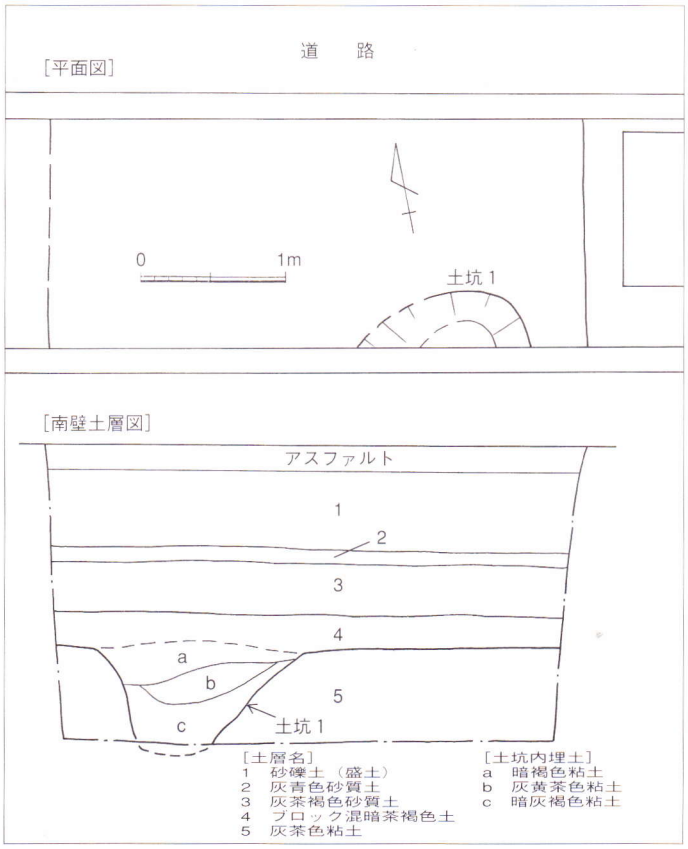
調査対象地が道路敷地内であり、調査は夜間に限られたため、色調の不明確な小規模遺構については確認が困難であった。基本土層としては、道路のアスファルト部分を除いて５層に分層できた。１層は厚さ約50cmの道路の基礎部分であり、２層は厚さ約10cmの旧耕作土とみられた。この旧耕作土は、本来厚さ20cm程度はあったものと考えられることより、道路敷設に伴い上半が掘削されたものとみられる。３層は厚さ30～35cmの砂質土、４層は厚さ20cm程度の暗茶褐色土で別種の土の固まりであるブロックが混在していた。４層が包含層で、４層下面で土坑１が確認された。土坑１



調査位置図

は、直径1.2m、深さ0.7mの円形、もしくは楕円形の土坑であり、土器片が多く含まれていた。堆積土は3層に分層されるがいずれの土層にも土器片は包含されていた。また、土坑堆積の最上層a層と4層の区別が不明瞭ではあったが、4層上面からの遺構ではないと判断された。断面形では、東側の立ち上がりが急であるのに対して西側がなだらかな傾斜をもつ。遺構検出時には、井戸・柱穴・土坑の3種類の性格が想定されたが、平面・断面形態や遺物出土の状況より土坑と判断した。

出土した土器類としては、3層より土師皿（7）、土坑1より黒色土器椀（1・2）、土師皿（3～5）、台付皿（6）等が出土している。土坑1からはほかに須恵器甕胴部片も出土している。

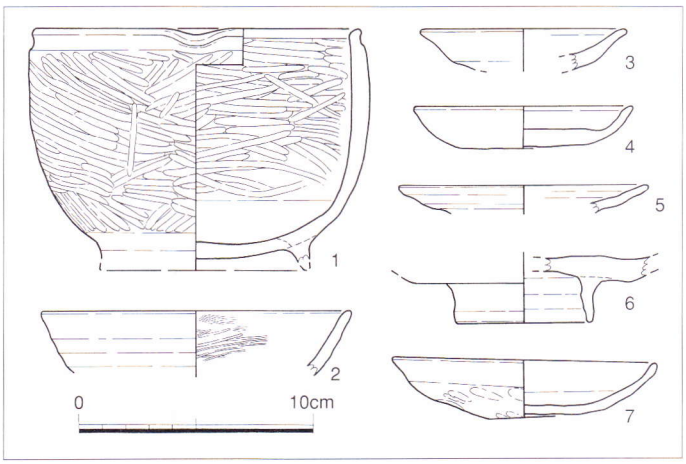


調査区実測図

まとめ

調査により、中世期の包含層と平安時代の土坑1基が検出された。周辺地形図よりみて、道路面の標高は3.5m前後と推定されることから、中世期の包含層は標高2.1～2.3m、平安時代の土坑は標高2.3m前後に形成されていることとなる。

平安時代の遺構が確認されるとともに、中世期の包含層も水平堆積することより、太田・黒田遺跡の推定範囲は南方へ拡大するものと判断された。また、本調査地の西方約150mの地点で昭和50年度に実施された第10次調査においても平安時代の遺構・遺物が検出されていることから、太田・黒田遺跡の南端部域に平安時代のひとつのまとまりある地域を想定できる可能性がある。



遺物実測図

（前田敬彦）

【参考文献】

『太田・黒田遺跡範囲確認調査（和歌山港～鳴神線）概要』和歌山市教育委員会　1976

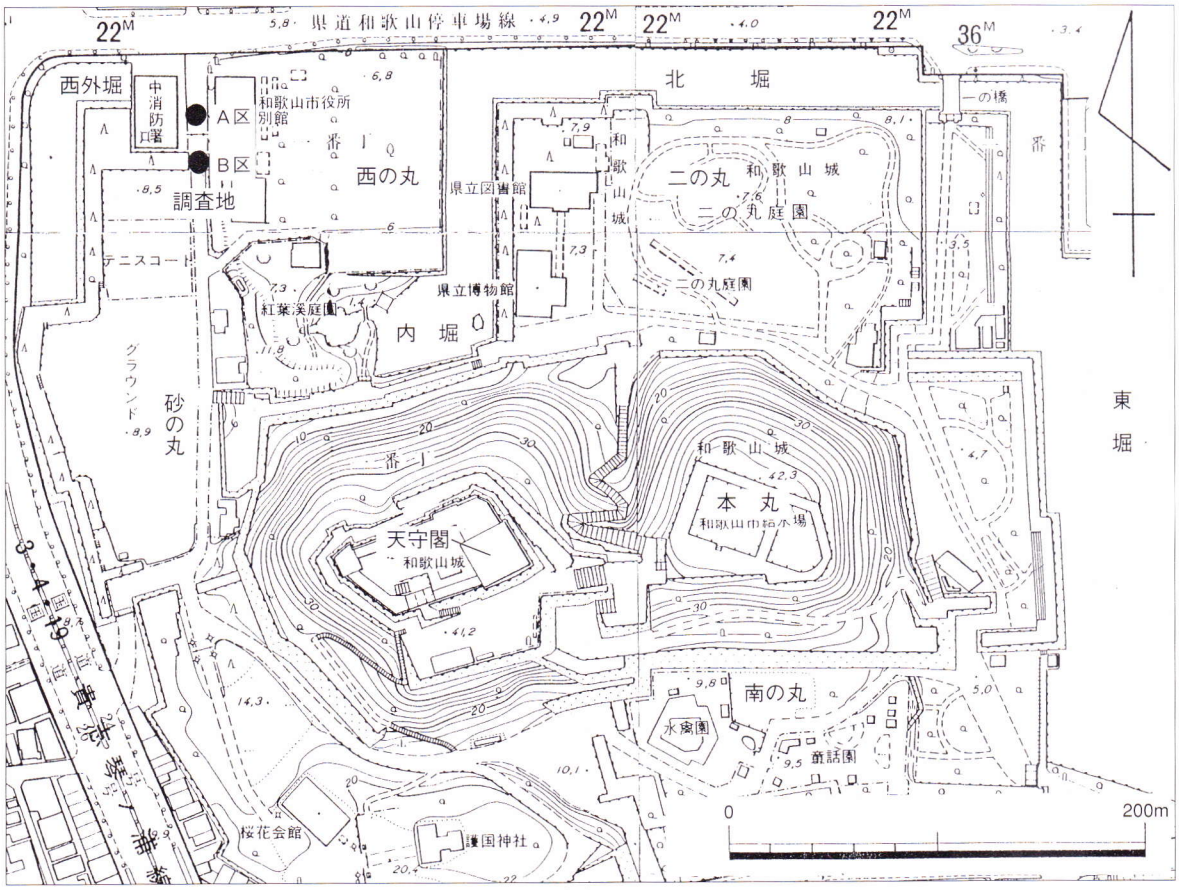
8．史跡和歌山城（しせきわかやまじょう） 第14次調査

調 査 地　和歌山市一番丁3番地

調査面積　30m²

位置と環境

史跡和歌山城は紀ノ川河口南岸、和歌山平野のほぼ中心部に位置する標高約48.0mの独立丘陵に築かれている。和歌山城は、天正13（1585）年に紀州を平定した豊臣秀吉によって創建された。紀伊国は秀吉の弟である秀長が領有したが、秀長は大和郡山城に在城したため和歌山城には城代として桑山重晴を入国させた。しかし、この当時の史料はほとんど現存しておらず、創建時の和歌山城はどのような構造であったかは不明である。その後、慶長５（1600）年、関ヶ原の合戦において勝利した徳川家康が領有し、この戦いにおいて戦功のあった浅野幸長を大坂城の豊臣氏を牽制するために入国させた。入国後の幸長は、城郭の大規模な改修や城下町の建設にとりかかったとされる。元和５（1619）年に浅野氏は広島へ転封され、代わって徳川頼宣が城主となった。頼宣が入国した頃には、すでに和歌山城はほぼ完成されていたといわれる。入国後の頼宣は、元和７（1621）年から城郭と城を取り巻く城下町の拡張・整備などを行った。その後、明治４（1871）年の廃藩置県によって初代城主である頼宣から約250年間に渡って徳川氏の支配下にあった和歌山城は廃城となった。明治時代以降の和歌山城は、昭和６（1931）年に文部省から史蹟に指定され、さらに昭和10（1935）年に天守閣などが国宝建造物に指定された。しかし、昭和20（1945）年の第２次世界大戦による大空襲で壊滅的な被害を受けた。焼失した天守閣は、戦後の復興とともに昭和33（1958）年



調査位置図

に外観のみ原形を伝える復興天守閣が完成した。こうして和歌山城は、今日に至るまで市民の憩いの場として活用されている。

調査内容

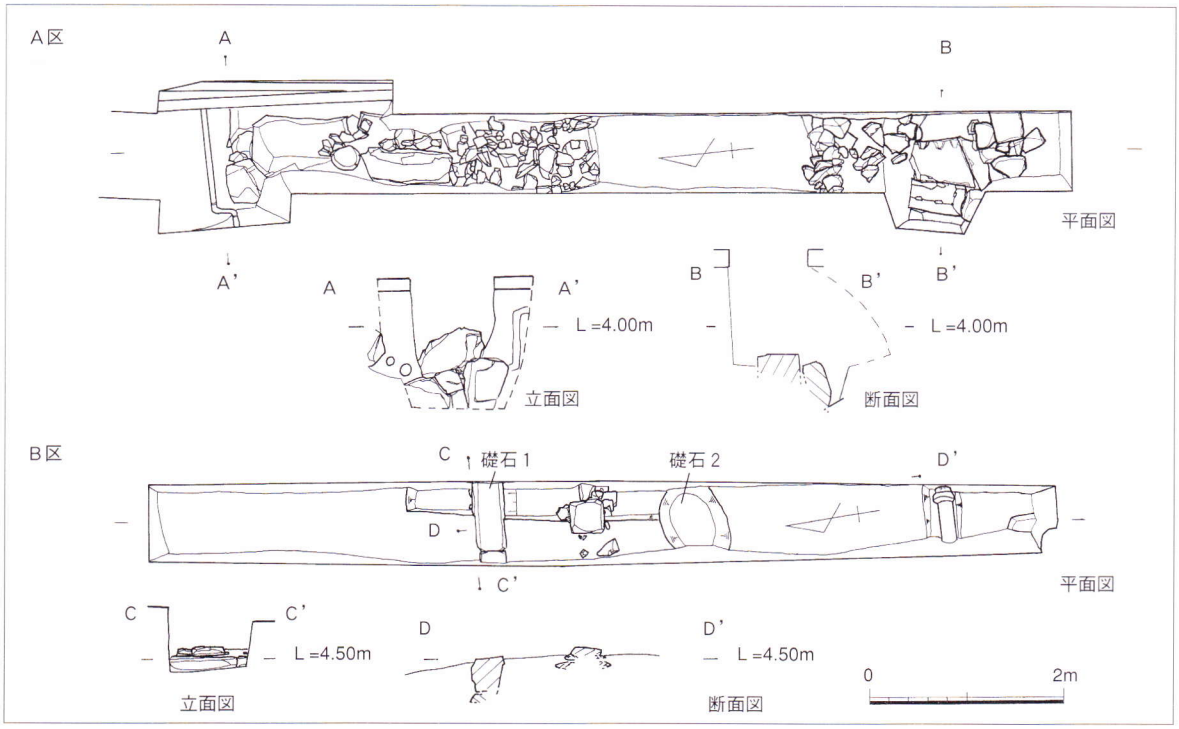
・ 調査の方法は、以前の調査成果や幕末に描かれた『和歌山御城内御惣絵図』（和歌山県立図書館蔵）をもとにキャブシステム埋設工事区域において石垣と御勘定門が推定される箇所に80cmの幅で長さ26mと9.5mの２区画の調査区を設定し、北側をＡ区、南側をＢ区とした。またＡ区において検出した石垣の残存範囲を確認するため、拡張部分を一部設けた。

Ａ区は、砂岩の石垣とこれに伴う裏込めを検出した。この石垣は地表面から約50cmの深さにおいて検出したもので、現在消防署の西で途絶えている堀の延長に伴う石垣とみられる。『同絵図』によるとこの石垣は南に突出していたようである。

検出した石材の周囲を掘り下げたところ、これの下に石は続いており、２段分を確認した。上段の石材は撹乱が及んでいたため、検出できたのは１個である。この石材は、幅約70cm、高さ35cm、奥行１m以上の規模を測る。下段の石材は３個検出しており、中央が幅約20cm、高さ25cmの大きさである。しかし、東西の石材においては調査範囲外であるために規模は不明である。

裏込めは石垣の南側において検出し、一部で撹乱によって壊されているものの６mの奥行きをもつものであった。裏込めの石材は10～20cm大の結晶片岩が多く用いられていた。

Ａ区石垣近景（北から）



Ａ・Ｂ区遺構実測図

このほか、調査区南端から北へ約２mの地点で地表面から約1.10mの深さにおいて、60cm以上の大形の砂岩を３個検出した。これらは石組みではないが、このうち２個の石材に矢穴跡が確認でき、大形の切石であることから、南側の石垣が壊された際のものである可能性を推察することができる。

B区礎石近景（北から）

土層の堆積状況については、石垣から南方向では10～30cm大の結晶片岩を多く含む黄褐色系の粗砂の層が裏込めとして堆積している。また撹乱のために土層が乱れており、石垣と裏込めの構築状況の資料を得ることはできなかった。裏込めの下層は、よく締まった黒褐色系の粗砂混シルトで整地されている。

Ｂ区は、『和歌山御城内御惣絵図』にみられる「御勘定門」にあたる地点である。地表面から約30～40cmの深さにおいて、勘定門に伴う門柱礎石の一部とみられる礎石を検出し、この礎石をそれぞれ北側を礎石１、南側を礎石２とした。また礎石１・２の構築状況を確認するために、幅約40cm、長さ約３mのサブトレンチ調査を行った。

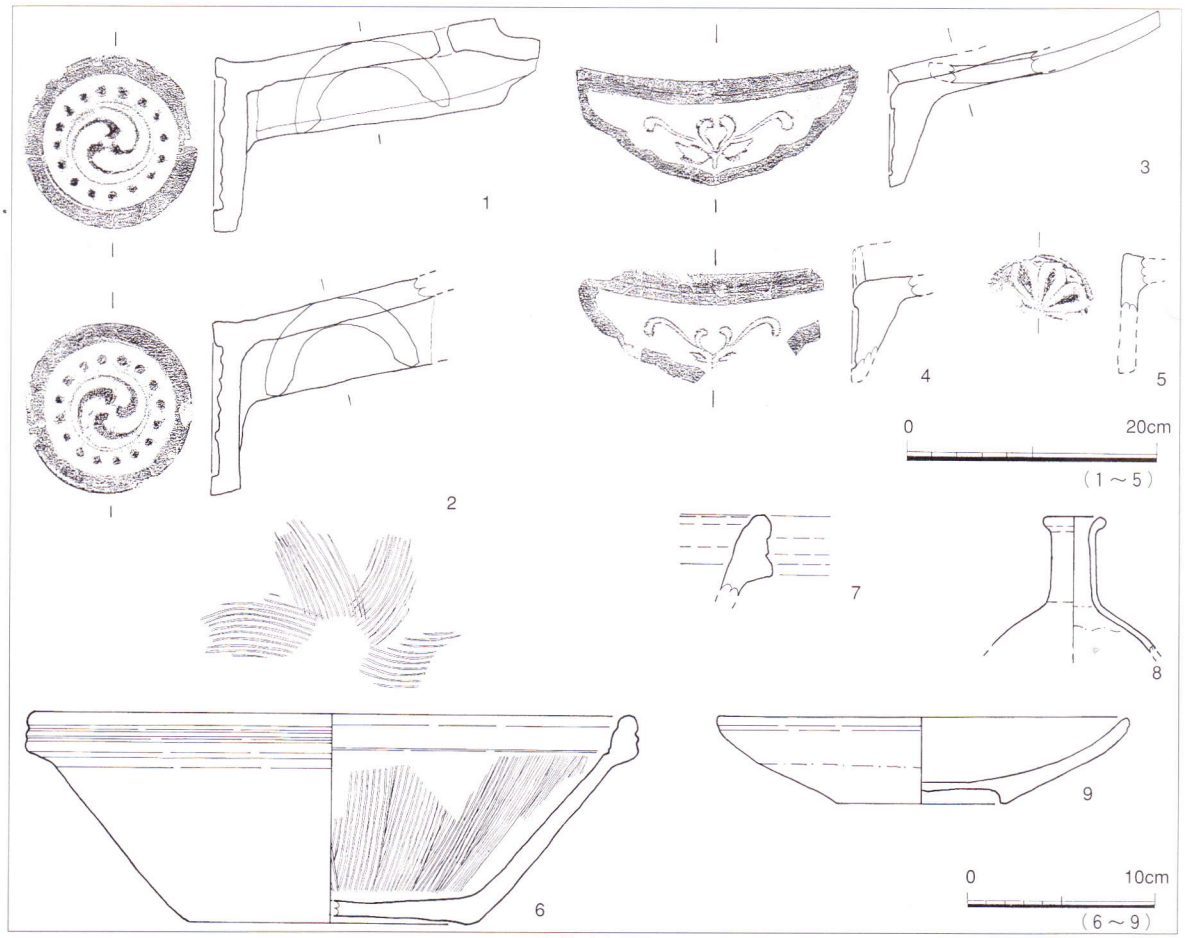
［礎石１］　調査区南端から北へ６m周辺で地表面から約40cmの深さにおいて、トレンチを横切る幅30cm、高さ約50cmの規模を測る砂岩を２個検出した。この石の長さは調査範囲外に続いているために不明である。またこの石材は北側に面をもち、南側において掘方を検出した。礎石１は東西に長く、蹴放しをこの礎石上に据えていたものと考えられる。

［礎石２］　同じく約５mの地点で地表面から約30cmの深さにおいて、１辺約30cm、高さ10cmの砂岩製の礎石を検出した。この礎石の下には根石と考えられる約20cm大の結晶片岩がみられた。

土層堆積状況などから、礎石１・２は、褐色系の粗砂の整地層によって据えられ、さらに暗灰黄色系のシルトを用いて表面を整えていることが確認された。このシルト層は、調査区南端から北へ約４～６mの範囲においてほぼ水平に整地されていることを確認した。また礎石１の北側の堆積は、各層位が北へやや傾斜している状況を確認することができた。

出土遺物　今回の調査で出土した遺物は、コンテナに約４箱であった。Ａ・Ｂ区の遺物は、近世陶磁器、瓦などが出土した。これらの遺物の大半は整地層から出土しており、石垣や門の築造時期を示すものについては確認することができなかった。

１・２は、軒丸瓦である。１・２の瓦当面は、直径13.9cm、厚2.3cm、内区径10.2cmを測る。２の全長は26.1cmである。３・４は、唐草文様の滴水瓦である。５は、軒込み瓦である。瓦当面の復元直径9.7cm、厚1.35cmを測る。６は、堺焼擂鉢である。復元口径31.6cm、復元底部径15cm、器高11.1cmを測る。クシメの単位は12本である。内底部に重ね焼きの痕跡がみられ、江戸時代後期のものである。７は、備前焼擂鉢で、江戸時代後期のものである。口縁端部に細かく打ち欠いた痕跡がみられ、重ね焼きの痕跡の可能性がある。８は、褐釉陶器の徳利である。９は、陶器の皿であり、灰黄色と透明釉を内面と外面体部上半まで施釉するものである。



遺物実測図

まとめ

A区は和歌山市消防局中消防署の西側で途絶えている和歌山城西外堀から東へ約25mの地点において、昭和初期に取り壊された西外堀の南側の石垣残存部を確認することができた。また、この石垣から南へ約７mの地点で３個の石材を検出した。これらの石材は、幕末の『和歌山御城内御惣絵図』に描かれている堀の南側の石垣から突出した箇所と出土地点がほぼ一致することから、この石垣が壊された状況を示すものと考えられる。B区で検出された礎石１・２は、『同絵図』に描かれた「御勘定門」の位置とほぼ一致することから、この門に伴う礎石と考えられる。なお、勘定門は平坦面に整地された面に礎石１・２を据え、この上に門を構築していたものと推測できる。さらに土層の堆積状況から門の北側はゆるい坂道となっていたことを明らかにすることができた。堀の範囲については、1987年の調査において、『同絵図』に描かれている西外堀から鍵手状に屈曲しながら北に延びる外堀の一部が確認されている。加えて消防署の西側から続く石垣は、今回の調査結果から、本調査地周辺に至り、やや南寄りに構築されていることを確認した。

明治維新後の和歌山城は、政府により破却処分となり民間に払い下げられた。これによって、堀は埋められ、石垣などは解体され、取り壊されて宅地などに整備が進められた。このため現在の和歌山城の規模は、絵図などから知り得る江戸時代末期の城郭よりも縮小されている。今回の調査においても明らかなように、昔日の和歌山城を復原する上においては、今後の周辺の発掘調査成果に期するものが大きいといえる。（奥村　薫）

9．寺内（てらうち）古墳群 第３次調査

調 査 地　和歌山市森小手穂字1516-23番地 他

調査面積　80m²

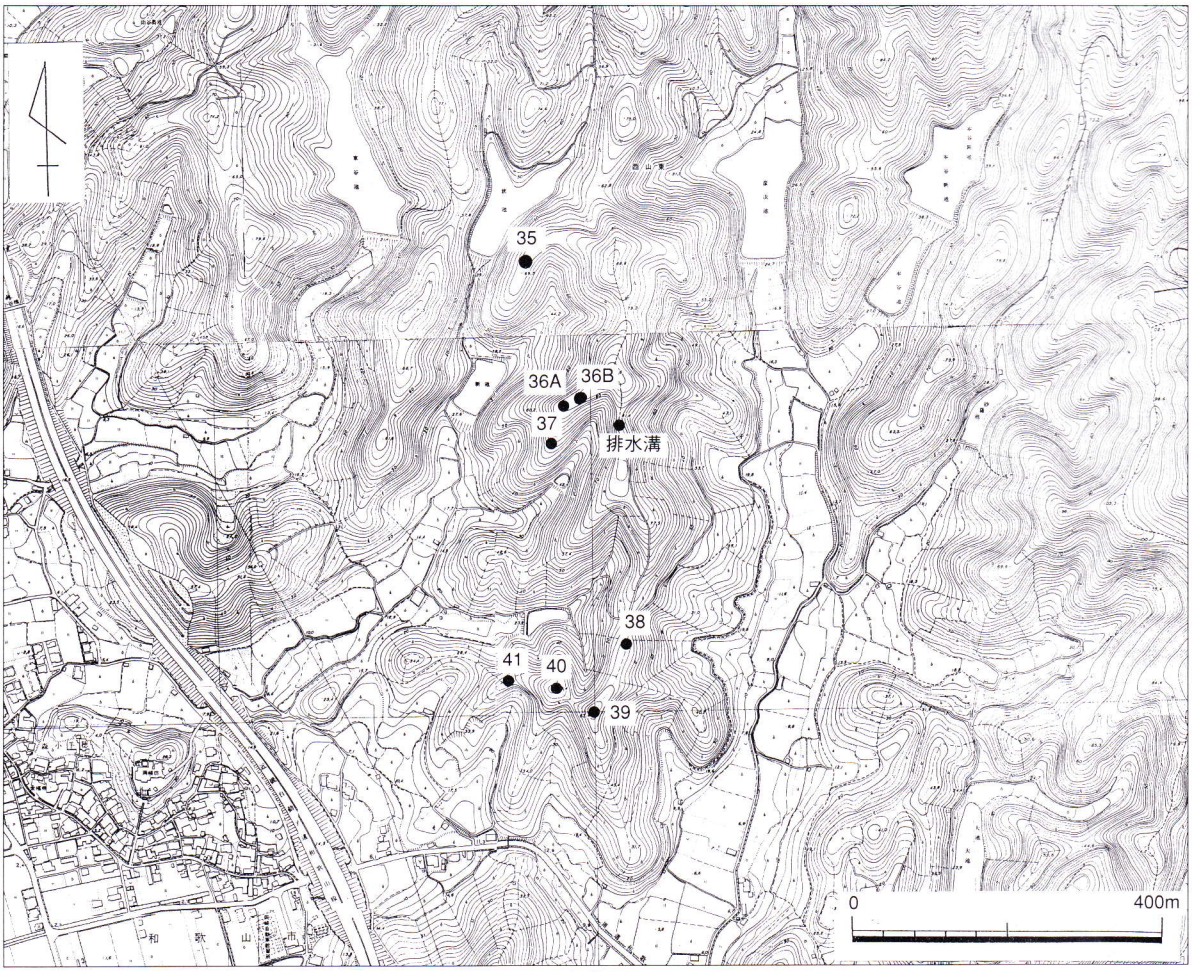
位置と環境

寺内古墳群は、岩橋千塚古墳群の立地する岩橋山塊南側の丘陵上に分布する(1)。岩橋千塚古墳群の分布範囲は、主として岩橋山塊の北側斜面すなわち天王塚・将軍塚・知事塚・郡長塚などの大型前方後円墳の存在する前山地区を中心に、花山・大谷山・大日山・寺内・井辺・井辺前山の各地区を含めた丘陵上全体に広く分布する古墳群を指す(2)。寺内古墳群は、このうちの寺内地区に含まれる。

調査内容

今回の調査は、岩橋山塊南側に位置する尾根上の隆起８箇所について、これら隆起が古墳であるかどうかの実態を解明するために確認調査として実施したものである。

調査を開始するにあたり、各隆起に対して35～41の地点名を付した。なお36地点に関しては、近接して隆起が２基存在したため36A、36Bとした。これら調査対象となった８箇所のうち、２箇所（第37・38地点）で古墳の存在を確認した。その他の地点は、自然地形であることが判明した。また当初予想していなかった地点で排水溝１基も確認した。以下第37・38両地点の調査および排水溝



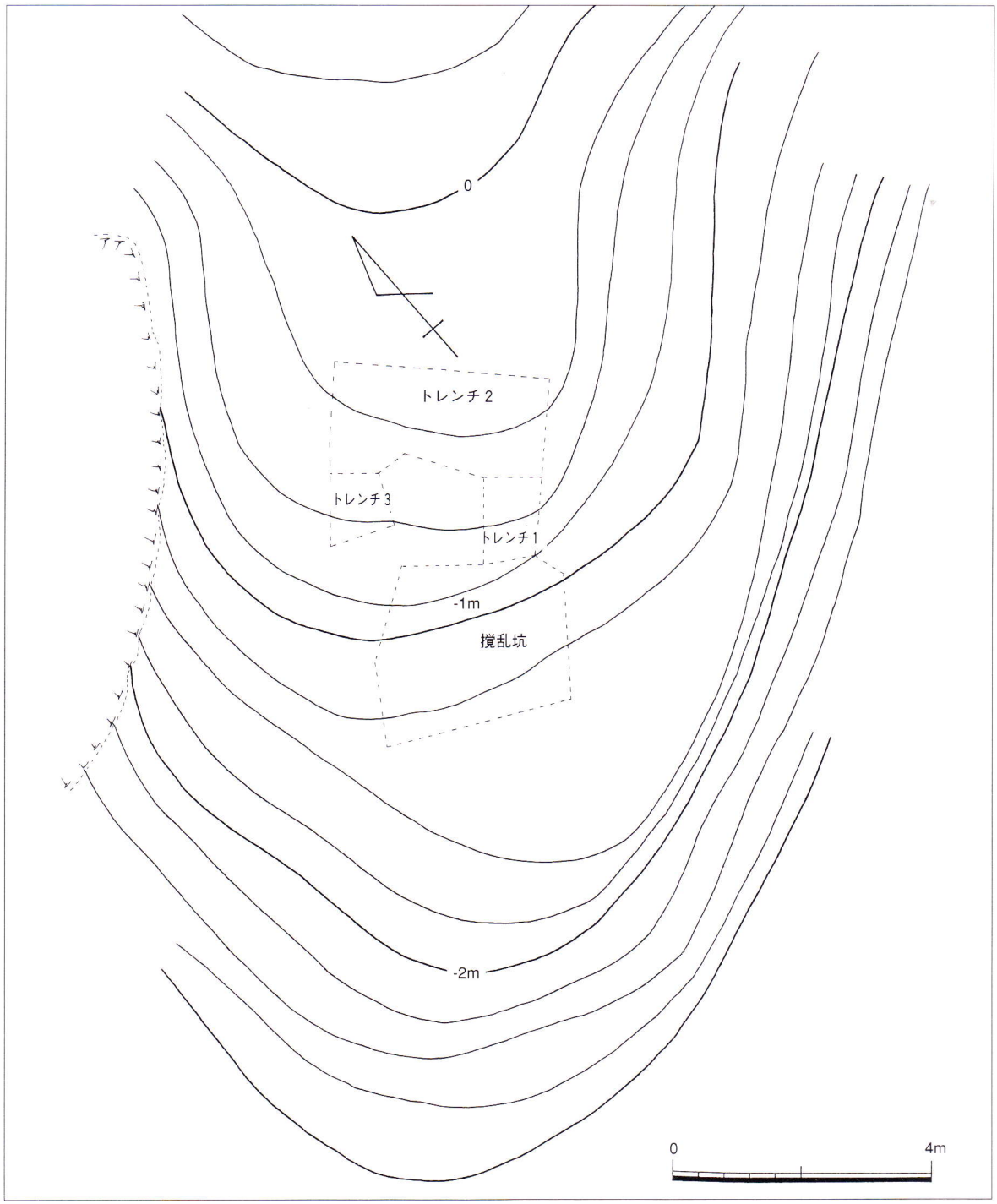
調査位置図

について記述する。

（１）第37地点の調査

第37地点は、北東から南西方向に派生した尾根の先端部に存在し、標高は約60mを測る。この古墳は地形測量の結果、等高線の状況などから円墳と推定できる。墳丘の直径は5.5mで、その高さは約1.5mと考えられる。以下、記述を進める便宜上、実際の北東方向を北とする。

墳丘の南部には不定形の撹乱坑が存在し、その規模は一辺約３m、深さは約3.5mを測る。調査は、最初に撹乱坑内部を精査し、その後撹乱坑以外において東西および南北方向のトレンチを設定した。各トレンチ名は南北方向をトレンチ１、東西方向をトレンチ２、トレンチ２を南に拡張した部分を



第37地点トレンチ設定図

トレンチ３とした。但し、墳丘上に樹木が生成しているため、各トレンチは不定形をなす結果となった。以下に撹乱坑内および各トレンチの調査で得られた成果について述べる。

撹乱坑内

撹乱坑内を精査したところ、その底部で拳大よりもやや小振りな河原石群（玉石）を検出した。この玉石は散乱した状況であることから、本来石室の床面に敷かれていたものが撹乱を受けて乱されたものと考えられる。この玉石の直上で須恵器高杯、須恵器長頸壺、須恵器脚台付壺などが出土した。

第37地点トレンチ２石材検出状況（北東から）

第37地点撹乱坑内完掘状況（南西から）

トレンチ１

幅80cm、長さ約３mの南北方向に設定したトレンチである。主として南半部西壁および北端部で緑色片岩を検出した。これら緑色片岩は、石室に用いられた石材と考えられる。これら石材の検出面は、トレンチ南半部で現地表面下約１m、北端部では現地表面下約40cmを測る。

トレンチ２

幅約1.4m、長さ約3.5mの東西方向に設定したトレンチである。現地表面下約30cmで緑色片岩が集積した状況を検出した。これら緑色片岩は、トレンチ１検出のものと同様、石室に用いられた石材と考えられる。

トレンチ３

このトレンチは、トレンチ２で検出した緑色片岩の集積が南へ展開するかどうかを確認するために設定した。その結果、北部では現地表面下約30cm、南部では約50cmで、トレンチ２と同様に緑色片岩の集積した状況を検出した。

（２）第38地点の調査

第38地点は南北方向の陵線上に位置し、標高は約60mを測る。この古墳も地形測量の結果、等高線の状況などから円墳と考えられる。墳丘の直径は約７mで、墳丘の高さは約75cmと推定できる。

この地点での調査は、墳丘裾に１ヵ所、墳丘上部に２ヵ所の計３ヵ所にトレンチを設定した。各トレンチ名は墳丘裾部の東西方向をトレンチ１、墳丘上部の南北方向をトレンチ２、トレンチ２に直交するトレンチをトレンチ３とした。以下に各トレンチの調査で得られた成果について記述する。

トレンチ１

古墳の基底部および周溝等の存在と、地層の堆積状況を確認するために設けたトレンチである。このトレンチ調査の結果、地層はほぼ水平に堆積しており、現地表面下約30cmで緑色片岩の岩盤を検出した。このトレンチ内で遺構等は存在しなかった。

トレンチ２

幅1.2m、長さ16.5mのほぼ南北方向に設けたトレンチである。このトレンチ中央よりやや南側において、東西方向の溝（溝１）を検出した。この溝の規模を確認するために、トレンチ２の一部を西側へ拡張した。東側に関しては地形の制約上拡張を断念した。その結果溝１は幅50cm、長さ２m以上であることがわかった。この溝内から遺物は出土しなかった。

また、トレンチ北半部には幅1.2m以上、長さ３mを測る撹乱坑が存在した。この撹乱坑内の埋土には、ガラス片やビニールなどが含まれることから、近代に入ってからの撹乱と考えられる。但し、この撹乱坑内を精査したところ、その底からは、拳大よりもやや小振りの河原石が若干出土した。

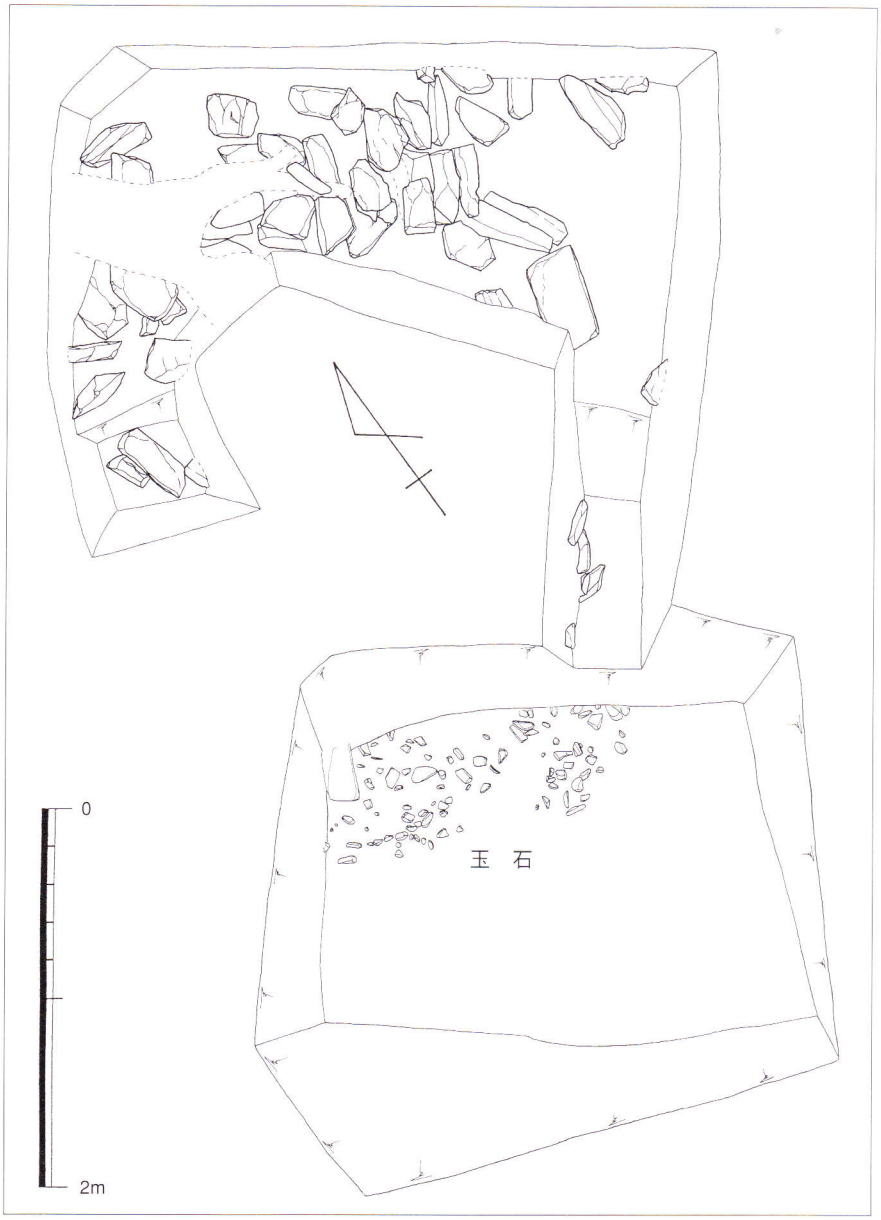
このトレンチの南北断面を観察すると、現在残存している墳丘の規模は約７mと推定できる。

トレンチ３

墳丘の中央部と考えられる位置に、トレンチ２と直交する形でトレンチ３を設けた。トレンチの規模は幅1.2m、長さ８mとした。

このトレンチの東西断面をみると、墳丘中央部（トレンチ１との交差部分）を中心に東西へ流出する形で土層が堆積している状況を観察することができた。しかし、このトレンチ内で遺構は認められなかった。また遺物の出土もない。

第38地点の古墳では、埋葬主体部や時期を特定できる遺物を確認することはできなかった。しかし、地形測量およびトレンチの断面観察等によって、古墳であることは間違いないと思われる。埋葬主体部に関しては後世に完全に削平されたか、または今回設定したトレンチ以外の場所に存在すると考えられる。



第37地点遺構平面実測図

（３）排水溝

寺内古墳群の存在する丘陵の南北方向に延びる

陵線上から、第37地点の古墳が存在する尾根への分岐点付近で古墳の排水溝が露出しているのを偶然に発見した。この排水溝は、上記陵線上で北方から南方に下る斜面に設けられている。よって、この排水溝を持つ古墳は、かつて北方に位置していた事が考えられる。

（4）出土遺物

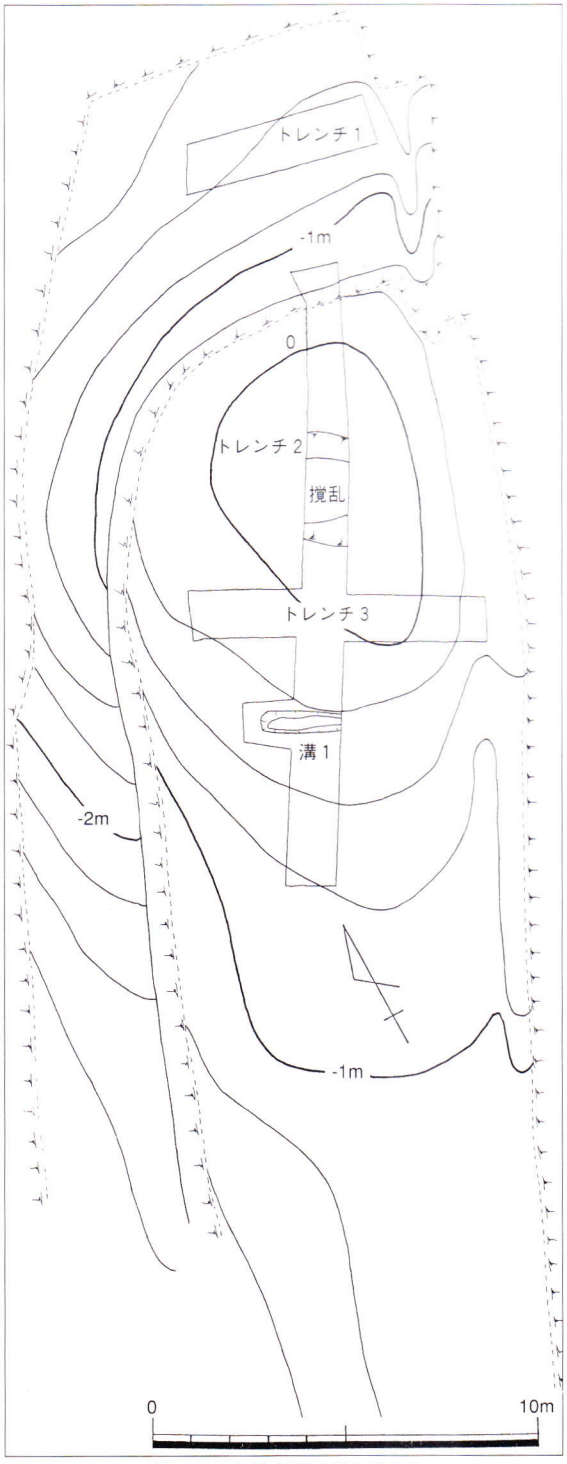
今回の調査では、第37および第38地点で遺物の出土をみた。出土量は、遺物収納箱（コンテナ）に2箱であり、このうち土器類はコンテナ1箱を数える。これら遺物のうち図化できたものは、第37地点の撹乱坑内から出土した以下の4点である。

1は須恵器高杯である。口径10cm、器高7.0cmを測る。このうち杯部の高さは2.5cmを測る。調整は、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。焼成は良好で、胎土は比較的密である。胎土中に直径0.2～1.0mm大の白色砂粒を多く含む。色調は、内外面ともに暗灰白色を呈する。時期は7世紀前半頃と推定できる。

2は、須恵器長頸壺の頸部である。口径7.0cm、残存高は9.5cmを測る。調整は、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。焼成は良好で、胎土は比較的密である。胎土中には直径0.2～1.5mm大の白色、灰色、黒色砂粒を多く含む。色調は、外面が暗灰色で、内面および断面は、明灰色である。また、外面の一部には暗灰緑色のガラス質の自然釉が付着している。この遺物の時期は、1の高杯に近いものと考えられる。

3は、脚台付壺の胴部から底部にかけての破片である。最大径は13.5cmを測り、残存高は6.8cmを測る。底部に脚台の接合痕が残存する。このことから脚台の上端径は、6.5cmに復元できる。調整は、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。焼成は良好で、胎土は密である。胎土中に直径0.2～1.0mm大の白色砂粒を若干含む。色調は、内外面ともに明灰色である。上述2の壺頸部とは、同一個体である可能性も考えられる。

4は、須恵器の高杯とみられる脚部で、残存高は8.0cmを測る。胎土は密であるが、磨滅が著しく調整痕は残っていない。透かし窓は長方形で、2方に施されていたものと推定できる。焼成は、非常に軟質な焼上がりで、いわゆる「生焼け」の状態である。色調は、内外面ともに明灰黄色である。



第38地点遺構平面実測図

まとめ

今回の第３次調査では、古墳と推定される地点を合計８ヵ所にわたって調査したが、このうち第37・38地点の２ヵ所で古墳の存在が確認できた。

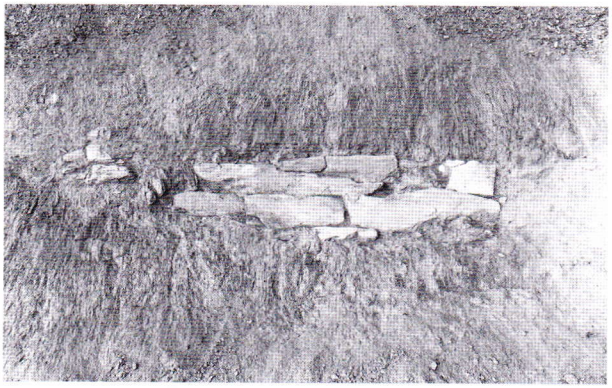
特に第37地点では、撹乱坑内に横穴式石室の残骸と思われる石材や玉石が残っており、須恵器の高杯、壺などが出土した。この須恵器の製作時期は、６世紀末から７世紀前半頃と推定できる。

また、第38地点および排水溝に関しては、年代を推定できるような遺物が出土していないため、遺構の時期は不明であると言わざるを得ない。

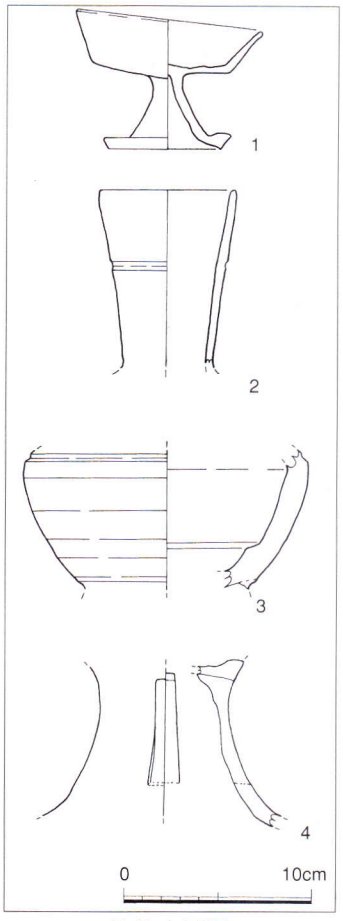
岩橋千塚古墳群全体は、５世紀後半から７世紀前半にかけて、700基近い古墳が営まれるが、第37地点撹乱坑内出土の須恵器は、岩橋千塚古墳群の造営が終焉を迎えようとしている頃に石室の中に持ち込まれたと言うことができる。

（木建正宏）

第38地点完掘状況（北から）



排水溝確認状況（東から）



遺物実測図

註

（１）和歌山県教育委員会　『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』　1996

（２）『和歌山県史』「考古資料」　和歌山県史篇さん委員会　1983

10. 和歌山城跡（わかやまじょうせき） 第５次調査

調 査 地　和歌山市小人町29番地

調査面積　90m²

位置と環境

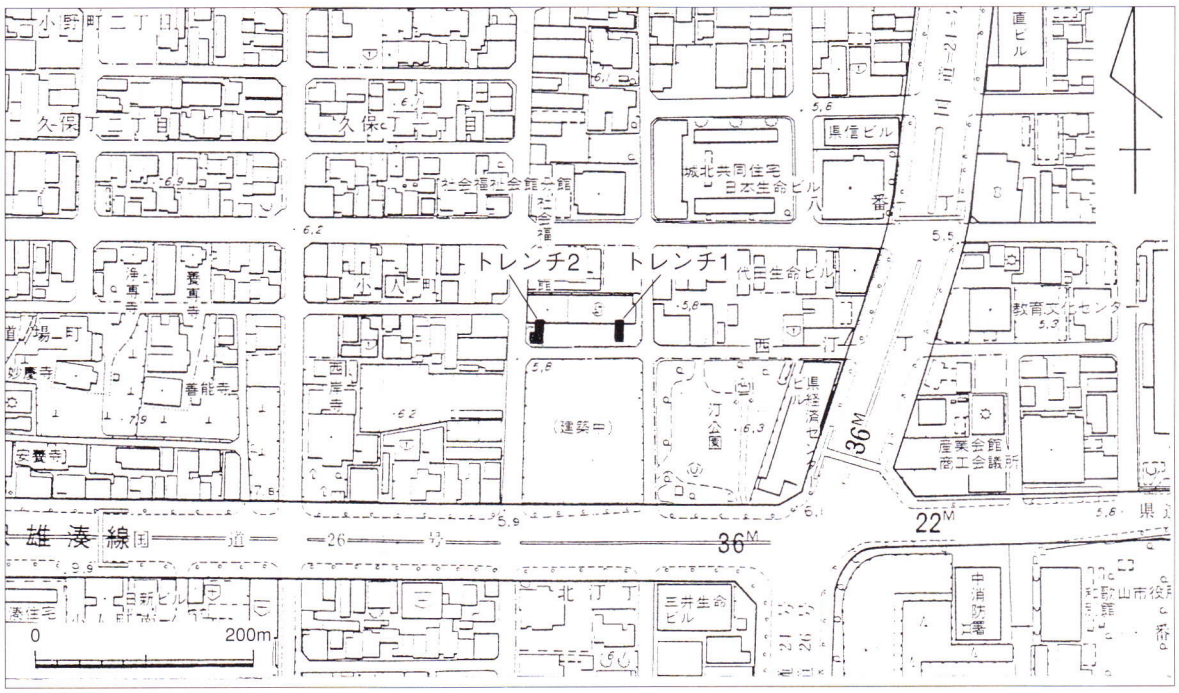
和歌山城跡は、和歌山城三の丸に相当する遺跡である。また特に調査地は、和歌山城の西外堀に相当する。西外堀は、和歌山城西の丸外周から現在の十三番丁の西部に至り、市堀川に続くものである。安政２（1855）年にかかれた『和歌山城下町図』などの文献史料によると、堀の幅は15～18mの規模であると推定される。しかし、和歌山城の外堀は明治時代以降に埋め立てが行われ、現在ではその姿をみることはできない。西外堀の部分については、昭和２年から同15年の間に埋め立て工事が行われたことが判明している。今回の調査は、遺跡の範囲内において和歌山市中央交流センター建設工事が実施されることとなり、それに先立ち行ったものである。

調査内容

調査は埋没した堀に直行するかたちに２ヶ所の調査区を設定して行った。各々の調査区は、幅４m、長さ10mであり、必要に応じて一部拡張した。また調査対象地内の東側にある調査区をトレンチ１、西端の調査区をトレンチ２と呼称した。

トレンチ１では、第二次世界大戦前後の昭和期の整地土が厚く堆積し、また建物の基礎によって一部撹乱されていた。最深部においては現在の地表面から約2.5mのところまで掘削したが、江戸時代の地層までには至らず石垣は検出できなかった。

トレンチ２は、堀が西から北へ屈曲する部分に相当する。ここでも、土層の堆積状況はトレンチ１と類似しており、昭和期の整地土が厚く堆積していた。このトレンチでは、第二次世界大戦時の焼土層が明確にみられた。さらに調査区の南西隅では、焼土層の下層から、50～70cmの大きさを測る石材が約20個集中して出土した。



調査位置図

検出した石材は砂岩と緑色片岩の二種類みられ、砂岩が多数を占める。砂岩については、方形に切り出したとみられるものが多い。石材は人為的に積み上げたものではなく、2.5Y4／1（黄灰）・粗砂混シルトの堆積土とともに乱雑に投棄されたような状況であり、その層中には煉瓦片や近代陶磁器などが含まれていた。そのためこれらの集石は石垣ではないが、石材の形状やその堆積状況から、石垣が倒壊したものかもしくは堀が埋め立てられた当時破損した石垣の石材と推測された。したがって、石垣は調査区よりさらに南および西外側に位置すると考えられたため、石材が集積している部分を中心に拡張したが、石垣を検出することはできなかった。

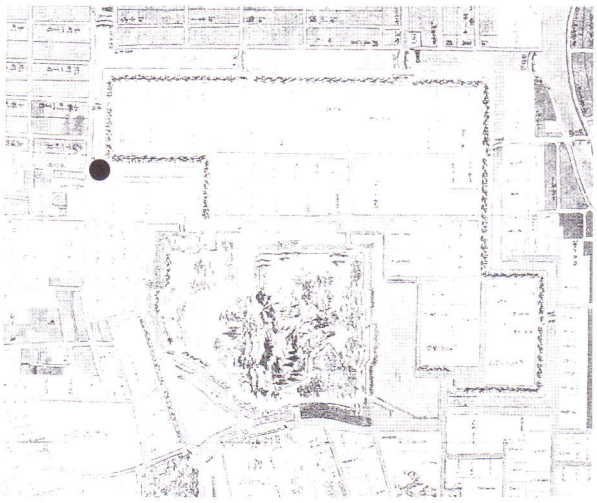
さらに焼土と石材の下層は、黄灰色系の砂層となる。これら砂層には近世および近代陶磁器などの遺物が含まれる。また土層断面を観察すると砂層は、徐々に堆積したものではなく一度に埋めたような状況であった。西外堀は、戦前に埋め立て工事が行われており、砂層はその当時の堀の整地土とみられる。しかし、戦災後の整地土や戦災の焼土が調査区内において、南から北に向かって傾斜していることから、戦後しばらくの間は堀の痕跡があったとみられる。

まとめ

『和歌山城下町図』から復元してみると、今回の調査では堀の内部とともに南側の石垣の一部が検出できると考えていた。調査の結果、石垣は検出できなかったが、石垣の石材とみられる石材が多数出土していることや、18世紀代の陶磁器類がみられるため、堀の南側の石垣は今回の調査地の南方近くに存在する可能性が高いとみられる。

（栗本美香）

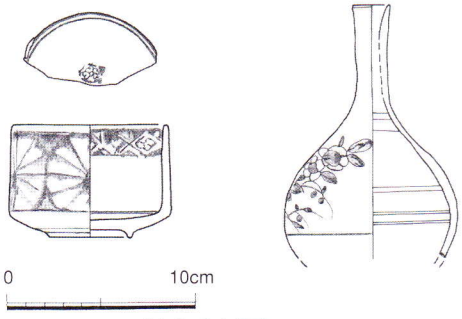
注１）和歌山城下町図　紙本着色　野際蔡真画安政２（1885）年　和中光次氏蔵に加筆して作成



和歌山城下町図部分複写[1]（上が北）

トレンチ１（北から）

トレンチ２（北から）



遺物実測図

11. 茶臼山古墳（ちゃうすやま） 第２次調査

調 査 地　和歌山市木ノ本761-2番地

調査面積　123m²

位置と環境

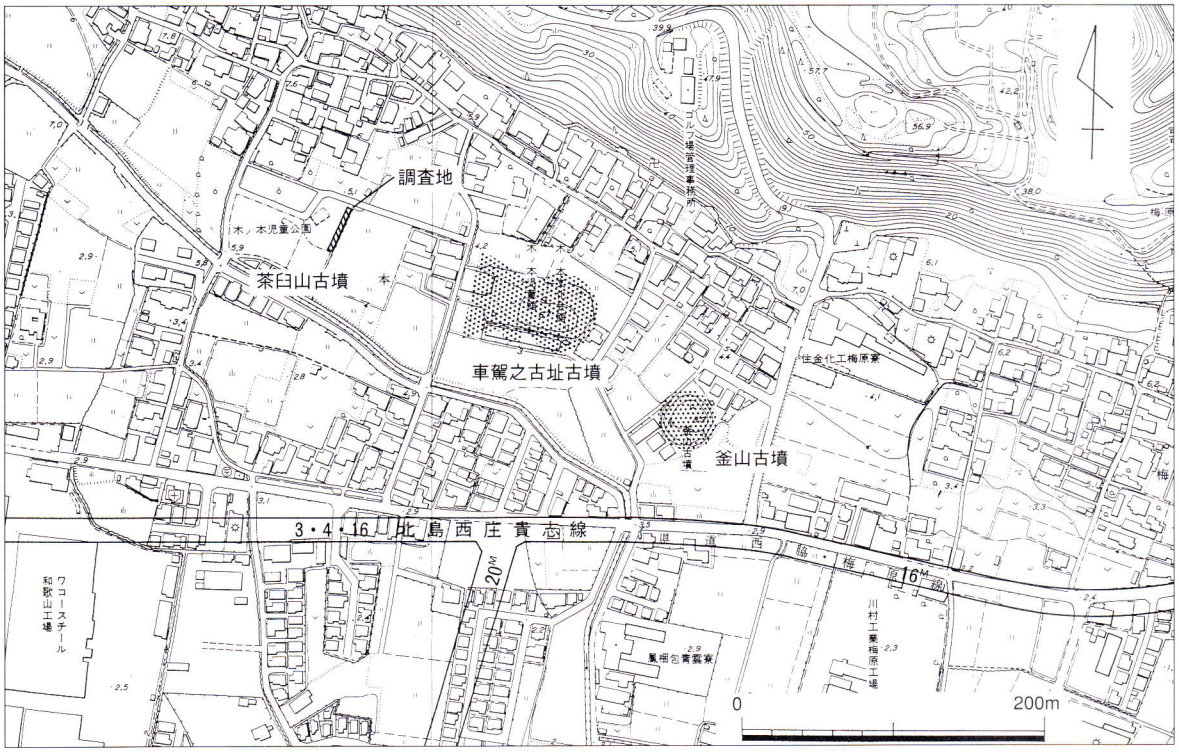
この調査は、石垣の改修工事に伴い和歌山市教育委員会が緊急発掘調査事業として国庫補助金を得て実施したものである。調査対象地は、茶臼山古墳の後円部推定地にあたり、東西約４m、南北約29mの方形区画である。

茶臼山古墳は古代の紀ノ川によって形成された大規模な砂堆の背後に残されたラグーン内に存在する。この茶臼山古墳の存在する釜山古墳群には、これまで３基の古墳が確認されている。まず釜山古墳は、最も東に位置する円墳で径約40m、高さ約７mの墳丘をもつ。また車駕之古址古墳は前方部を西に向けた前方後円墳で、南側のみに造り出しをもつものである。規模は、全長約86m、後円部直径約51m、くびれ部幅約33m、前方部幅約62m、前方部長約41m、後円部の高さ4.0m以上とされる。また周溝及び外堤を含めた規模では、推定全長約120mにも及ぶことが確認されている。遺物では多量の埴輪片に混ざり、1,000点以上のガラス小玉が出土し、特筆すべきものに後円部から出土した金製勾玉がある。

茶臼山古墳にかかわる調査は隣接する木ノ本児童公園内において第１次調査が実施されている。この調査では、外堤とみられる堤状の地形およびその頂上部両端で７本の円筒埴輪列を検出し、外堤に伴う埴輪列と考えられている。

調査内容

当調査地の基本層序は、大半が古墳の墳丘部にあたるためほとんどが削平を受けた墳頂部上に堆

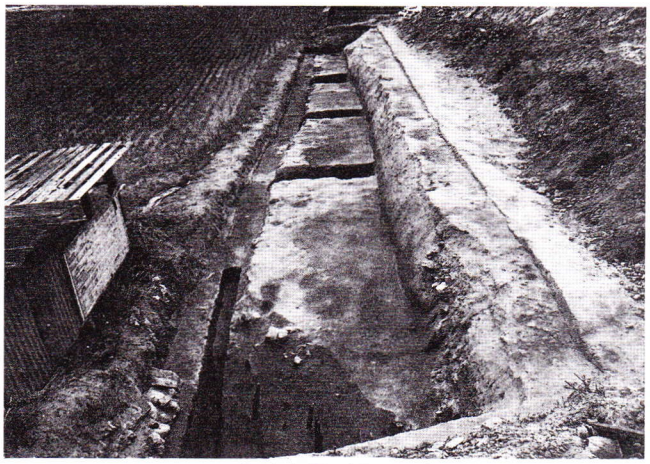


調査位置図

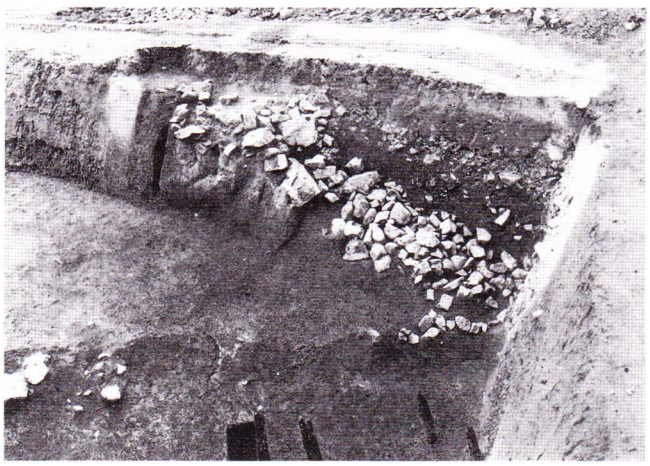
積した約10cmの厚みをもつ表土（10YR4/2（灰黄褐）細砂）のみが堆積土である。しかし、墳丘斜面にあたる南北両端では墳丘の傾斜に沿った堆積がみられた。

まず北側の墳丘斜面の堆積は上層部に近世の肥前系の陶磁器等が出土し、その下層から葺石の転石に混ざり埴輪片が出土している。しかし、北側周濠の最下層まで輸入陶磁器や瓦器等の中世遺物が出土していることから周濠は少なくとも中世まで存在していたことが窺え、打ち込まれた杭列などから潅漑などの役割を果たしていたものと考えられる。また墳丘内部の構成土は、まず標高約2.2m前後に堆積したベース土とみられる10YR4/3（にぶい黄褐）細砂の直上に30cm前後の厚みをもつ5Y2/1（黒）粘土が堆積している。この粘土層は内部構造を確認するためのトレンチ１～４すべてに確認でき、また北側の周濠によって途切れている。この状況からおそらく古墳の墳丘内部のみにこの粘土層が全面に堆積しているものと考えられる。この粘土層の上部は粘土質の土層と砂質の土層が互層になり、比較的下層の方が粘質が強く、黒色粘土ブロックも下層に多く含まれる状況が確認できた。これらの墳丘内部の堆積土から遺物は全く出土していない。

今回の調査で確認した墳丘の状況は、後円部の緩やかなカーブと北側の一部において遺存状態の良い葺石と周濠を検出している。また南側では墳丘斜面を検出し、調査範囲の中に限られるが後円部の規模を明確にしている。この状況から残存する墳頂の高さは標高約4.2m、北側における周濠の基底部からの残存後円高1.7mを測る。また周濠の底面は、標高約2.5mである。墳丘斜面の傾斜は、南北両端の立ち上がりから両者とも約27°の角度を測る。この斜面に積み上げられた葺石は、北側の斜面でのみ良好な出土をみたが、南側では剥落したものかわずかに残存するのみである。葺石の石材は、ほとんどが10～20cm大の和泉砂岩を用いて積み上げている。和泉砂岩には丸みをもつ自然石と割石の両者がみられ、なかには40cm大のものも含まれており、これらが区画列石になる可能性がある。砂岩以外では、若干の緑色片岩も含まれている。


調査地全景（北から）

次に出土遺物は中央部が削平を受けた古墳の墳丘部に位置するため全体的に希薄であり、このためほとんどが南北両端の墳丘斜面の堆積土から出土している。特に、北側の周濠周辺の堆積土から良好な遺物が認められ、この古墳に樹立していたとみられる多くの埴輪片や中・近世に至る遺物が出土している。また墳丘裾部の堆積土内からガラス玉が１点出土している。


北側墳丘斜面の葺石

まず埴輪は円筒埴輪が多くを占め、若干の朝顔形埴輪が含まれている。円筒埴輪には、灰色の色調を呈する硬質な須恵質埴輪、黄褐色の色調を呈する軟質な土師質埴輪とその中間的な焼成であり、赤褐色の色調をもつ半須

恵質埴輪が存在する。円筒埴輪の外面調整は１次調整にタタキ技法を用いるものとタテハケ調整を用いるものがある。またタガを貼り付けたのちの２次調整にはＣ種ヨコハケを用いるものがほとんどであるが、わずかにＢ種ヨコハケを施すものがある。なかには１次調査で確認している横方向の板ナデを用いるものもある。この状況からタタキ⇨（タガ）、タテハケ⇨（タガ）、タテハケ⇨（タガ）⇨ヨコナデやタテハケ⇨（タガ）⇨ヨコハケの順序が確認できる。またタタキは右上がりのものと左上がりのものと両者の重なりがみられるものが存在する。ハケの条線密度では３～５本／cmと比較的粗いものや10本／cm前後と比較的細かいものがある。内面調整はほとんどがヨコナデによって調整されているが、なかには上方にナデ上げているものがある。

次に、タガの形状は断面が台形状を成すものと「M」字状を呈するものがある。タガの高さは、1.0cm程度のものが多くを占めているが、比較的高いものでは1.4cmを測り、また低いものでは0.6cmのものがある。タガの幅では下底幅1.7～2.2cm、上底幅1.3～1.6cmを測るものが多くを数えるが、極端に幅が狭いものとして下底幅1.1cm、上底幅0.8cmを測るものがある。

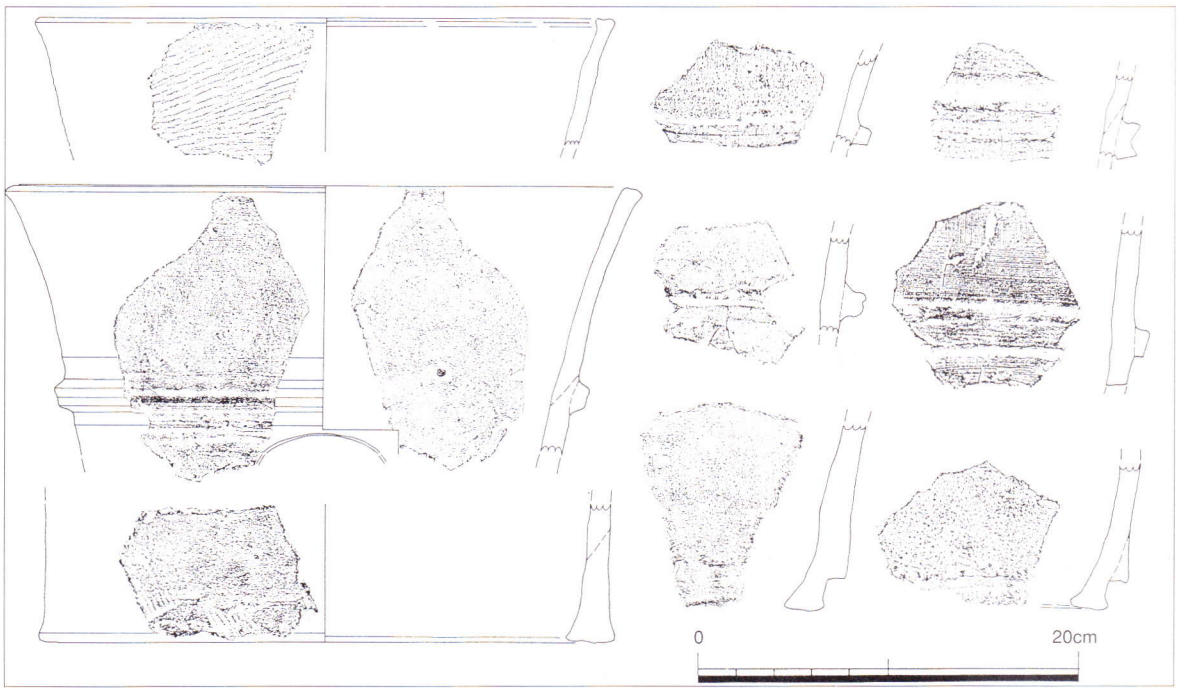
次に、底部の形状は、いわゆる「淡輪技法」を用いたものと用いないものの二種がある。これら両者の底面には繊維状の圧痕が顕著に残る。

埴輪以外では、若干の須恵器片や土師器が含まれている。また北側墳丘斜面の堆積土からガラス玉１点が出土している。古墳時代以外の遺物では、黒色土器椀や輸入陶磁器である中国製白磁碗・青磁碗、瓦器椀、土師器羽釜・皿、東播系須恵器こね鉢、常滑焼甕、瓦、肥前系陶磁器、炮烙、泥面子などが出土している。

まとめ

茶臼山古墳は平成５年度に実施された第１次調査により前方部の外堤に樹立されたとみられる埴輪列が検出され、前方後円墳である可能性が強まった。

今回の成果は、これまで推定とされていた後円部の規模を含め、墳丘の内部構造などを新たに明らかにすることができた。まず後円部の大きさを復原すると、削平を受けた後円頂部で直径推定



遺物実測図

29m、基底部の後円径推定36mであることが判明した。また、残存する後円高は1.7m（標高約4.2m）を測り、基底部（標高約2.5m）からの墳丘斜面傾斜角度は、南北両端の立ち上がりから両者とも約27°の角度が得られている。

次に、第１次調査の成果を踏まえ前方後円墳として全体を考察すると、古墳の主軸は磁北よりN-77°-Wとなり、前方後円墳でも前方部長がかなり短い帆立貝式古墳である可能性が強まった。

古墳の内部構造は近接する車駕之古址古墳においても同様に確認されているベース面直上の粘土が古墳の構築時に運ばれてきたものかは不明確である。また、その上層にいたっても粘質と砂質の互層になり、遺物は出土していない。このことから、本古墳は海岸の砂丘において自然に形成された砂堆上に構築された古墳の可能性が残る。

後円部及び前方部外堤復元図

本古墳の築造時期は、現状では明確にできないが出土した円筒埴輪より川西宏幸氏のⅣ期に併行するものとみられ、５世紀中頃から後半期の年代が考えられる。タガの突出やタタキ技法が比較的多くみられることから車駕之古址古墳に比べ古い要素を示し、また大阪府岬町の西陵古墳の埴輪に近いものである。車駕之古址古墳がこれまでの調査において、５世紀第３四半期を前後する頃の築造とみられ、また西陵古墳が５世紀第２四半期頃とみられていることより、茶臼山古墳は両古墳の狭間に構築されたものと考えられる。

（井馬好英）

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報―茶臼山古墳第２次調査―』　和歌山市教育委員会　1996

12. 太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡 第30次調査

調 査 地　和歌山市太田355-1番地

調査面積　18m²

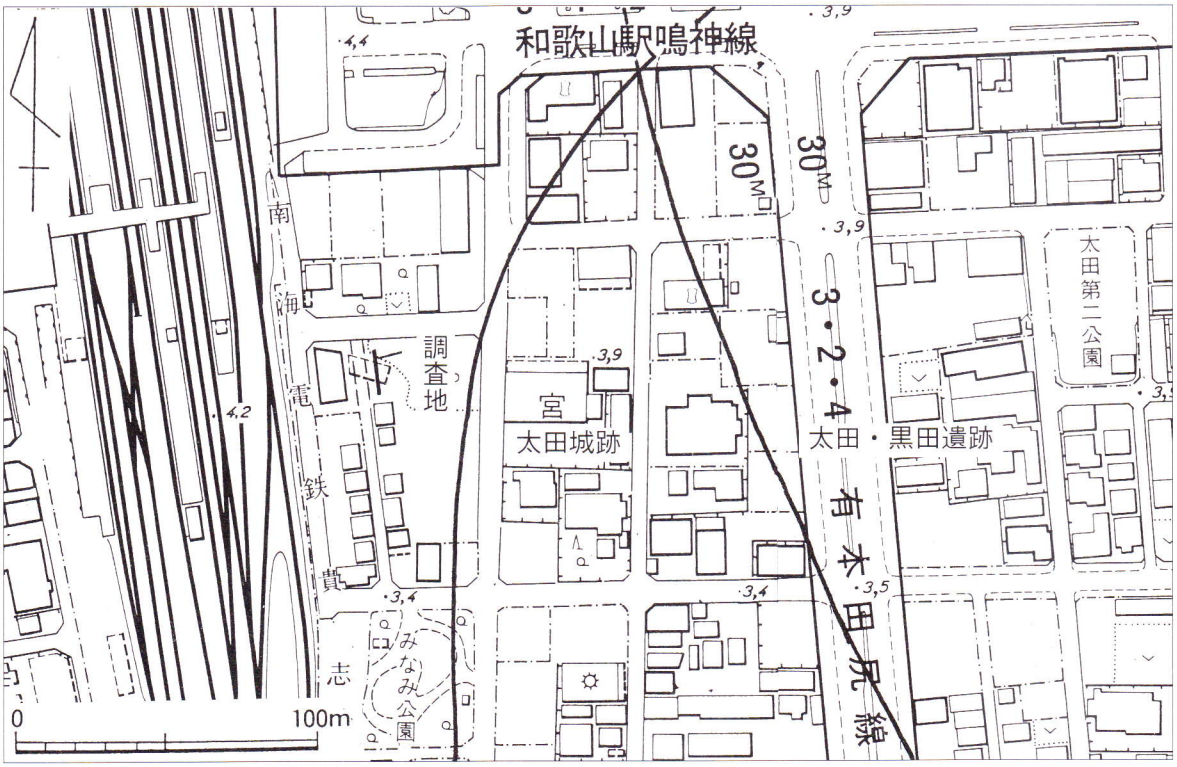
位置と環境

太田・黒田遺跡は、和歌山平野の中でも屈指の規模をもつ大規模複合遺跡である。弥生時代に遺跡としての発展期を迎え、竪穴住居・土坑・溝・井戸・水田状遺構等が確認されており、弥生ムラとしての姿が明確になりつつある。しかしながら、当時の主要遺跡において確認されている環濠については確認されてなく、遺跡範囲は不明確である。事務所建築に伴う今回の調査地は、遺跡推定範囲の西端に位置する。

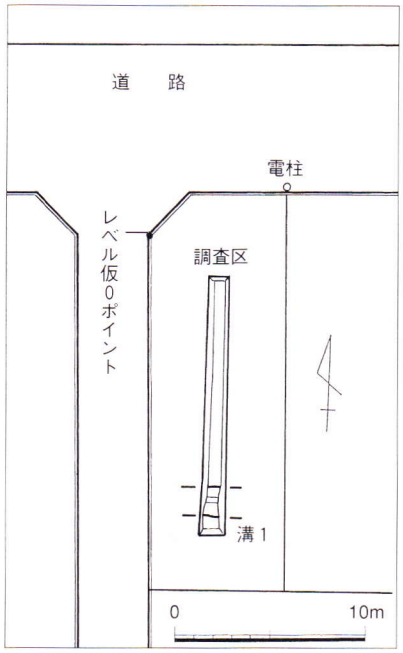
調査内容

調査対象地に幅1.1～1.3m、長さ14mの調査区を設定した。堆積状況としては、地表より厚さ80cmの盛土（１層）、厚さ５～15cmの旧耕作土（２層）、厚さ１～５cmの床土（３層）がみられ、遺構は２層と３層の下面から灰黄茶色粘質土の５層を切り込んで形成されていた。

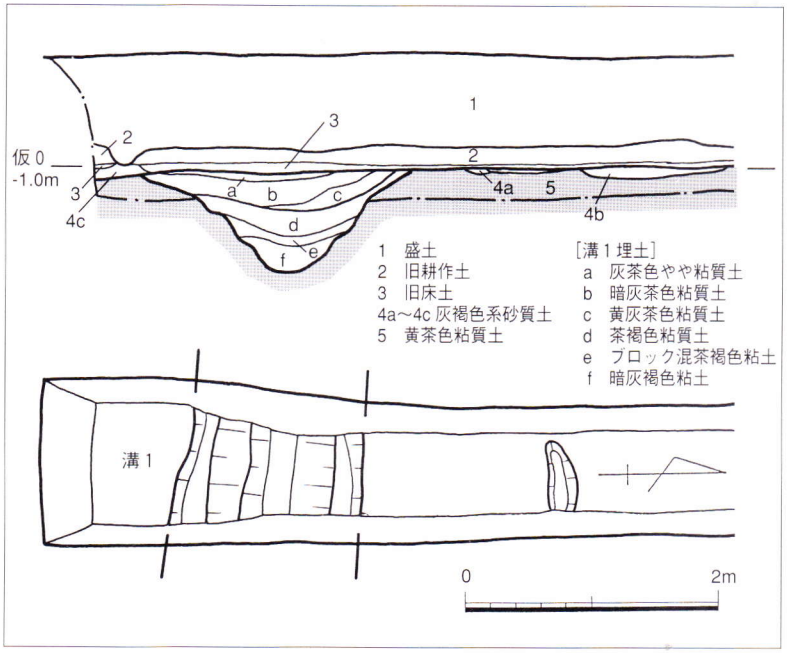
濁灰褐色砂質土の４ａ～４ｃ層は深さ５～10cmの浅い土坑の埋土である。今回の調査で、明確な遺構として検出されたのは溝１である。調査区の南端を東西方向に横切るこの溝は、幅2.2m、深さ約80cmで、長さは１m分が検出されたのみであった。溝内の堆積はａ～ｆ層の６層に分層され、大きくは上層の灰茶色系粘質土（ａ～ｃ層）と下層の茶褐色系粘土（ｄ～ｆ層）に２分される。溝の断面形態は、途中２ケ所に平坦面をもつU字形であり、掘り直し等により一定期間機能していたことがわかる。溝の底面レベルは、東壁面より西壁面の方が２～３cm低く、遺跡全体からみた調査区の位置よりみても東から西方へと流れていた可能性が高い。



調査位置図



調査区位置図



調査区南半実測図

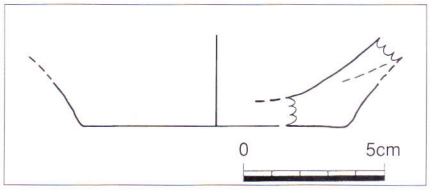
出土遺物は少なく、調査区全体でも土器片20点程度である。2層より土師質土器3点、溝1の上層より須恵器1点、土師質土器8点、中層より土師質土器6点、最下層より弥生土器壺の底部片が出土している。壺の底部以外は、ローリングを受けた細片である。

まとめ

遺跡推定範囲の西端部での調査であったが、弥生時代中期には機能していたと推定される溝を検出することができた。調査地の絶対高は求めていないが、周辺の地形図を参考にするならば、道路面の標高は3.7m前後と推定されることから遺構面の標高は2.6m前後と考えられる。溝埋土に含まれる遺物量の少なさや調査区内の遺構の状況よりみて、調査地は集落の周辺であることにかわりはないが、明確に遺跡の範囲内に含まれ、現在の推定範囲よりも遺跡の範囲は西方へ拡大することが判明した。

（前田敬彦）

調査区全景（南より。手前が溝1）



溝1最下層（f層）出土　弥生土器

13. 鳴神（なるかみ）Ⅳ遺跡 第７次調査

調 査 地　和歌山市鳴神633番地

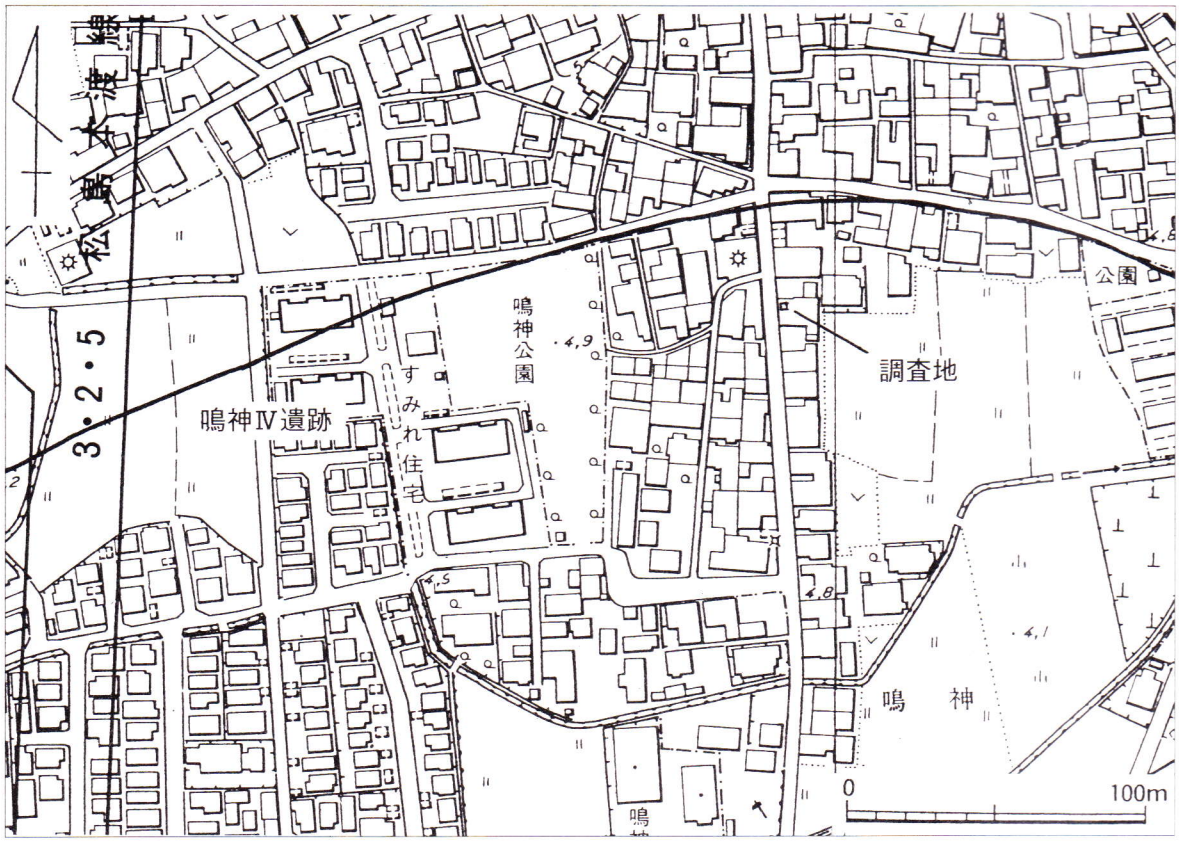
調査面積　2 m²

位置と環境

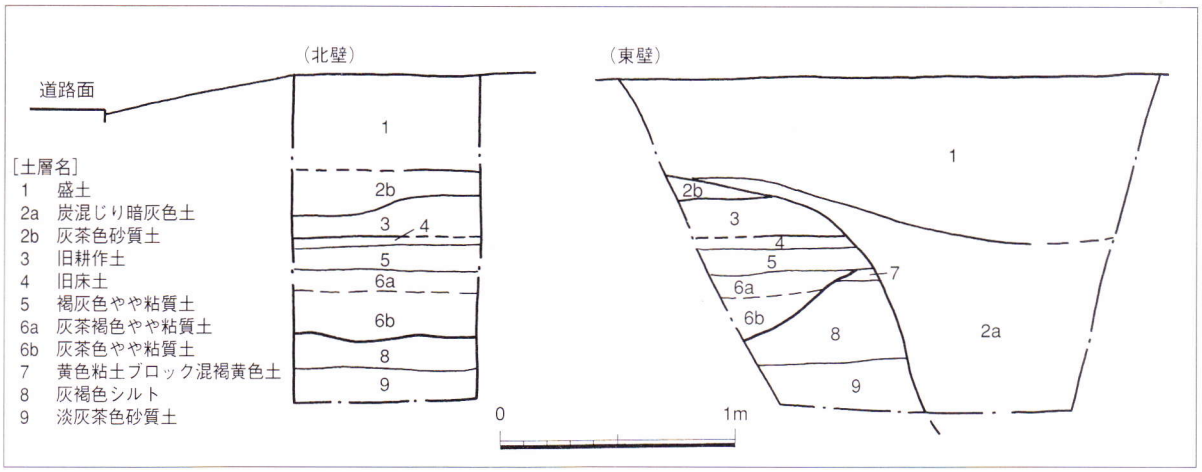
鳴神Ⅳ遺跡は、和歌山県内で最大の古墳群である岩橋千塚古墳群の所在する岩橋丘陵の西側の平野部に展開する遺跡である。昭和52～54年の国道24号バイパス工事に伴う和歌山県教育委員会による調査により古墳時代の竪穴住居・溝・井戸や平安時代の自然流路等が検出されている。また、その後和歌山市教育委員会関係の調査として第１～６次調査が実施され、古墳時代中期～後期の竪穴住居・方墳・溝・土坑や平安時代の遺物を多く出土する地点が確認されている。今回、遺跡推定範囲の北部において個人住宅が建築されることとなったため、深く掘削される浄化槽部分について確認調査を実施した。

調査内容

調査地点は敷地の西端の道路に面した位置で、東西0.8m、南北2.2mの調査区により確認調査を実施した。調査区の南側の大部分が近代の撹乱土坑により破壊されていたため、本来の堆積状況が判明したのは調査区北側部分であった。現地表面から約50cm、道路面から約35cm下層に厚さ10～20cmの旧耕作土（３層）がみられ、さらに下層は厚さ５cm程度の旧床土（４層）、褐灰色系やや粘質土（５層）、灰茶褐色や灰茶色のやや粘質土（６ａ・６ｂ層）、黄色粘土がブロック状に混じる褐黄色砂質土（７層）、灰褐色シルト（８層）、淡灰茶色砂質土（９層）等の堆積がみられた。これら



調査位置図



土層図

のうち、６ａ・６ｂ層は、７層上面から北側に向かって傾斜しており、また西壁までは展開しないことにより土坑内の堆積と判断される。

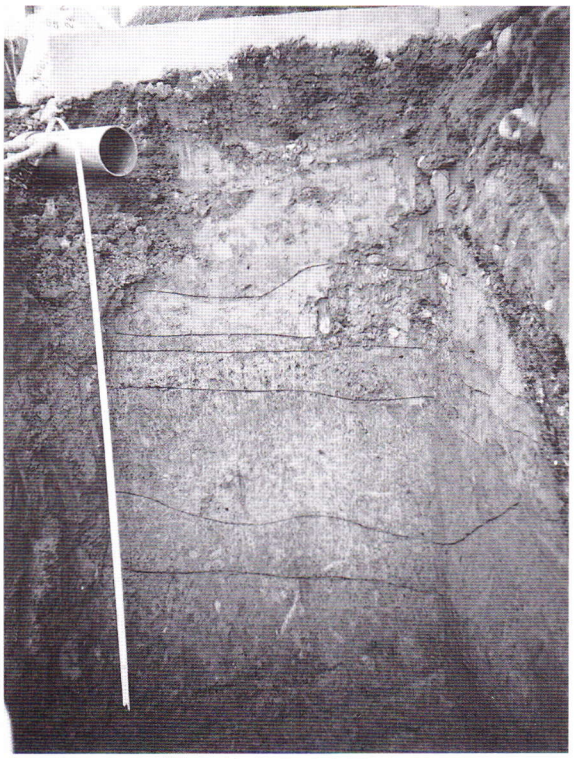
遺物としては、５層より瓦器・土師器、６ａ・６ｂ層より須恵器（６世紀代と推定される）・土師器、８層より土師質土器の小破片が出土した。９層は無遺物層である可能性が高い。

まとめ

調査により、中世期の包含層と古墳時代の土坑が確認された。土坑については、埋没時期が古墳時代後期と推定される。調査地点の絶対高は求めていないが、西側の道路面が周辺地形図より５m前後と推定されることより、主たる遺構面は標高4.3m付近に形成されている可能性がある。

調査地点の南西約100mには古墳～奈良時代の土器を出土した第５次調査地点、また南東約70mには古墳時代の竪穴住居群・掘立柱建物・方墳を検出した第６次調査地点が位置しており、これらの調査地点を囲む地域が鳴神Ⅳ遺跡の古墳時代の中心地の一つと推定される。（前田敬彦）

調査区東壁土層



調査区北壁土層

14. 鳴神（なるかみ）Ⅳ遺跡 第８次調査

調 査 地　和歌山市鳴神939-2番地

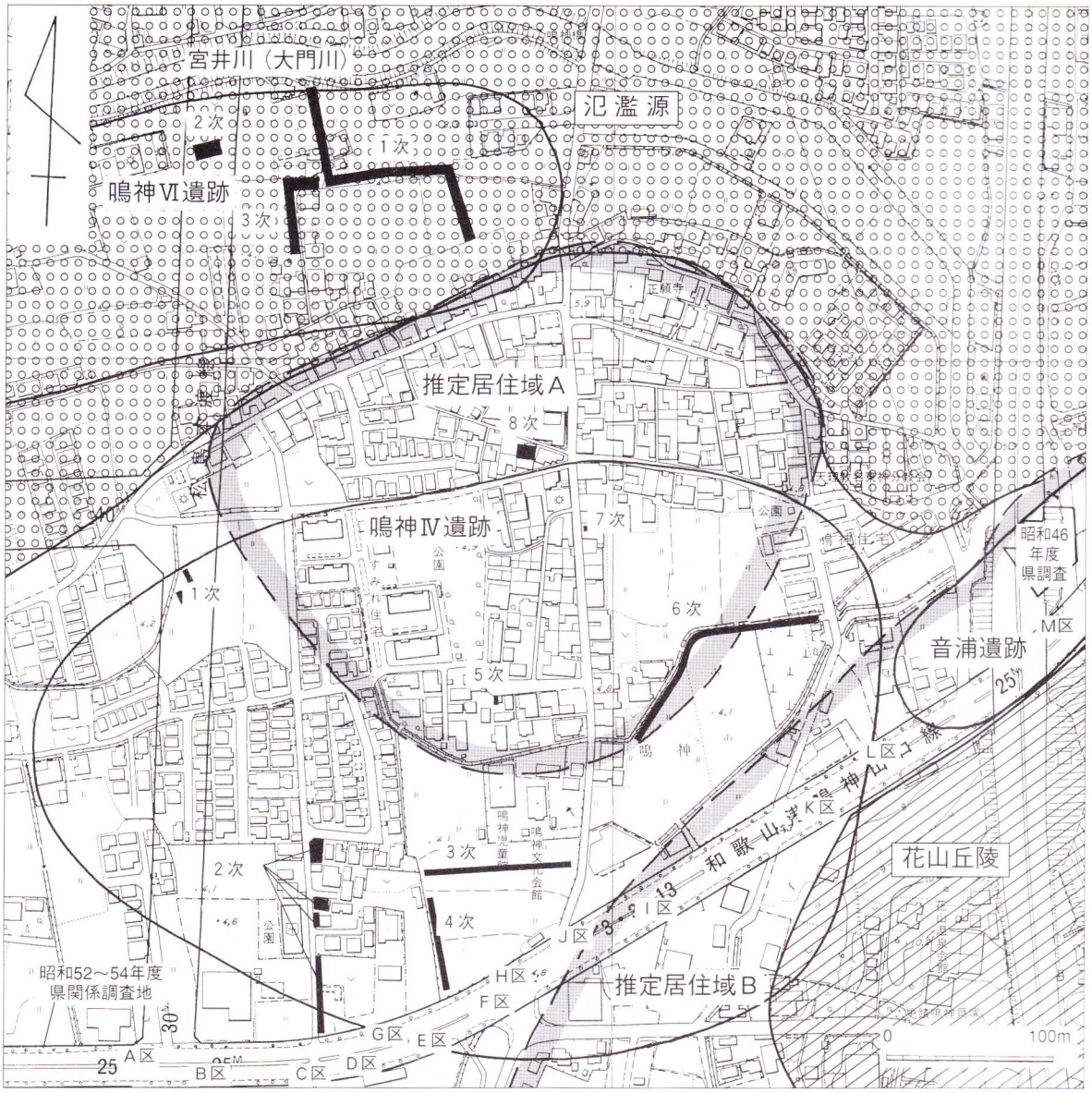
調査面積　10m²

位置と環境

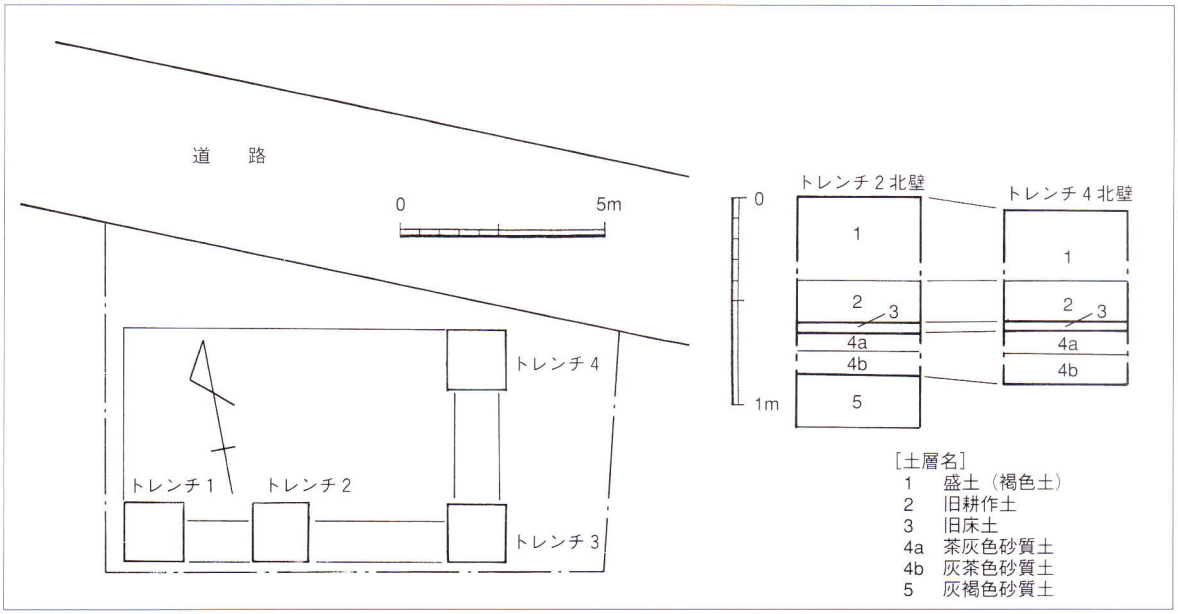
鳴神Ⅳ遺跡は、岩橋千塚古墳群のうちの花山支群の西約１kmに位置する平地の遺跡である。周辺には、鳴神Ⅴ遺跡、鳴神Ⅵ遺跡、音浦遺跡と古墳時代を中心とする遺跡が隣接して位置している。各遺跡では、和歌山県及び和歌山市関係の発掘調査が２～７次にわたり実施され、徐々に遺跡としての実態が解明されつつある。今回は、鳴神Ⅳ遺跡の推定範囲の北端部分で、個人住宅建築が計画されたため、確認調査を実施した。

調査内容

建築予定建物の柱位置を坪掘りし、遺構・遺物の確認に努めた。調査の結果、既存建物の基礎工



第８次調査の位置と周辺図（１次～８次は各遺跡内の市関係の調査地。その他は県関係の調査地。）



トレンチ配置と土層柱状図

事により撹乱されている部分が多くみられたが、基本的には調査対象地のほぼ全域にわたり、遺物包含層が確認された。

基本土層として、5層の堆積土に分層された。1層は30～40cmの盛土、2層は厚さ20cmの旧耕作土、3層は厚さ5cmの旧床土、4層が厚さ20～25cmの主たる遺物包含層（古墳～奈良時代と推定される）、5層は豆粒ほどの遺物を稀薄に包含する堆積土である。4層はさらに分層されるが、出土遺物や堆積土に極端な差異は認められない。

まとめ

今回の調査により、本遺跡の範囲が確実に北方へ拡大することが判明した。遺跡の範囲を明確にするため、周辺地の既往の調査歴と地理的環境を検討した結果、古墳時代（主に中期・後期）の遺跡構造に若干の見通しをもつことができたので左ページに図示することとする。

古墳時代の居住域については、竪穴住居・掘立柱建物あるいは遺物量の多い土坑・包含層が検出された鳴神Ⅳ遺跡第5～8次調査地を含む宮井川（大門川）南岸の微高地上の東西約350m、南北約320mの範囲（居住域A）と県関係により調査された花山丘陵の山裾部に沿う帯状の地域（居住域B）に2分される。この2つの居住域の間には多数の流路・水路が検出される地域（鳴神Ⅳ遺跡3・4・6次調査地）が存在するようである。ただし現状では、居住域Aの西限、居住域Bの南限については不明確である。鳴神Ⅵ遺跡については、いずれの調査地においても縄文～江戸時代の遺物を包含する砂層や砂礫層が確認されており、遺跡範囲全体が氾濫源に位置し、河川によりやや上流より運ばれた遺物が堆積したものと判断される。

以上は、全体からみればごく一部の調査資料と周辺の地理的環境から推定したものであり、今後発掘調査の進展とともに再検討する必要がある。また、当該時期前後の時期における状況も同様に検討しなければならない。（前田敬彦）

15. 岩橋（いわせ）Ⅲ遺跡 発掘調査

調 査 地　和歌山市岩橋1783番地 他

調査面積　50m²

位置と環境

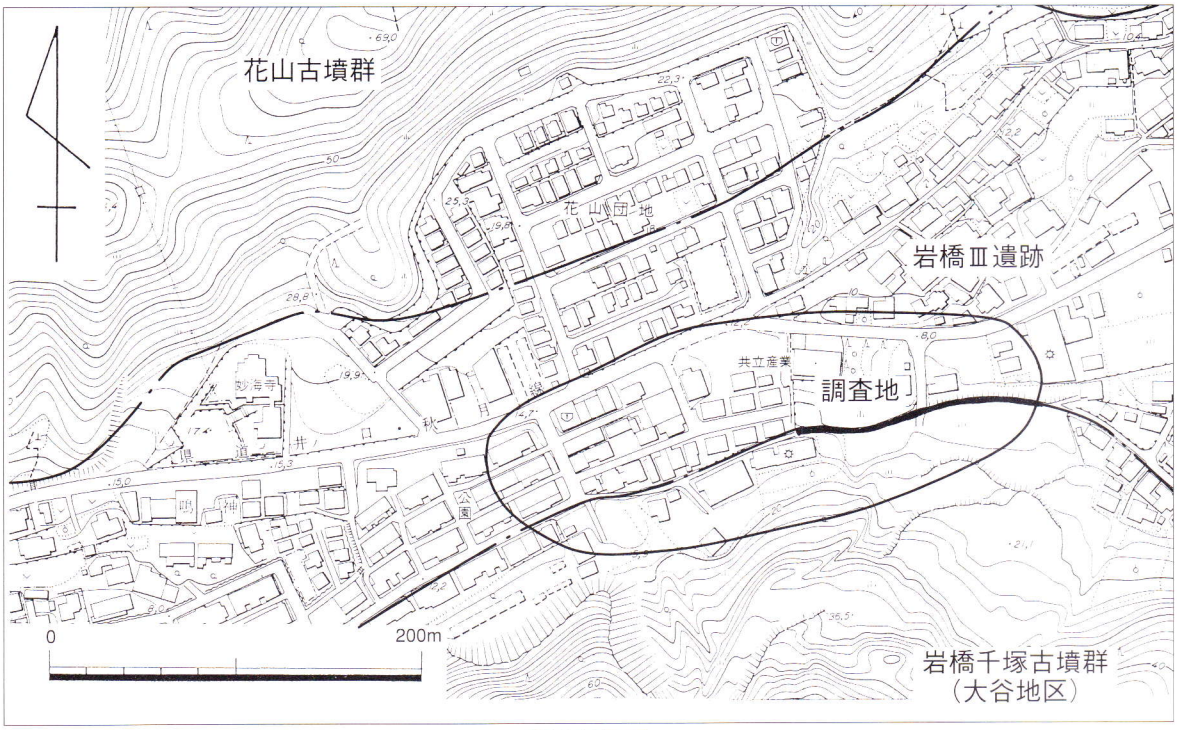
和歌山市岩橋に所在する岩橋千塚古墳群は、岩橋丘陵に築造された、総数約700基を数える県下最大の古墳群として周知されている。この丘陵は和歌山市の東部、紀ノ川南岸の龍門山脈西麓の独立丘陵である。岩橋千塚古墳群は、地理的状況や分布状況によって、花山・大谷山・岩橋前山・井辺・井辺前山・寺内の地区に分けることができる。調査地は、これらのうちの大谷山地区の北側裾部に相当する。

今回、古墳群の範囲内及び周辺地において道路建設工事が実施されるため、遺跡の実態の解明を目的とし確認調査を実施した。

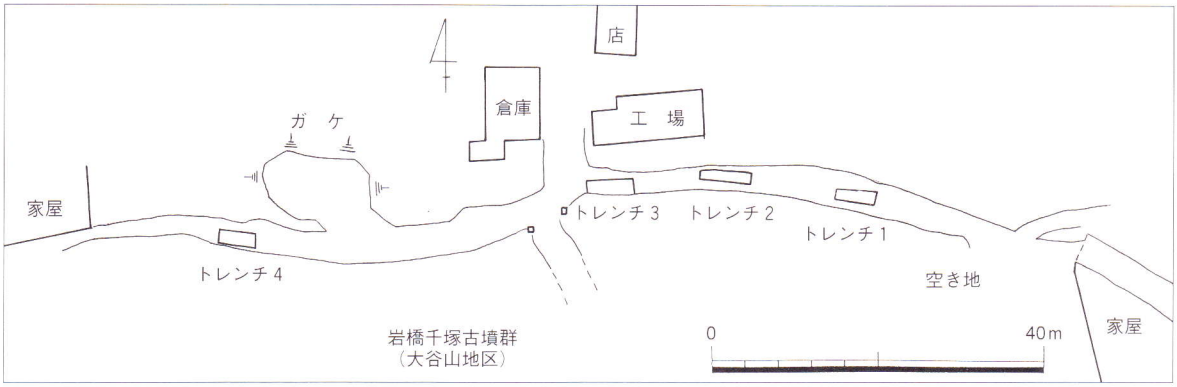
調査の内容

調査は、道路建設予定地内に旧地形を復原し、遺構が推定される箇所に幅２mの調査区（トレンチ）を４ヵ所設け実施した。

トレンチ１は、現在の地表面から約30cmの深さで岩盤面を確認した。この岩盤面は、調査区の全域にわたってほぼ水平である。トレンチ２は、自然堆積層上面において北側の壁面に沿って東西に延びる幅20～30cmの溝状遺構、中央部において東西の幅2.4m、遺構検出面からの深さ約45cmの南北に広がる土坑を検出した。しかし、調査範囲が限られているため各遺構の全体規模は不明である。トレンチ３においては、遺構を３面確認した。この調査区の遺構は柱穴のみである。また遺構の最終面であると考えられる堆積層は、西側に落ち込むものと考えらる。トレンチ４においても柱穴群を検出した。遺構面は３面確認することができた。土層の堆積状況は、トレンチ１からトレンチ４



調査位置図



調査区配置図

の東西壁面を観察すると北側へ傾斜していた。さらにトレンチ3は東側から西側方向、トレンチ4は西側から東側方向に緩やかな傾斜を成していることが確認された。このことから、トレンチ3とトレンチ4の間は窪地状になっていたと推測される。

遺物の大半は遺物包含層からの出土であり、コンテナに約1箱出土した。トレンチ1は須恵器、トレンチ2は堺擂鉢、近世以降の瓦、トレンチ3は黒色土器、土師器が出土した。トレンチ4は、近世の陶磁器、黒色土器・土師器・奈良時代の須恵器などが出土している。

トレンチ3全景（東から）

トレンチ4全景（東から）

まとめ

今回調査した地点は、周知の遺跡である岩橋千塚古墳群大谷山地区の北側縁辺部であるため、古墳が分布する可能性が考えられた。しかし、検出した遺構は平安時代の柱穴群などであった。これらの柱穴群は、調査範囲が限られているため建物の柱穴であるかはどうかは不確定である。しかし、各調査区の遺物や土層堆積状況の検討をした結果、トレンチ2からトレンチ4、トレンチ3・トレンチ4においての同時期の遺構面を2面確認した。今回及び第2次調査において平安時代の遺構を検出したことにより、本調査地は新たに岩橋Ⅲ遺跡と認識されるに至った。これまで岩橋山塊周辺に古墳時代の集落跡が確認されているが、山麓においては、平安時代の良好な遺構は確認されていなかった。しかし、この調査の結果から岩橋山麓北側において平安時代に集落が営まれていた可能性を推察でき、当地域における平安時代以降の文化を考える上において貴重な資料を得たといえる。

（奥村　薫）

16. 太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡 第32次調査

調 査 地　和歌山市太田531番地

調査面積　約10m²

位置と環境

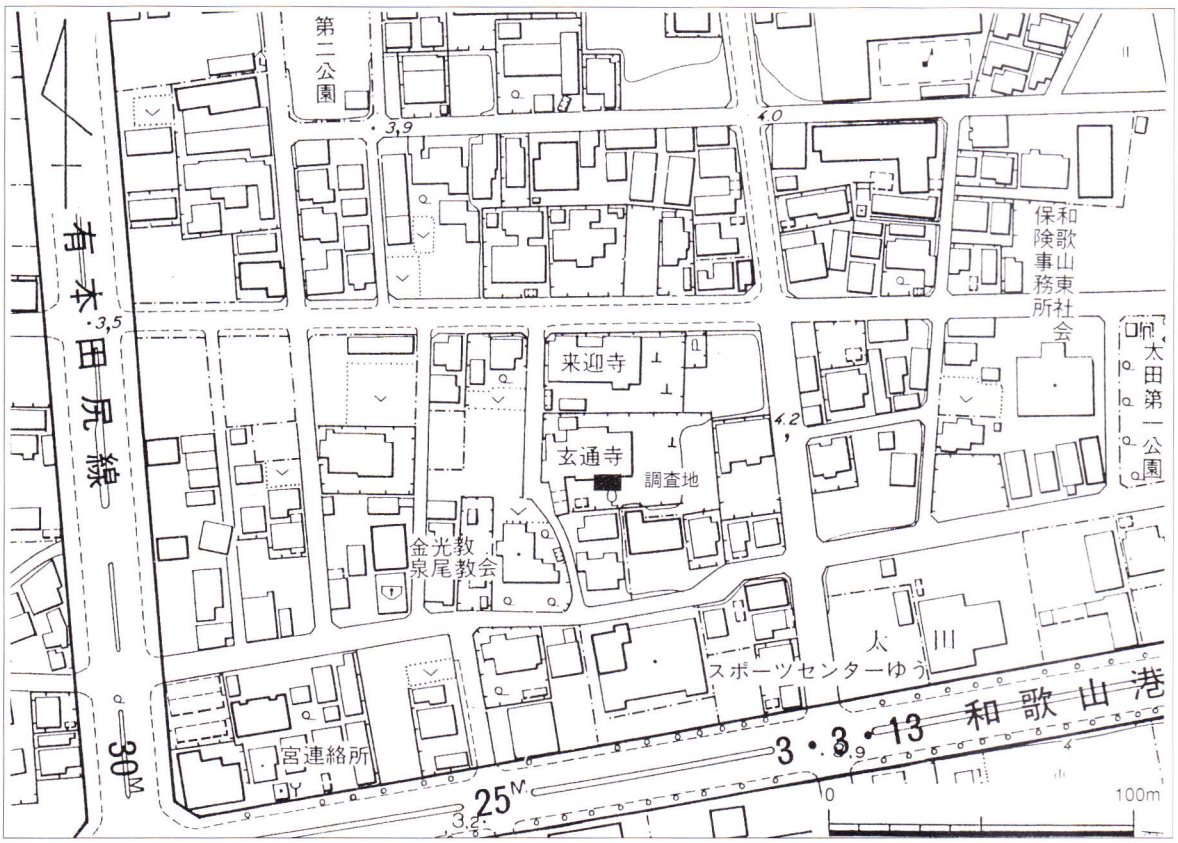
太田・黒田遺跡は紀ノ川下流域南岸の平野部のほぼ中央に立地する。遺跡は弥生時代前期から中期にかけての県下で最大規模の弥生時代集落として知られており、竪穴住居、井戸などの遺構や銅鐸、内行花文鏡、大量の弥生土器などの遺物が出土している。また、古墳時代についても土坑や溝などの遺構から土師器や須恵器などの土器類、有孔円板、碧玉製管玉などの遺物が検出されている。その他、和同開珎が出土した井戸など奈良時代の遺構、平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物もみられる。また太田・黒田遺跡は、室町時代の太田城跡の範囲にも重なり、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている。

調査地全景（東から）

調査内容

今回の調査は太田・黒田遺跡の範囲内にあたる太田531番地において玄通寺の本堂建替工事対象区域のうち特に掘削が深くなる部分約10m²において発掘調査を行ったものである。

当事業団の調査に先立ち調査地北側隣接地の本堂基礎部分で市教育委員会の立会調査が行われた

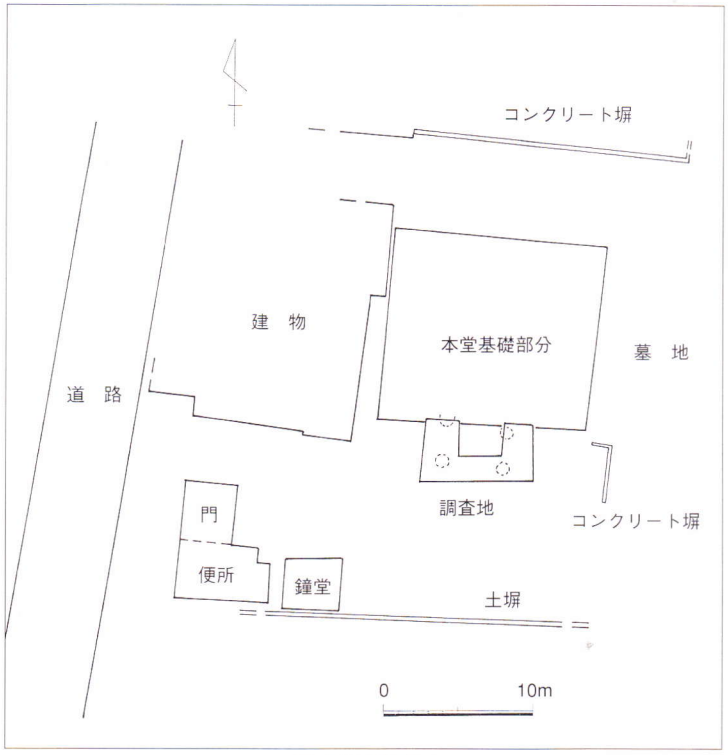


調査位置図

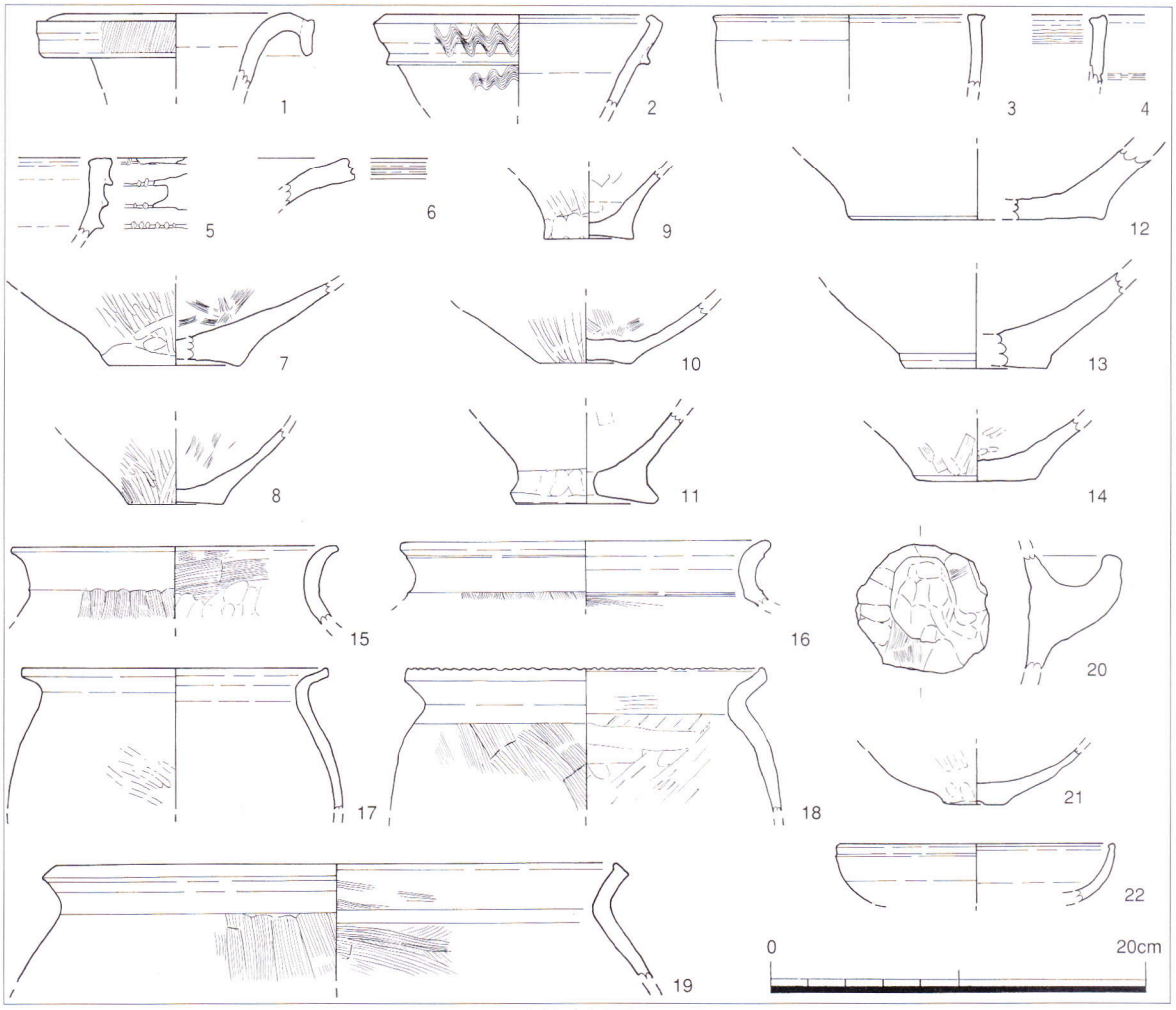
が、今回の調査区内において工事の掘削深30～40cmの深さでは遺構面に達しないことが予想され、今回の調査は包含層及び土層堆積状況の把握に重点を置いた。

調査の結果、調査区内において遺構面には達せず、堆積土層が北から南に下がって堆積していることを確認した。掘削した深さは標高約3.40mまでである。調査区北端部においては北側隣接地から続く水平堆積層を確認することができた。この水平堆積層は室町時代までの層であり、本堂建設時以前の室町時代頃に形成された土層であると考えられた。

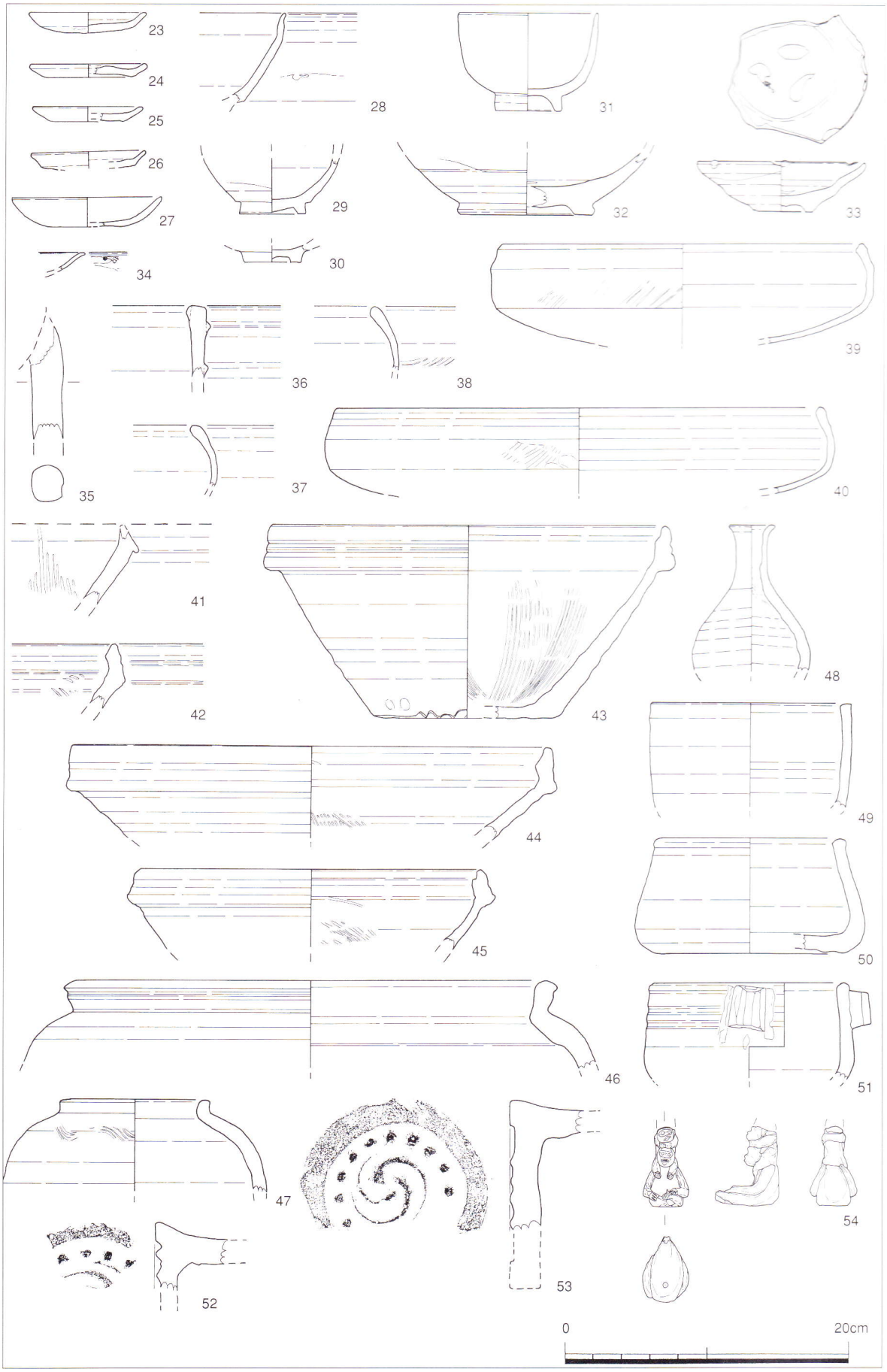
遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の



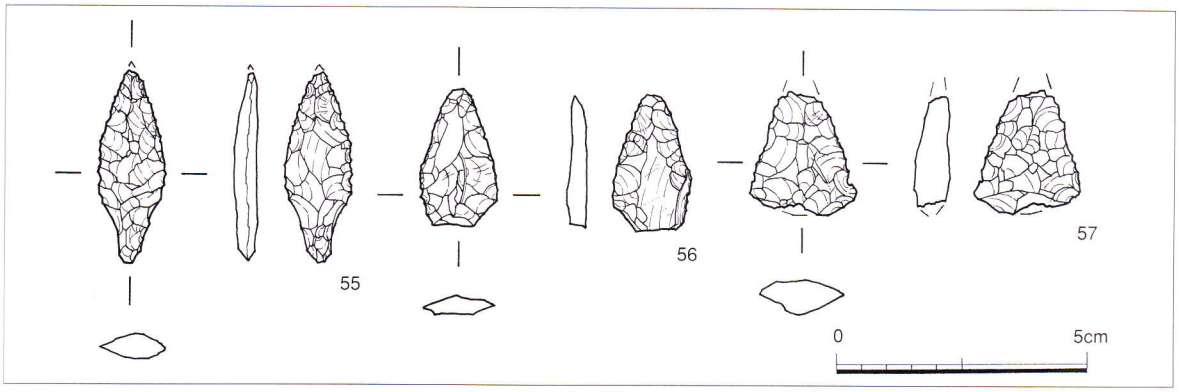
調査地周辺図



遺物実測図1


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
20cm

遺物実測図 2



遺物実測図３

黒色土器・緑釉陶器、鎌倉時代の瓦器・土師器、室町時代の輸入陶磁器・瀬戸美濃系陶器・備前焼・瓦、江戸時代の肥前陶磁・瀬戸美濃系陶器・堺焼・瓦・土人形などが出土した。弥生土器（１～14）は口縁端部が下に垂下する広口壺（１）、口縁部外面に突帯や沈線を施す直口壺（２～５）、口縁部が外反する広口壺（６）、壺底部（７～11）、甕底部（12～14）などがあり、弥生時代の石器はサヌカイト製石鏃（55～57）が３点出土した。55は有茎式石鏃である。古墳時代の土器（15～21）は土師器甕（15～19）、壺底部（21）、鍋把手部分（20）などがある。奈良時代の土器は土師器杯（22）などが出土した。室町時代から江戸時代にかけての遺物（23～54）は量的に最も多く、土師器小皿（23～27）、瀬戸・美濃系天目茶碗（28～30）・丸碗（31）、肥前系の唐津鉢（32）・皿（33）、中国製染付皿（34）、瓦質土器足釜の脚部（35）・外面に突帯を有する円筒形火鉢（36）、外面体部に平行タタキを施す土鍋（37～40）、備前焼すり鉢（41～45）・水屋甕（46）・壺（47）・徳利（48）・建水（49、50）・水差（51）などの土器・陶磁器の他、軒丸瓦（52、53）、土人形（54）などが出土した。

まとめ

発掘調査の結果、調査区内において堆積土層が北から南に下がって堆積していることを確認した。北側隣接地においては当調査区より約30cm地表面が高く、土層の堆積状況はほぼ水平堆積を示していることから、北側隣接地は玄通寺本堂の建設時に盛土されたものであると理解することができた。また、当調査区は玄通寺本堂の南面傾斜地にあたり、土層堆積状況は本堂建設時の整地状況などを示すものと考えられた。調査区北端部においては堆積最下層で北側隣接地から続く水平堆積層を確認することができた。この層は室町時代までの遺物を出土する層であり、市教育委員会の立会調査の成果とあわせて考えるならば、室町時代の整地層であるものと考えられる。市教育委員会の立会調査時にはこの層の上層に江戸時代までの遺物を含む整地層が約20cmの厚みで堆積することが確認されており、南側に緩く傾斜して堆積していた事実が指摘されている。

以上、遺物を包含する土層の堆積状況を説明したが、それらの各土層から弥生時代から近代に至るまでの遺物が多量に出土しており、面積的には小規模の調査であったが貴重な成果を得ることができた。

（北野隆亮）

【参考文献】

『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年

17. 岩橋（いわせ）Ⅲ遺跡 第２次調査

調 査 地　和歌山市岩橋1783番地 他

調査面積　50m²

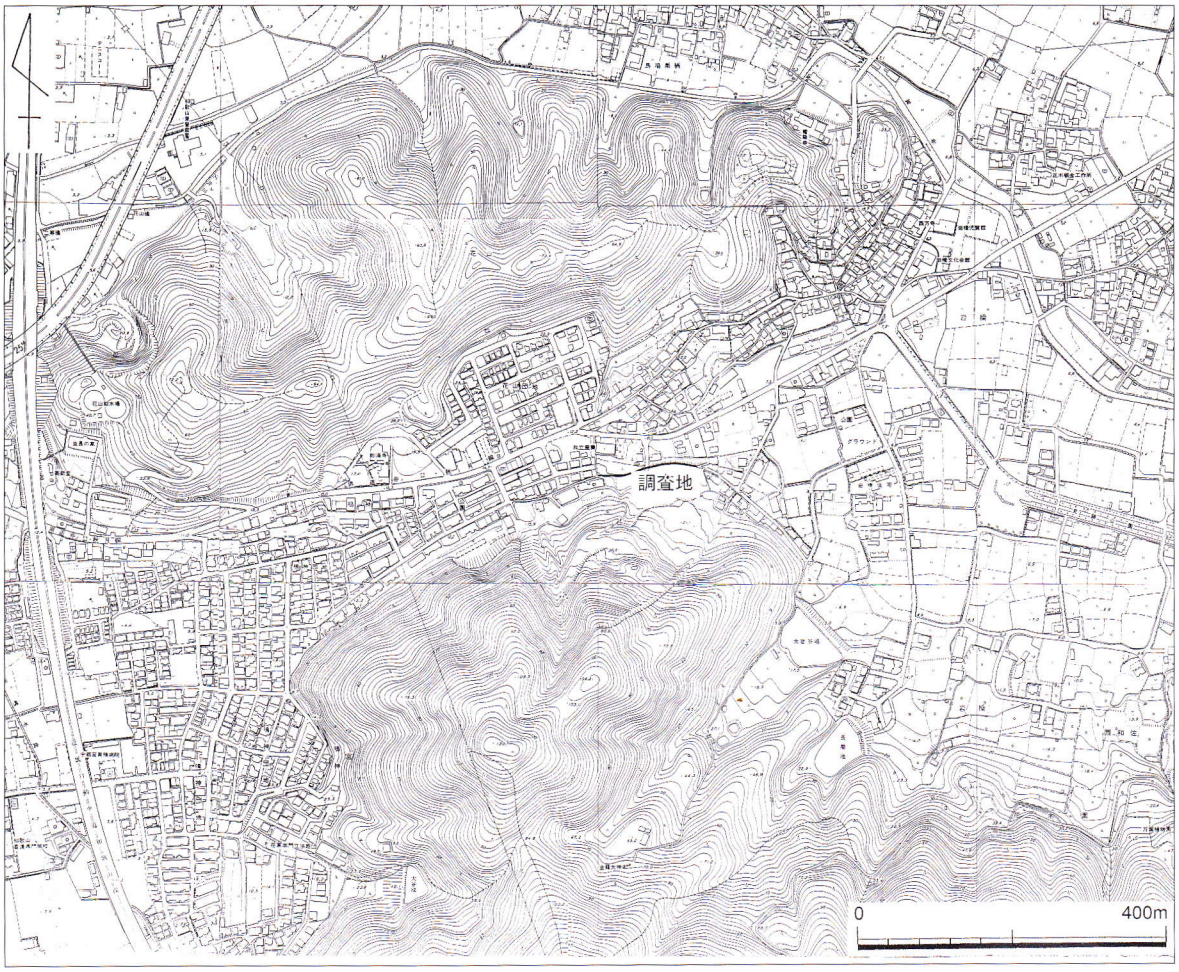
位置と環境

岩橋Ⅲ遺跡は、和歌山平野の東端、紀ノ川の南岸地域に分布する遺跡で、著名な岩橋千塚古墳群のうちの大谷山地区の北裾、花山丘陵との丘陵鞍部に展開する。

第１次調査および第２次調査は、当初岩橋千塚古墳群の確認調査として実施されたが、調査の結果、主として平安時代および江戸時代の遺構群が検出され、新たに岩橋Ⅲ遺跡として和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図（遺跡地図）に掲載され（遺跡番号409）、周知の遺跡として認識された[1]。

調査内容

第１次調査の成果をうけて実施した第２次調査では、トレンチ２において平安時代と考えられる遺構面を１面確認し、またトレンチ３においては３時期の遺構面を確認した。さらにトレンチ４においては江戸時代の遺構面を１面、平安時代の遺構面を２面確認することができた。トレンチ１では、第１次調査の段階で遺構・遺物が確認されなかったため、今回の第２次調査では、調査の対象としなかった。なおトレンチ３で確認できた３時期の遺構面は、トレンチ内における堆積層の状況や遺構群がベースとしている堆積層の関係から、トレンチ４の遺構面の時期にそれぞれ対応するも



調査位置図

のと考えられる。以下、各トレンチ別に記述する。

（1）トレンチ2

この遺構面では、土坑1基と溝1条を確認した。これら遺構は、第1次調査時に南半部分が検出されている。

土坑1は、東西2.4m、南北1.9m、深さ70cmのやや東西に長い不定形の土坑である。この土坑からは、瓦器椀の小片が1点出土した。

溝1は東西6.7m以上、最大幅51cm、深さ13cmを測る。土坑1とは重複関係にあり、この溝の方が新しい。出土遺物には土師器の小片があるが、磨滅が著しく時期を特定することはできない。しかしながら土坑1との重複関係および溝1がベースとしている堆積層は土坑1と同じであることから、土坑1と大きな時期差はないと考えられる。

この2つの遺構の具体的な時期は、土坑1から瓦器椀が出土していることから、鎌倉時代と推定できる。

（2）トレンチ3

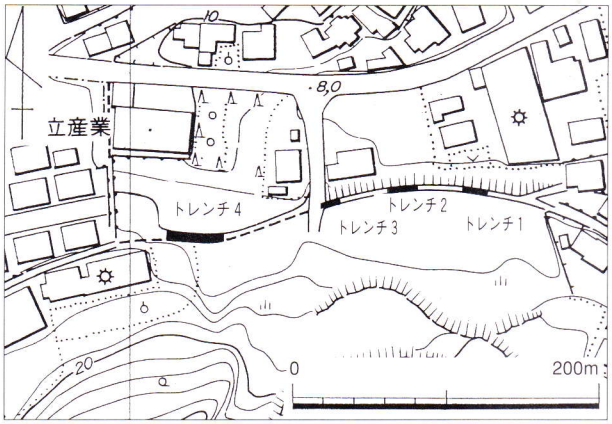
第1遺構面

この遺構面では、ピット15基（ピット1～15）を確認した。これらピット群は、直径20cm前後で深さは5～10cmを測る。遺構覆土はほぼ共通し、黄褐色のやや粘土が混じるシルトで、水分を多く含んでいる。このピット群の時期は、出土遺物がないために明確にはできないが、第1遺構面を形成しているベース層から肥前系の染付小片などが出土している事から、江戸時代以降に形成されたと考えられる。

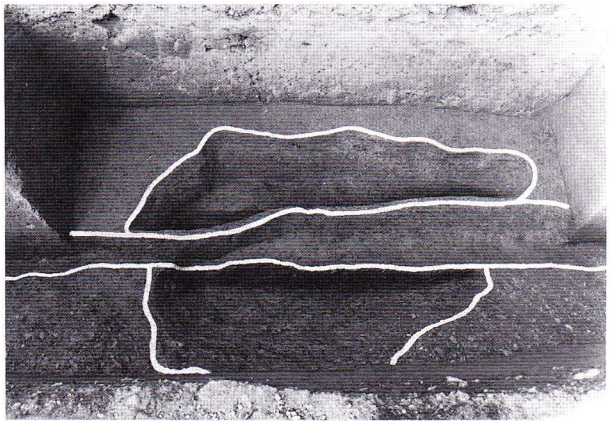
第2遺構面

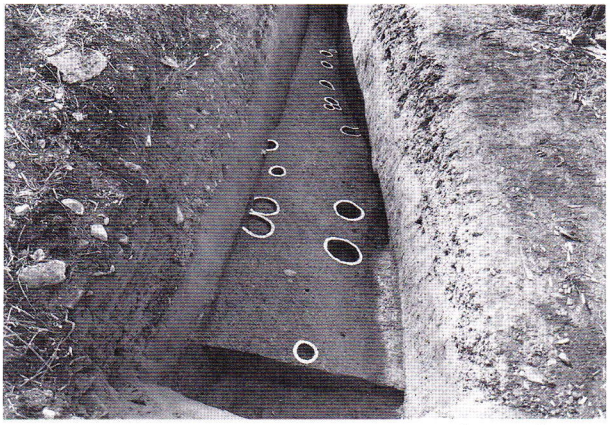
この遺構面では土坑1基（土坑1）を確認した。

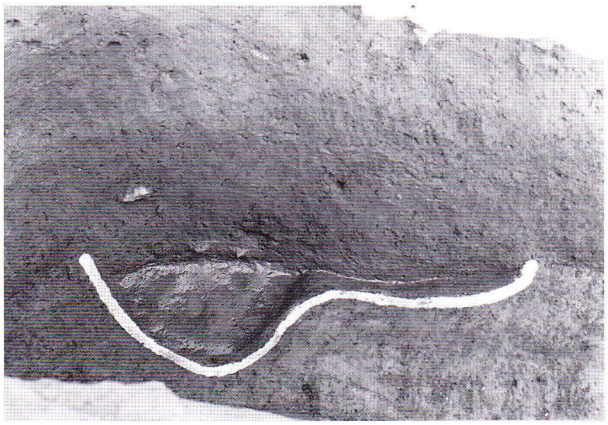
[土坑1]　この土坑は主軸長1.4m以上で、深さは30cmを測る、不定形の土坑である。北半部は調査区外に存在しているため不明である。遺構覆土は、暗いオリーブ褐色のシルトが混じる



トレンチ設定図


トレンチ2完掘状況（南から）


トレンチ3第1遺構面遺構完掘状況（西から）


トレンチ3第2遺構面土坑1完掘状況（南から）

細砂で、水分を非常に多く含んでいる。この遺構の時期は、出土遺物がないため明確にはできないが、第２遺構面を形成しているベース層が、後述するトレンチ４の第２遺構面を形成しているベース層に対応するものと考えられることから、平安時代以降で江戸時代以前の遺構と考えられる。

第３遺構面

この遺構面には、ピット３基（ピット５～７）と土坑１基（土坑３）がある。

３基のピットは、直径10～20cmで深さは平均11.5cmを測る。土坑は主軸長1.2m以上で、深さは20cmを測る。また土坑３は不定形の土坑である。遺構覆土は全て同じで、暗灰黄色のシルトである。この遺構面における遺構群の時期は、出土遺物がないために明確にできないが、第３遺構面を形成しているベース層が後述するトレンチ４の第３遺構面を形成しているベース層に対応するものと考えられることから、平安時代の遺構群と考えられる。

（３）トレンチ４

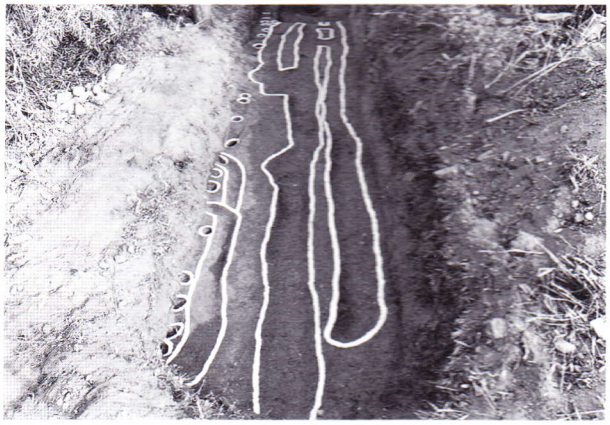
第１遺構面

この遺構面では、ピット群（ピット１～24）と小溝群を確認した。

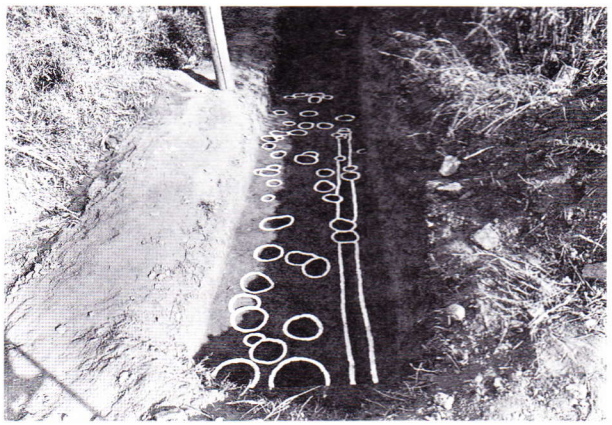
[ピット群]　直径10～20cmで深さは平均11.5cmを測る。遺構覆土は全て同じで、黄灰色の粗砂が混じる細砂である。このピット群は、トレンチ北端部に東西方向に一列に並んでおり、その北側は谷地形になることから、柵列の痕跡と考えられる。

[小溝群]　上記ピット群の南側に、主として東西方向に展開する小溝群である。その西端および東端は、トレンチ外に存在するものと考えられる。溝の幅は、40cmのものと20cmのものとがある。深さは平均11cmを測る。出土遺物には、肥前系の磁器小片等がある。遺構覆土は、黒褐色のシルト混じりの細砂で、小礫から細礫を多く含んでいる。この溝は、その規模や遺構覆土

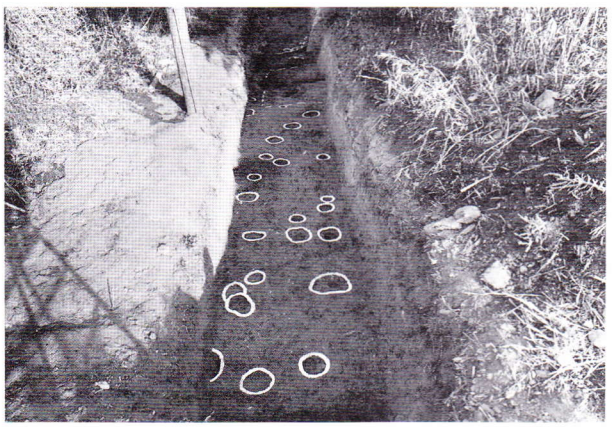
トレンチ３第３遺構面遺構完掘状況（西から）



トレンチ４第１遺構面遺構完掘状況（西から）



トレンチ４第２遺構面遺構完掘状況（西から）



トレンチ４第３遺構面遺構完掘状況（西から）

の特徴などから、耕作に伴って形成されたものと考えられる。

この遺構面の時期は、遺構内から肥前系の磁器小片等の出土があることや、上記遺構群がベースとしている堆積層がトレンチ３の江戸時代に堆積した層と対応することなどから江戸時代に形成されたものと考えられる。

第２遺構面

この遺構面では、ピット群（ピット25～73）と溝１条（溝１）を確認した。

［ピット群］　この遺構面で検出した49基のピット群は、その規模からⅠ類・Ⅱ類およびⅢ類と３つにグループ分けすることができる。以下グループ別に記述する。

Ⅰ類　直径が30～40cmを測り、今回の調査では比較的大きなピットである。ピット25・26がこれにあたる。遺構覆土は、ピット25が灰色の細砂で、ピット26は、オリーブ味がかった灰色のシルトである。深さはピット25が13.8cmでピット26は12.9cmを測る。

Ⅱ類　直径が20cm前後を測るピット群である。遺構覆土は共通し、全体的に黒褐色の細砂である。深さは平均7.5cmを測る。遺構からの出土遺物には、磨滅が著しく時期不明の土師器小片が多数あるほか、ピット45からは黒色土器が出土している。

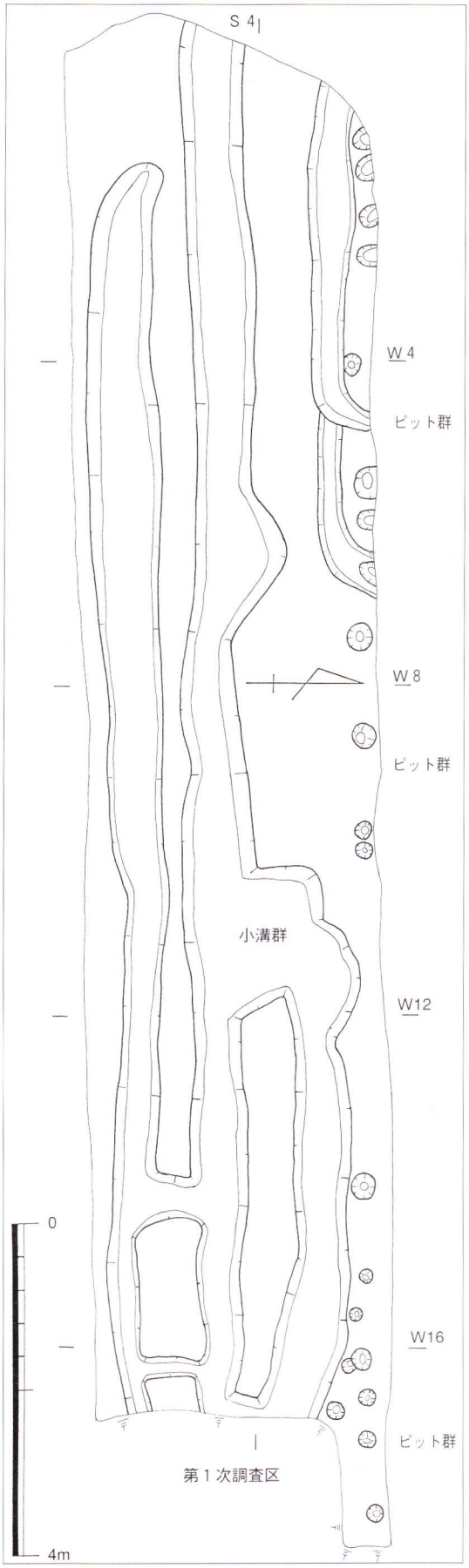
Ⅲ類　直径が10cm前後を測るピット群である。遺構覆土は共通し、Ⅱ類同様黒褐色の細砂である。深さは平均７cmを測る。遺構からの出土遺物には、磨滅が著しく時期不明の土師器小片が多くある。

［溝１］　東西方向の溝である。長さは６m以上で、幅は20cmを測る。深さはトレンチ西端で4.3cm、溝の東端では2.6cmを測る。出土遺物に黒色土器（内黒＝A類）小片がある。

これらの遺構の時期は、ピット45や溝１から黒色土器の出土があることなどから、平安時代に形成されたものと考えられる。

第３遺構面

この遺構面では、ピット群（ピット74～106）と溝（溝３）および土坑（土坑２）を確認した。



トレンチ４第１遺構面遺構全体平図

［ピット群］　直径10～30cmで深さは平均6.5cmを測る。遺構の覆土は、暗い灰味がかった黄色の粗砂が混じる細砂で、細礫を多く含んでいる。出土遺物は、ピット102から黒色土器（内黒＝A類）椀の小片がある。

［溝３］　長さ1.5m以上、幅60cm、深さは5.5cmを測る。南端は、トレンチ外に存在する。また北側は、江戸時代の削平によって破壊されている。

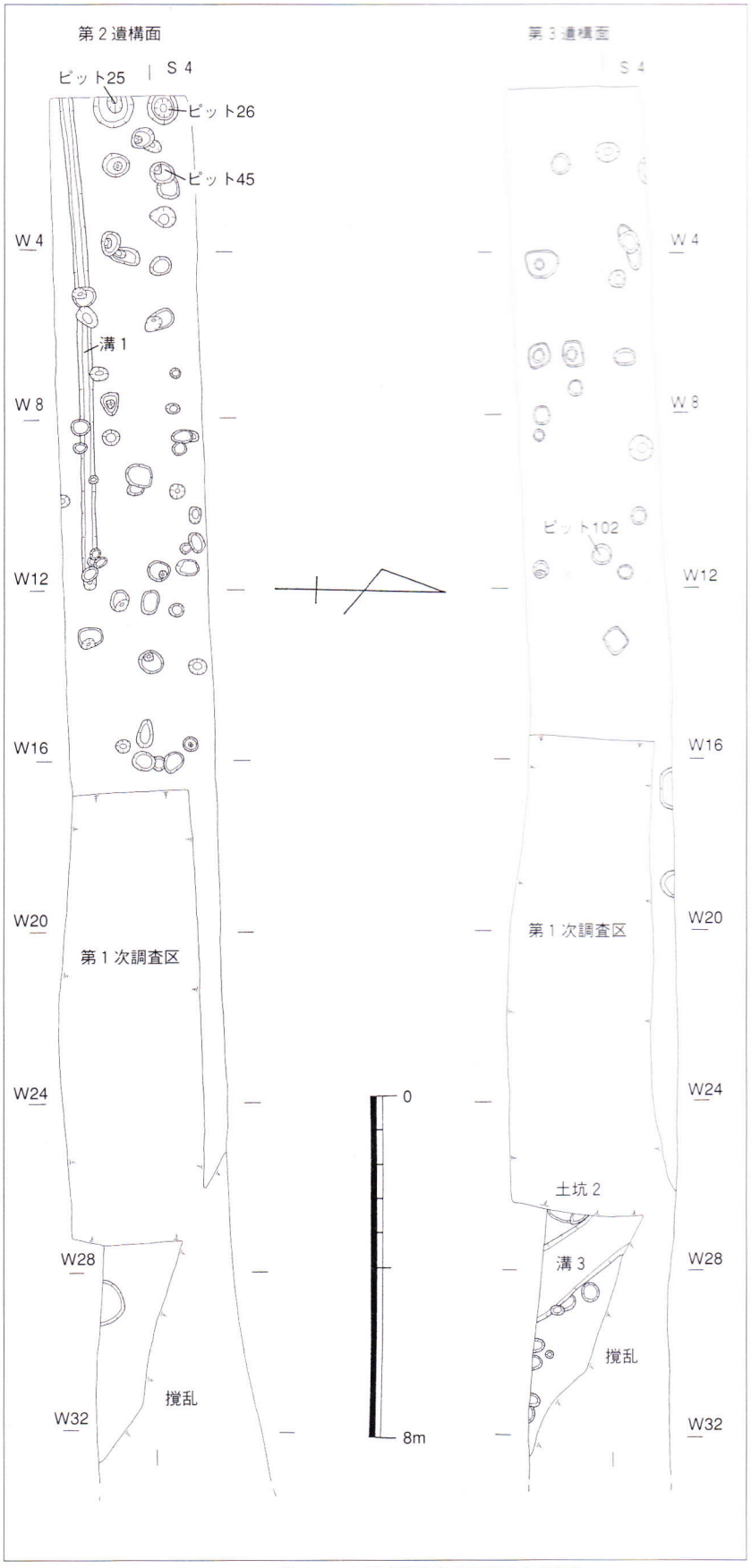
［土坑２］　残存長50cm、深さ1.5cmを測る。円形か楕円形を呈していたと思われるが、江戸時代の削平によって詳細は不明である。

これら遺構群の時期は、ピット102から黒色土器の出土があることから、平安時代に形成されたものと考えられる。なおこのベース層は、トレンチ３の第３遺構面と対応するものと考えられる。

遺物

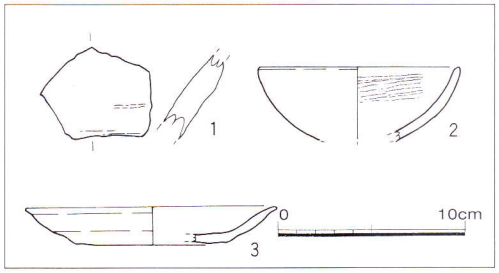
今回の調査で出土した遺物は、遺物収納箱（コンテナ）に１箱分ある。しかしそのほとんどは細片であり、図化できるものは以下の３点のみである。

１は、埴輪片で、トレンチ４から出土した。今回の調査で埴輪片の出土は、この１点のみである。小片であるため確定はできないが、朝顔形埴



トレンチ４第２・３遺構面遺構平面実測図

輪の口縁部付近の破片とみられる。表面のごく一部にわずかにハケメ調整痕が認められる。焼成は良好で、胎土は密である。胎土中には直径0.5～3mm大の白色砂粒を多く含む。色調は、内外面ともに明赤褐色である。器壁の厚さは1.2～1.4cmを測る。



遺物実測図

2は、土師器の杯で、口径10.4cm、残存高3.8cmを測る。外面にナデ調整を施していたものと思われるが、磨滅が著しく明瞭に観察できない。また、内面には、わずかにミガキ調整の痕跡が残存している。胎土は密で、直径0.5～2mm大の黒色粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が明赤褐色、内面は明黄褐色である。トレンチ3から出土した。

3は、土師器皿で、口径13.2cm、残存高2.0cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は、外面が明褐灰色で内面は明黄灰色である。トレンチ3から出土した。

まとめ

今回の調査成果のうち、遺構に関しては、トレンチ3とトレンチ4の各遺構面は対応するものである。その結果、江戸時代・平安時代（第2遺構面の時期）・平安時代（第3遺構面の時期）の遺構面を確認することができた。また、出土遺物に関しては、土師器の小片が多いが、その他に黒色土器などがある。

これらの状況から、遺跡の歴史的位置付けを考えるならば、古墳時代の遺構や遺物の出土をみず、主として平安時代と江戸時代の遺構・遺物を検出したことにより、従前周知の遺跡として「岩橋千塚古墳群」の範囲内で考えられていた今回の調査地は、新たな認識のもと、岩橋Ⅲ遺跡として和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図に記載されることとなった。

（木建正宏）

註

（1）和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』1996

18. 太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡 第31次調査

調 査 地　和歌山市太田地内

調査面積　35m²

位置と環境

太田・黒田遺跡は、紀ノ川南岸の平野でも微高地にあたる地点であり、数多くの遺跡が分布する地域に位置する。遺跡は、南北約750m、東西約400mの範囲をもち、現在のＪＲ和歌山駅の東側一帯に広がっている。特に、遺跡範囲の南側は石山本願寺門徒集団である雑賀衆の一派、太田党の居館といわれている太田城の範囲とも重複しており、中世の遺跡としても知られている。

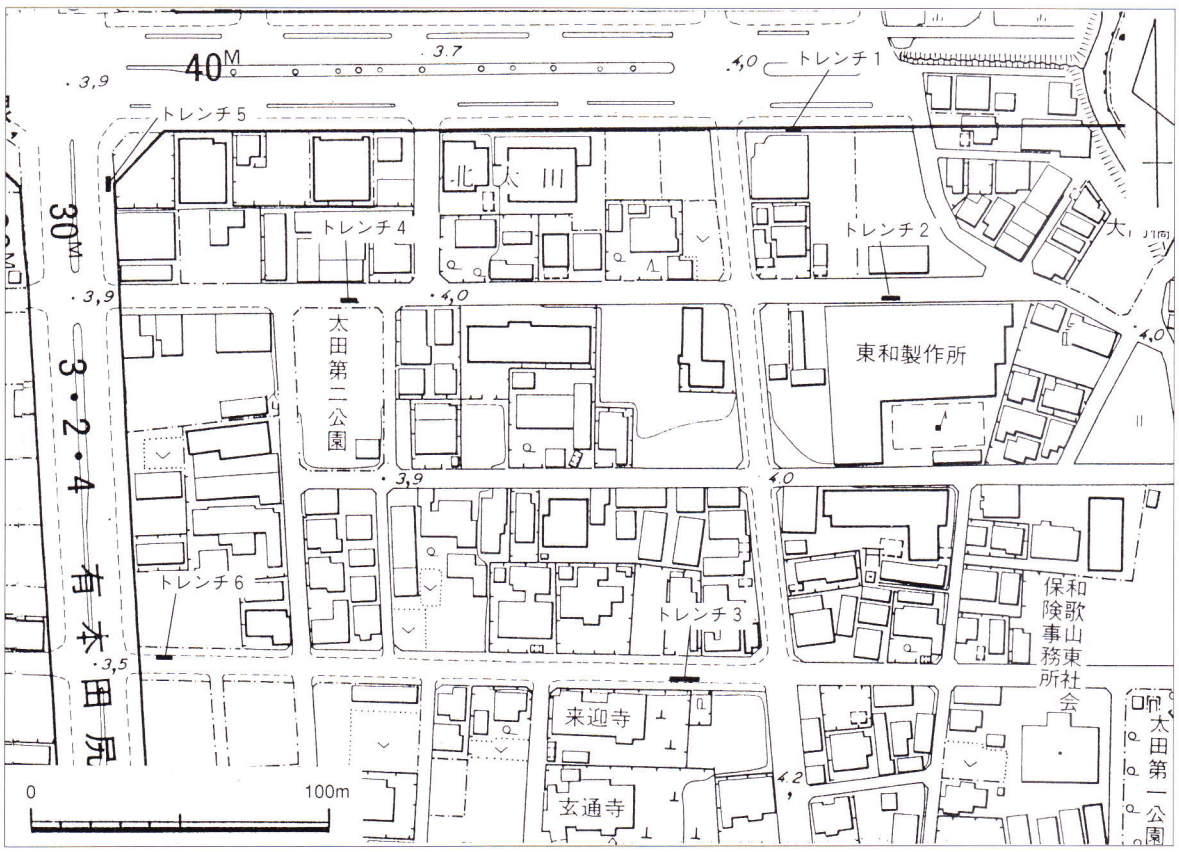
調査内容

この調査は、遺跡のほぼ中央部から南側を中心に下水道管埋設工事が行われることになり、その経路にそって６ヶ所のトレンチを設定し、各地区における堆積の状況と遺構等の検出を目的とした。また、調査の平面実測は基本的に国土座標軸を用いたが、都合上トレンチ６のみ調査区にそった方向に任意の基準ラインを設定し、磁北を示した。

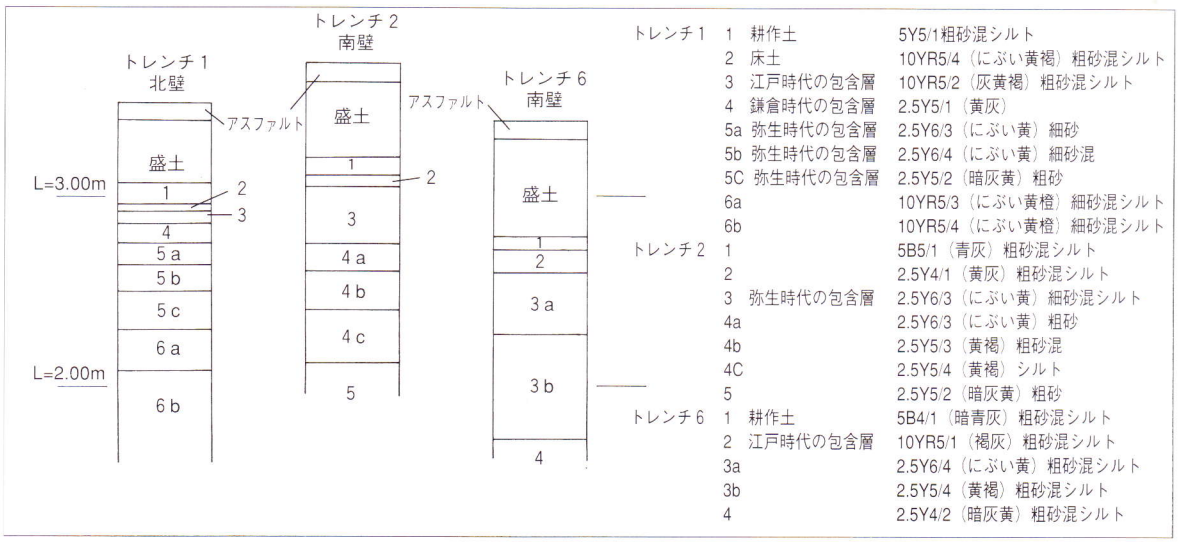
各トレンチの基本層序は、すでに撹乱等を受けている部分が多く、トレンチ１・２・６のみに良好な堆積を確認している。

以後、各トレンチ順に説明する。

トレンチ１　トレンチ１は遺跡の東端に位置する調査区である。この調査地はアスファルト舗の歩道であり、砕石及び整地土が旧耕作土上に堆積している状況である。旧耕作土下には床土（第２層）

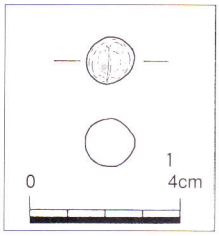


調査位置図



トレンチ1	1	耕作土	5Y5/1粗砂混シルト
	2	床土	10YR5/4（にぶい黄褐）粗砂混シルト
	3	江戸時代の包含層	10YR5/2（灰黄褐）粗砂混シルト
	4	鎌倉時代の包含層	2.5Y5/1（黄灰）
	5a	弥生時代の包含層	2.5Y6/3（にぶい黄）細砂
	5b	弥生時代の包含層	2.5Y6/4（にぶい黄）細砂混
	5C	弥生時代の包含層	2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂
	6a		10YR5/3（にぶい黄橙）細砂混シルト
	6b		10YR5/4（にぶい黄橙）細砂混シルト
トレンチ2	1		5B5/1（青灰）粗砂混シルト
	2		2.5Y4/1（黄灰）粗砂混シルト
	3	弥生時代の包含層	2.5Y6/3（にぶい黄）細砂混シルト
	4a		2.5Y6/3（にぶい黄）粗砂
	4b		2.5Y5/3（黄褐）粗砂混
	4C		2.5Y5/4（黄褐）シルト
	5		2.5Y5/2（暗灰黄）粗砂
トレンチ6	1	耕作土	5B4/1（暗青灰）粗砂混シルト
	2	江戸時代の包含層	10YR5/1（褐灰）粗砂混シルト
	3a		2.5Y6/4（にぶい黄）粗砂混シルト
	3b		2.5Y5/4（黄褐）粗砂混シルト
	4		2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂混シルト

基本土層柱状模式図



遺物実測図1

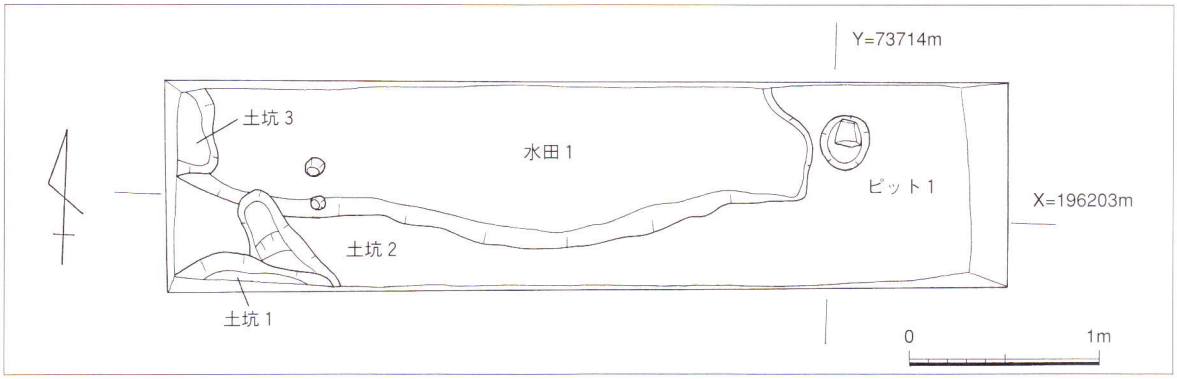
が堆積し、その下層に江戸時代の包含層である第3層が堆積する。また、第4層は瓦器が出土していることから鎌倉時代以降の遺物包含層とみられる。第5層は土器の細片が微量出土しており、遺物包含層とみられるが正確な時期等は不明である。第6層は、遺物の出土がみられず自然堆積層と考えられる。

遺構は、第5層上面において調査区を南北に横切る幅80m、深さ10cmの溝状遺構を1条検出している。この遺構には遺物が含まれておらず、正確な時期は不明である。

出土遺物には、弥生時代中期の土器、土師器、近世瓦のほか、灰釉陶器や土製の玉（1）などがある。この土製の玉は、径1.3cm、重さ2.08gを量るもので土師質に焼成されている。この遺跡では過去の調査において同規模の鉛玉（鉄砲玉）は数点出土しているが、土製の玉は初例である。

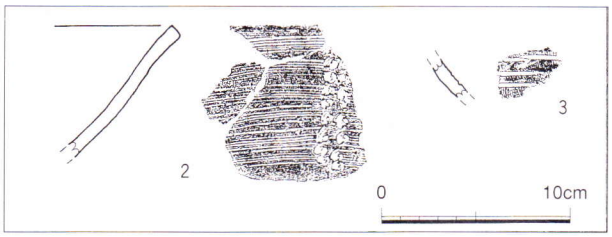
トレンチ2　トレンチ2はトレンチ1同様、遺跡の東端に位置する。このトレンチにおいても上部はアスファルト舗である。上層の第1・2層は、遺物から近世以降の堆積層であり、この層の下面（第1遺構面）において弥生時代中期から江戸時代にかけての遺構を検出している。第1遺構面をベースとする第3層は、希薄であるが弥生時代の遺物包含層とみられ、この層の下面（第2遺構面）においても溝状遺構1条を検出している。また、第4層以下では全く遺物がみられず、第5層は砂層となる。

上述のとおりこの調査区では遺構面を2面検出している。まず第1遺構面で検出した遺構は、弥生時代中期の土坑2基（土坑1・2）、ピット1個、鎌倉時代の土坑1基（土坑3）などがある。



トレンチ2遺構平面図（第1遺構面）

また水田１は、覆土が水田耕作に伴うと考えられる灰色化現象が強くみられる遺構であり、瓦器片が１点出土していることから鎌倉時代以降のものである。



遺物実測図２

次に、第２遺構面では、炭を多く含む溝状遺構１条を検出している。出土遺物は微量のため正確な時期は不明であるが、上部包含層等の関係から弥生時代でも比較的古い時期の遺構であると考えられる。

遺物は、弥生時代から江戸時代にかけてのものが若干量出土している。特に、第２層から出土したものに篦描直線文を施した弥生時代前期の土器片（３）や擬似流水文を施した弥生時代中期の土器片（２）がある。３は、壺の肩部、２は大型の鉢とみられる。

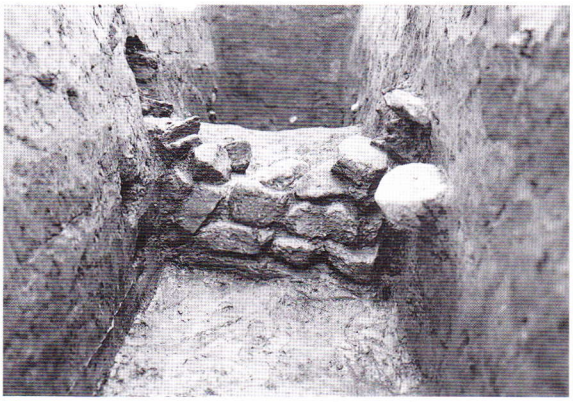
トレンチ３　トレンチ３は、遺跡範囲のやや南側に位置する。同地点は、1980年から翌年にかけて和歌山市の教育委員会による発掘調査（第15・16次調査）が行われている。この調査では、弥生時代前期の竪穴住居などが検出され、貴重な資料が得られている。

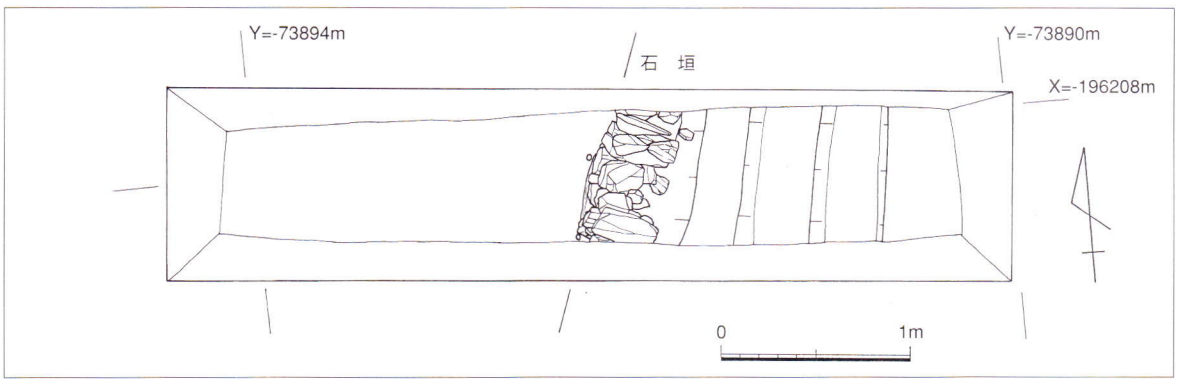
今回のトレンチ３は、以前の第16次調査の範囲と重複することが明らかとなり、前回調査済みの竪穴住居等の位置を、国土座標軸によって記録するに留めた。

トレンチ４　トレンチ４は、これまでの調査例から遺跡の中心地域の一部と考えられる地点である。この調査区は、ほぼ全面が遺構であるため基本的な層序をとらえることができなかった。

まず上層の遺構は、旧耕作土下に検出したもので、溝状遺構１条とピット数個である。これらは、遺物から江戸時代以降のものである。

次に、下層の遺構は南北方向にのびる石垣が調査区のほぼ中央部で検出できた。この石垣は、西側に面をもち、高さ約60cmを測る。基底部には枕木を置き、20～30cmの砂岩と緑色片岩を併用して積み上げている。しかし、基底部周辺は緑色片岩を使用している。この石垣ウラゴメからは、16世紀末～17世紀初頭の備前焼すり鉢などが出土している。このことから、石垣は江戸時代初頭以降に造られたものと考えられる。また、この検出状況から、石垣は溝の肩部に構築された石垣とみられ、


トレンチ４石垣（西から）



トレンチ４遺構平面図

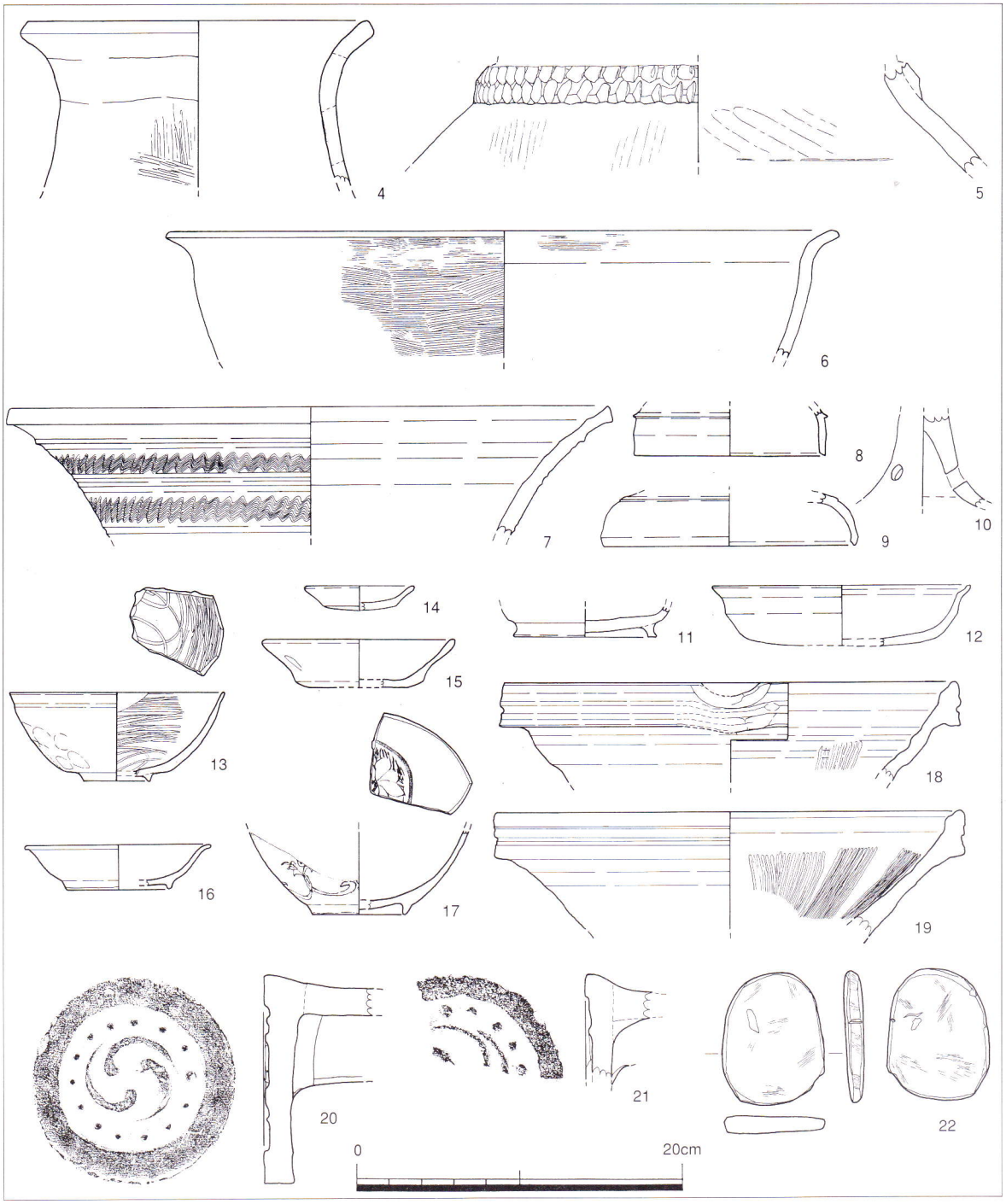
下面のベース層が水の影響による灰色化状況を観察した。

石垣の東側において、石垣ウラゴメを除去した後溝状遺構１条（溝状遺構２）、土坑２基を検出した。溝状遺構２は、覆土中から15世紀後半～16世紀代の輸入陶磁器である中国製の白磁皿が出土している。このことから、この遺構は少なくとも室町時代には埋没したものといえる。

なお、以上の遺構のベース層は、前述のように石垣以西では変色しているが、厚さ60cm以上を測る堆積であり、覆土中から中世の土師器皿が出土している。今回の調査では標高1.6mまで掘り下げたがこの堆積層の下面は確認できなかった。

このトレンチの遺物は、弥生時代から江戸時代にかけてのものが多量に出土している。

４・５は、弥生時代中期の土器である。４は頸部から緩やかに外反する広口壺の口縁部であり、



遺物実測図３

体部外面にヘラミガキ調整を施している。胎土内には多量の角閃石を含むことから、生駒西麓製の土器とみられ、搬入品と考えられる。5は大型壺の頸部である。括れ部外面に帯状の粘土紐を折り曲げながら貼り付け、加飾している。6はいわゆる遠賀川系の大型鉢であり、外面と口縁部内側にヨコ方向のハケ調整を施したのち、口縁部周辺をヨコナデによって消している。

7～10は、古墳時代中期から後期の土器である。7は須恵器の大型甕の口縁部とみられる。残存部の外面は、凸帯により2区画に分けられ、各区にシャープな波状文を施している。この須恵器は比較的古い時期のもので、5世紀代におさまるものとみられる。8・9は須恵器の杯蓋である。8は天井部との境に明瞭な段があり、全体的にシャープな造りである。9は比較的丸みを帯びた器形であり、天井部のヘラケズリ調整を指ナデによって消している。また10、は土師器の高杯脚部である。この脚部には3ヶ所の円孔が施されている。

次に、11・12は奈良時代の土器である。11は須恵器の杯身である。底部には「ハ」の字状に開く高台が貼り付けられ、杯部はやや丸みをもつ。また12は土師器の杯である。口縁部を強いヨコナデによって屈曲させ、端部を内側に折り曲げて丸みをもたせている。

13～15は、鎌倉時代の土器である。13は復元径13.1cmの瓦器椀であり、内面には丁寧な暗文が施されている。また見込み部の暗文は螺旋状にめぐらされている。14・15は土師器皿である。これらは、ともに口縁部を強いヨコナデによって仕上げているものである。

16～21は室町時代の遺物である。16・17は、中国製の輸入陶磁器である。18・19はともに備前焼の擂鉢である。20・21は三巴文軒丸瓦であり、巴文の方向は右巴のもの（20）と左巴のもの（21）がある。20は瓦当面の径が12.8cmを測るもので、比較的小さな連珠文をめぐらす。21は比較的大きな連珠文をもつもので、瓦当面を復元すると径12.2cmとなる。

また22は、瓦を転用した砥石である。この砥石には全面に明瞭な使用痕が観察できる。

トレンチ5　トレンチ5は、遺跡の中心部からやや西にあたる地点である。しかし、地表面から約90cmの深さで推進工法によって埋設されたとみられる土管が調査区に沿った形で横断しており、遺構等の検出はできなかった。

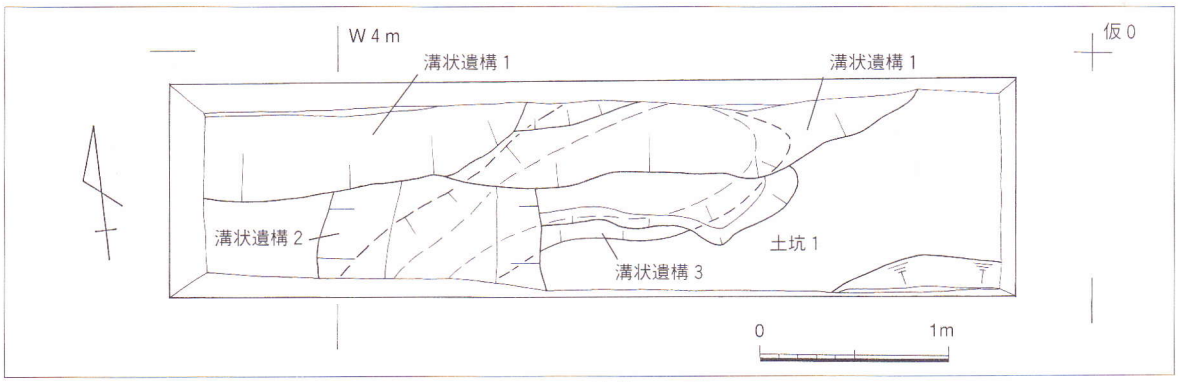
遺物は、主として弥生時代から古墳時代にかけてのものがわずかに出土している。

トレンチ6　トレンチ6は、遺跡の南西部に位置する。この調査区ではアスファルト及び砕石の直下に第1層（旧耕作土）及び第2層（江戸時代の堆積層）が堆積し、その下面が遺構検出面となる。検出した遺構は、溝状遺構3条、土坑1基である。溝状遺構1は、調査区を東西にはしる遺構で南肩のみを検出した。この遺構は、遺物から鎌倉時代のものとみられる。溝状遺構2は、南北方向のものであり、覆土に須恵器、土師器を多く含む古墳時代の遺構である。また、これらと重なりをもつ土坑1は、古墳時代前期のものとみられる。さらに、最も古い溝状遺構3は、遺物が1点のみであるが、弥生時代前期のものである。

このトレンチの出土遺物は、比較的希薄であるが、第1層から輸入陶磁器である青磁の鎬蓮弁文碗や、口禿げの白磁皿がある。

まとめ

太田・黒田遺跡はこれまで30次にわたる発掘調査が行われ、少しずつ各地点の状況が明らかとなってきた。今回の調査では調査例の少ない遺跡東端のトレンチ2や西端のトレンチ6の良好な基本



トレンチ６遺構平面図

層序を得ることができた。この状況から、遺跡の東側はトレンチ１・２より、弥生時代のベース面の標高が高く、さらに弥生時代の遺物包含層が厚く堆積していることが明らかである。また遺跡の西側に位置するトレンチ６より、弥生時代のベース面の標高が低く、遺物包含層は検出できなかった。

次に、遺構では弥生時代のものは比較的希薄であったが、トレンチ４他において室町時代から江戸時代初頭にかけての石垣などの良好な遺構を検出している。これらの遺構は太田・黒田遺跡と重なりをもつ太田城跡に関わりをもつものと考えられる。

また遺物では、弥生時代から江戸時代にかけてのものを多く検出している。弥生時代では中期の遺物を中心として生駒西麓製の壺などがある。弥生時代以外では古墳時代や奈良時代、またそれ以降もほぼ連続した遺物を搬出し、太田・黒田遺跡が長期にわたる複合遺跡であることを明確にした。トレンチ４において出土した室町時代とみられる多くの瓦は太田城跡との関わりを検討できる資料として重要であり、さらにトレンチ１で出土した土製の玉は、これまで出土している鉛玉と比較検討できる資料である。

このように、本調査では範囲が狭少であったが、太田・黒田遺跡及び太田城跡を考える上で良好な成果が得られたものといえる。

（井馬好英）

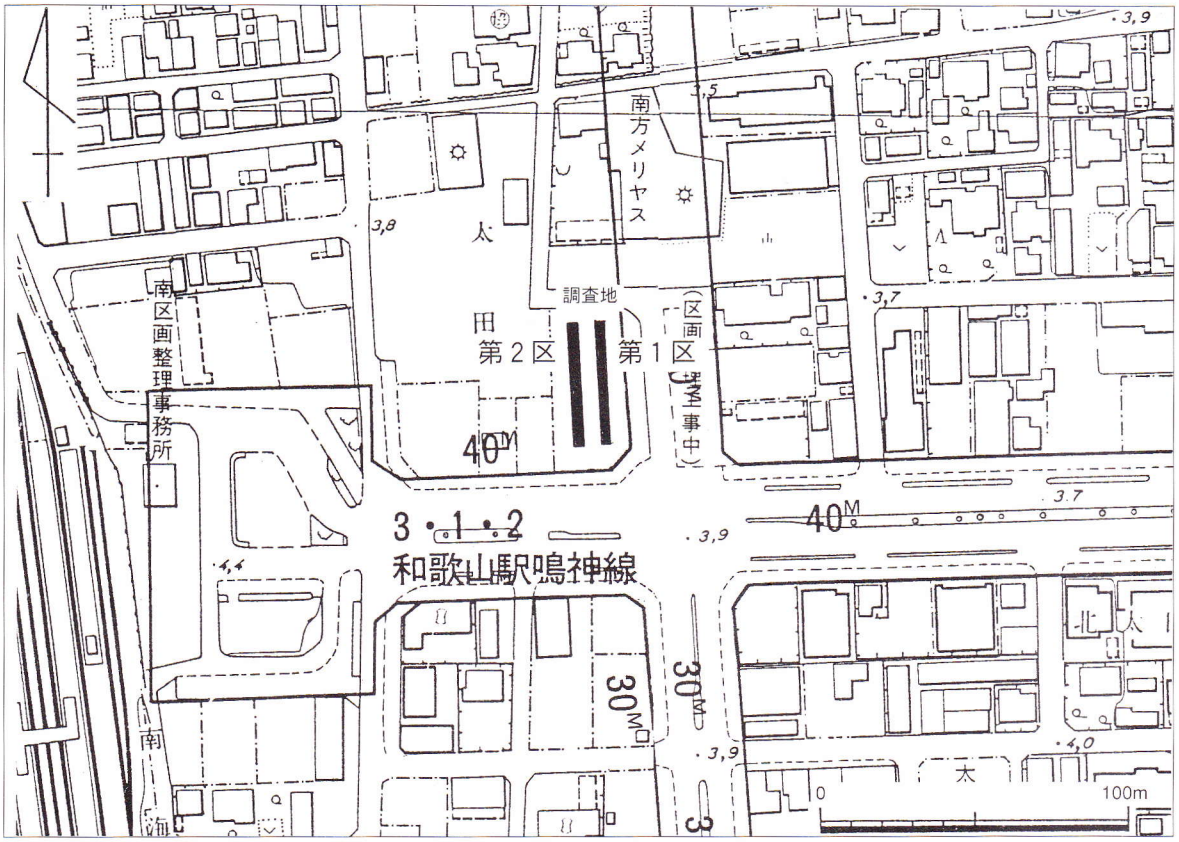
19. 太田（おおた）・黒田（くろだ）遺跡　第33次調査

調 査 地　和歌山市黒田80-１番地 他

調査面積　170m²

位置と環境

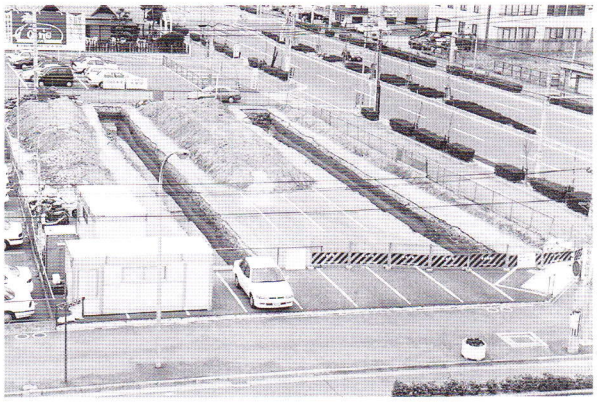
太田・黒田遺跡は紀ノ川下流域南岸の平野部のほぼ中央に立地する。遺跡は弥生時代前期から中期にかけての県下で最大規模の弥生時代集落として知られており、竪穴住居、井戸などの遺構や銅鐸、内行花文鏡、大量の弥生土器などの遺物が出土している。また、近年までの調査成果により弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている。今回の調査は、太田・黒田遺跡西端部の標高約3.7mを測る沖積平野上に位置する工事範囲内において試掘調査として行ったものである。周辺の調査はこれまでに調査地西側約150m地点で第１次調査が太田・黒田遺跡調査団により調査され、調査地南東側約100m地点で和歌山市教育委員会が第19次調査を行った。また、調査地の南側約150m地点では、第12次調査が和歌山市教育委員会、第22次及び第26次調査が本財団により行われている。第１次調査では、古墳時代の溝、第19次調査で室町時代の大規模な濠状遺構、弥生時代・古墳時代のピット・土坑・溝などが確認されている。また、第12次調査では弥生時代中期の井戸、古墳時代前期の土坑、室町時代の瓦溜め・池状落ち込み遺構（溝？）など、第22次調査では弥生時代中期の竪穴住居、室町時代の大溝、第26次調査では弥生時代前期の大溝、中期の水田遺構、室町時代の大溝などが検出されている。以上の調査成果から、調査地周辺部では弥生時代から古墳時代、室町時代の遺構が展開していたことが明らかにされている。



調査位置図

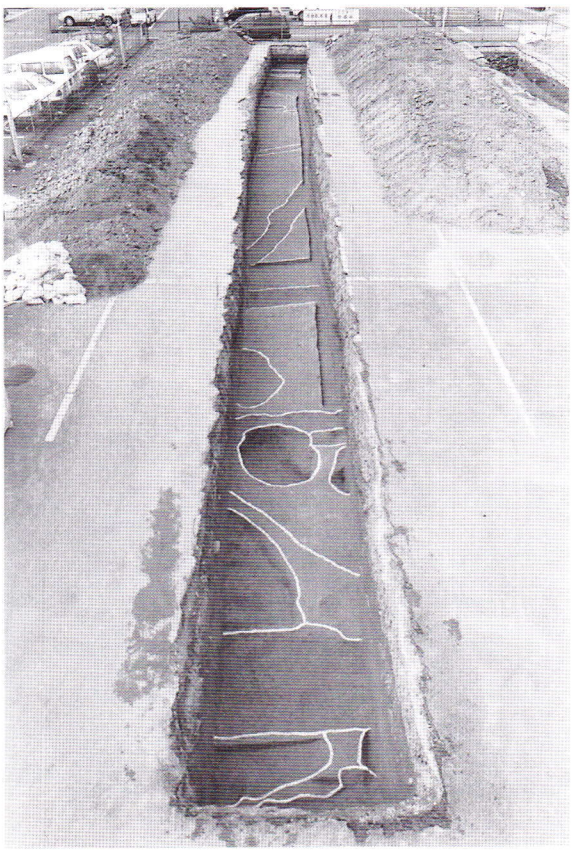
調査内容

調査は３月４日から３月21日にかけて、事務所建設工事予定範囲内において行った。調査実施は、まず幅約２m長さ約42mの南北に細長い形の調査区を東西に２箇所設定し、東側から１区、２区と呼ぶこととした。１・２区合わせて面積約170m²が調査対象となり、和歌山市教育委員会の立会のもと表土の重機掘削が行われた。その後、表土掘削の終了した調査区において当事業団が人力による発掘調査を行った。

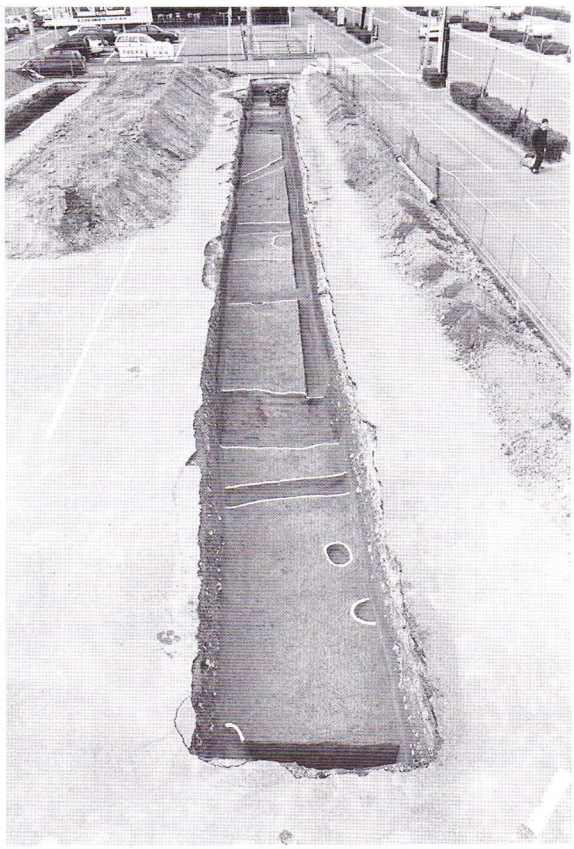


調査地全景（南西から）

調査地の基本的な土層堆積状況は現地表であるアスファルト以下、現代の整地土などが合わせて約70～90cmの厚みを持ち、本来的な地表面であったとみられる水田耕土（第１層）が約20cm、床土（第２層）が５～10cmの厚さで堆積する。その下の堆積は上から第３層（2.5Y5／3（黄褐）シルト）が約15cm、第４層（10YR5／6（黄褐）シルト）が０～10cm、第５層（10YR5／4（にぶい黄褐)粗砂混シルト）が０～30cm、第６層（2.5Y4／2（暗灰黄）粗砂混シルト）が40cm以上の厚さで堆積する。２区北端部において、一部深く掘削したが、第６層の下層に第７層（10YR3／2（黒褐）シルト）が約20cm、第８層（10YR6／6（明黄褐）粘土）が10cm以上の厚さでみられ、第６層が北側に向かって深く落ち込んでゆく状況を観察した。これは第７層堆積後の谷状地形であるものとみられる。第３層は平安時代の遺物を含み、その堆積状況から水田耕土であると考えられ、第４層はその床土に相当する層であるとみられる。第３・４層を掘削・除去後の第５・６層上面（同一面）



第２区全景写真（南から）



第１区全景写真（南から）

において古墳時代後期から平安時代までの遺構面を検出した。また、調査の終盤において調査区の一部に深掘調査坑を設定し精査した結果、第５・６層は弥生時代中期の遺物を包含すること、第７・８層は無遺物層であることなどを確認することができた。

遺構は第５・６層上面（同一面）を検出面とする遺構面において検出した溝・土坑・落ち込み状遺構などで、弥生時代から江戸時代頃までの時期のものがある。遺構面の標高は2.6～2.7ｍを測る。以下、時代順に主要な遺構を説明する。

弥生時代の遺構

〔溝21〕　１区北側で検出した。南北幅2.8m、東西に2.0m以上、深さ80cmの規模を測る。埋土中位で完形の広口壺が出土した。弥生時代中期の遺構である。

〔溝８〕　第１区及び第２区の北側で検出した。幅約1.0m、深さ約50cm、検出長約5.0mの規模を測る。溝の方向は北東から南西であり、弥生時代後期の遺構であると考えられる。

奈良時代の遺構

〔溝３〕　第１区及び第２区の北側で検出した。幅約5.0m、深さ約50cmの規模を測る。溝は南東から北西方向に掘削されており、流路方向は南東から北西である。埋土は砂が主体であり、多量の遺物が出土した。最終埋没の時期は出土遺物からみて奈良時代後期であると考えられる。

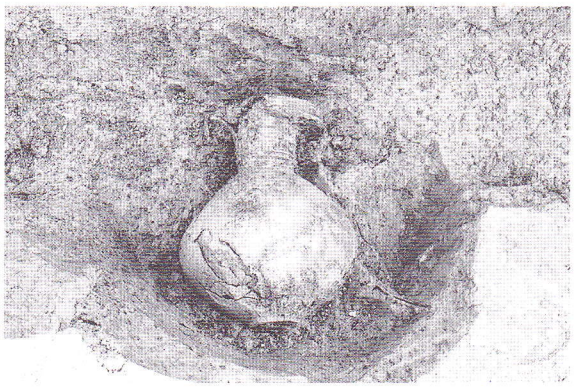
平安時代の遺構

〔溝２〕　第１区及び第２区の調査区南端から北に約12mの位置で検出した。幅2.5m、深さ25cmを測る。溝は東西方向に掘削されており、流路方向は東から西である。用水路と考えられる。

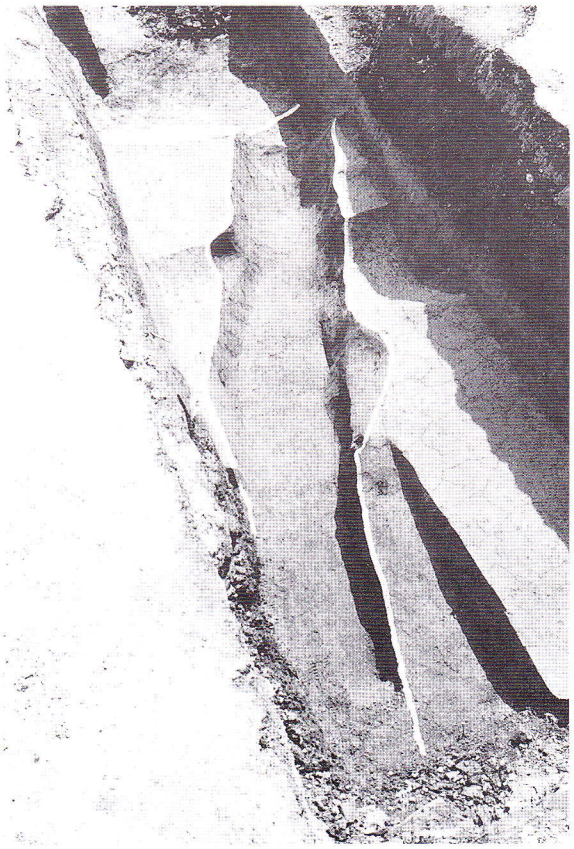
江戸時代の遺構

〔溝１〕　第１区及び第２区の南側で検出した。最大幅約2.0m、深さ約20cmを測る。溝は東西方向に掘削されており、溝３とほぼ同一方向である。溝３と同様に用水路と考えられる。

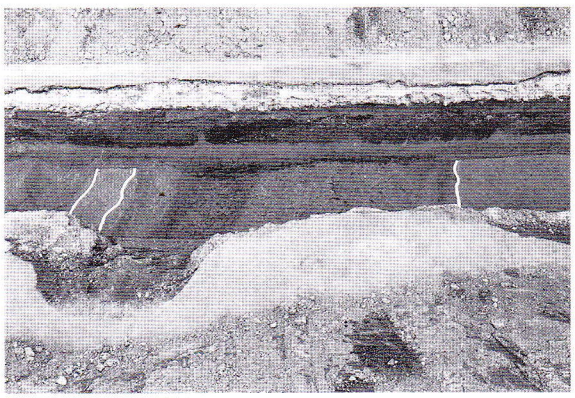
遺物は、弥生時代の土器・石器、古墳時代の土



第１区　溝21遺物出土状況（西から）

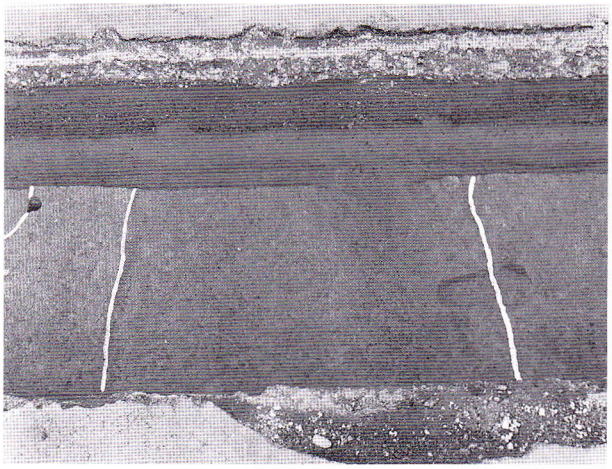


第１区　溝８（南西から）

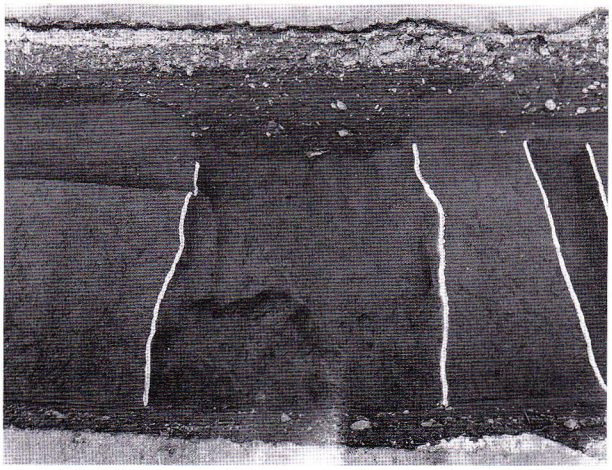


第１区　溝３（西から）

師器・須恵器、平安時代の黒色土器、鎌倉時代の瓦器、江戸時代の陶磁器類などが出土した。



第１区　溝２（西から）



第１区　溝１（西から）

まとめ

発掘調査の結果、調査区北端部分において弥生時代中期の溝３、弥生時代後期の溝８などを検出した。古墳時代末期から奈良時代の遺構は調査地全面に存在し、特に調査区北端部分において検出した溝３は幅約5.0m、深さ約50cmを測る規模の大きなものである。第１区においては底面は標高2.20m、第２区は標高2.10mを測ることから、南東から北西の方向に水が流れていたものとみられる。この遺構は大量の砂で埋没しており、埋没時期は出土遺物から奈良時代後期と考えられ、最終的に洪水により埋没したものと考えられる。堆積土の上層から遺物が多量に出土し、これらの遺物を用いたであろう集落の中心はこの溝の上流（南東側）に展開していたものと思われる。そのことから、当調査地は奈良時代における集落縁辺部にあたるものと推定できる。平安時代の溝２は和歌山平野における条里制土地区画の復原案（中野榮治案）に当てはめて考えるならば、「名草郡４図８里１坪」と「名草郡４図８里１２坪」の坪境溝に当たり、溝２と類似する上層堆積土の第３層は平安時代の耕土に相当するものである。この事実は、従来からの歴史地理学的な手法である現況の地形から推定していた条里復原案に対して、実証的な資料を提示することができたという点で貴重な成果を得ることができたといえる。また、江戸時代の溝１は位置を南に４m移動するが、方向性からいうならば溝２と同様の性格のものであるといえる。

以上、奈良時代の集落が調査地の南東側に展開していたものと推定することができたこと、調査地は条里制土地区画の復原案から「名草郡４図８里１坪」と「名草郡４図８里12坪」の一部に当たり、溝２（平安時代）及び溝１（江戸時代）は坪境溝に相当するものと推定することができたことなど、調査によって貴重な成果を得ることができた。

（北野隆亮）

【参考文献】

『紀伊国の条里制』　中野榮治　古今書院　1989年

『和歌山市史』第１巻　和歌山市史編纂委員会　1991年

『太田・黒田遺跡 第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995年

『太田・黒田遺跡 第33・34次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年

Ⅲ．普及啓発活動

1．書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

第13集　『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』（平成７年11月）

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報３』―平成４（1992）・平成５（1993）年度―（平成８年３月）

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報』―平成７年度―（平成８年３月）和歌山市教育委員会発行

2．和歌山市文化財ニュース発行

文化財に対しての理解を深めてもらうために、市内の小、中学校と一般の方々を対象に『和歌山市文化財ニュース』を発行した。

『和歌山市文化財ニュース』No.16（1995年４月）「城下町の発掘調査」

『和歌山市文化財ニュース』No.17（1995年８月）「鳴神Ⅳ遺跡の発掘調査」

『和歌山市文化財ニュース』No.18（1995年11月）「太田・黒田遺跡の発掘調査」

『和歌山市文化財ニュース』No.19（1996年２月）「城ノ前１号墳について」

3．報告会等の開催

和歌山市教育委員会との共催で報告会等を実施した。

太田・黒田遺跡第26次調査の現場報告会

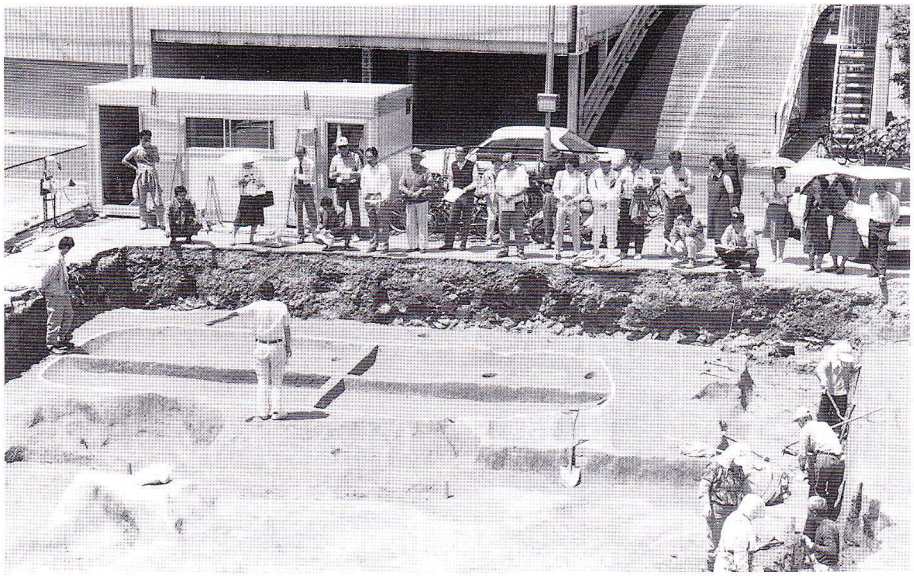
平成７年５月６日（土）　発掘調査現場　　参加者約50名

雄湊小学校児童対象の埋蔵文化財説明会

平成７年５月19日（金）　雄湊小学校体育館　参加者５・６年生児童約100名

太田・黒田遺跡第26次調査報告会

平成８年２月19日（月）　和歌山YMCA会館　参加者約30名



太田・黒田遺跡第26次調査　現場報告会風景

平成10年３月31日

和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報５

―平成７年（1995）年度―

編集・発行　㈶和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　西岡総合印刷株式会社

Ⓒ ㈶和歌山市文化体育振興事業団　1998

太田・黒田遺跡　広鍬出土状況